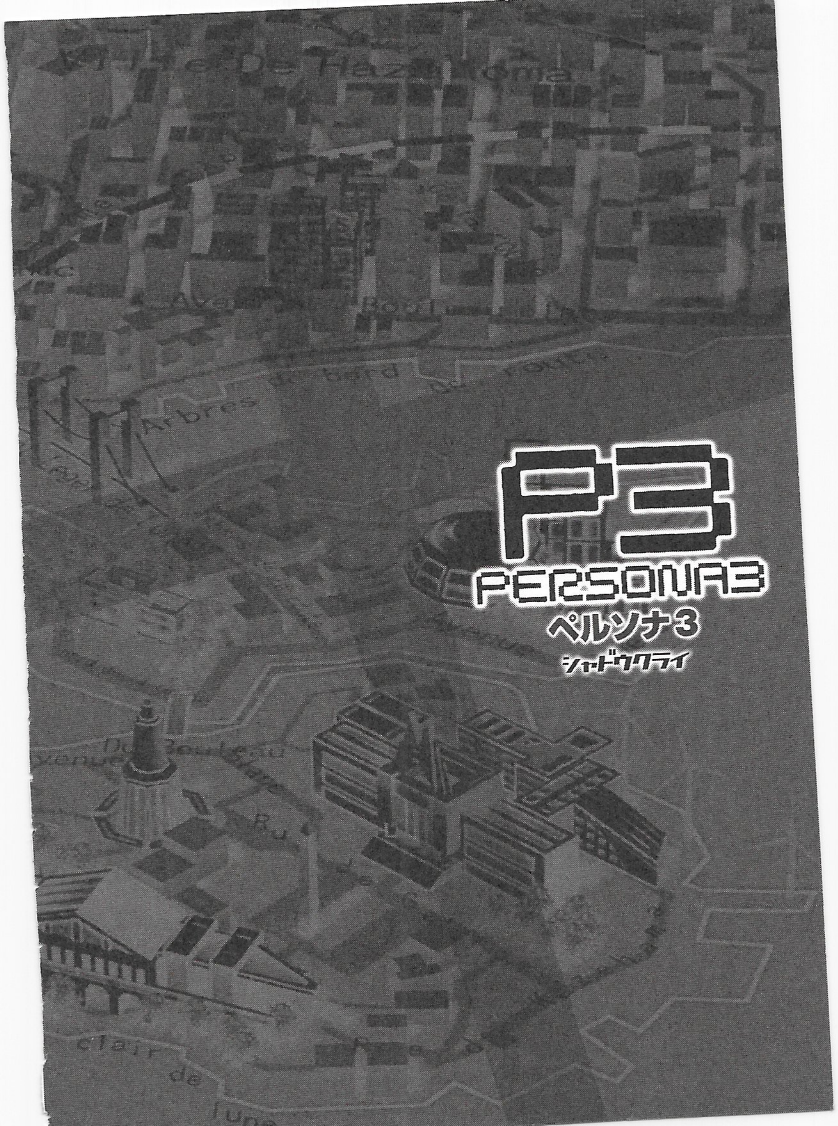
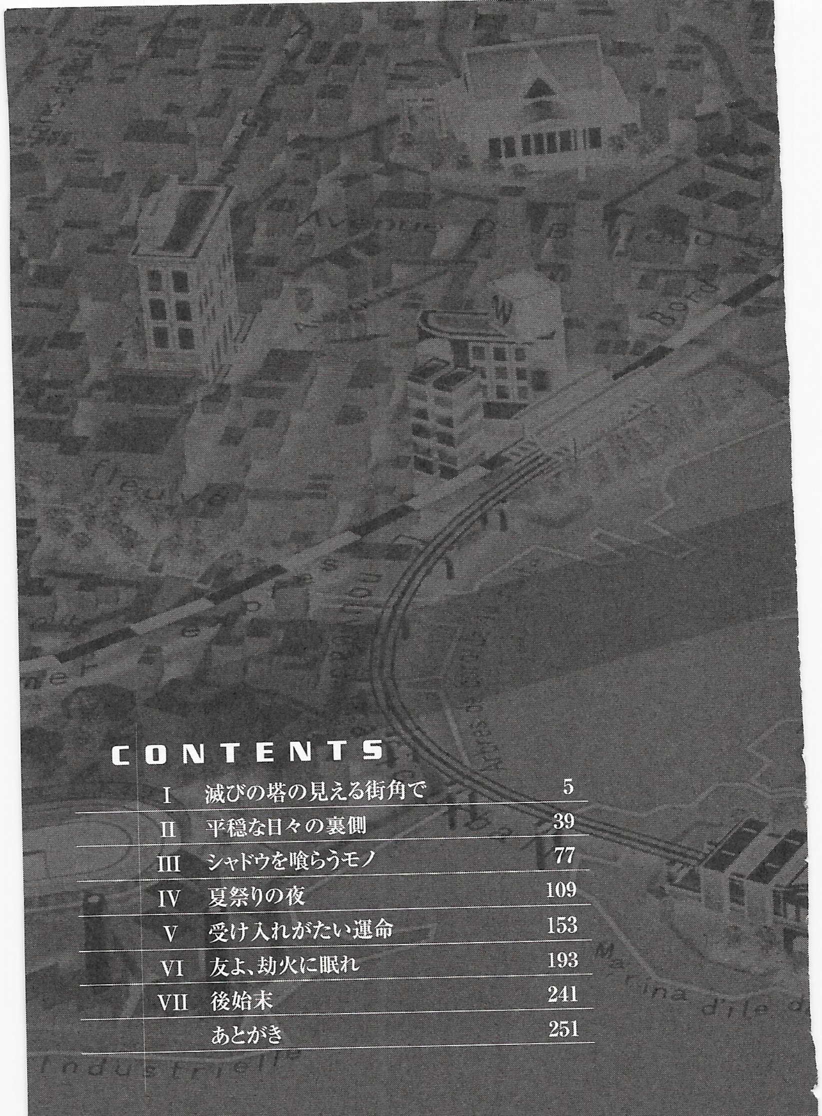
ペルソナ3

シャドウクライ

藤原健市

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫

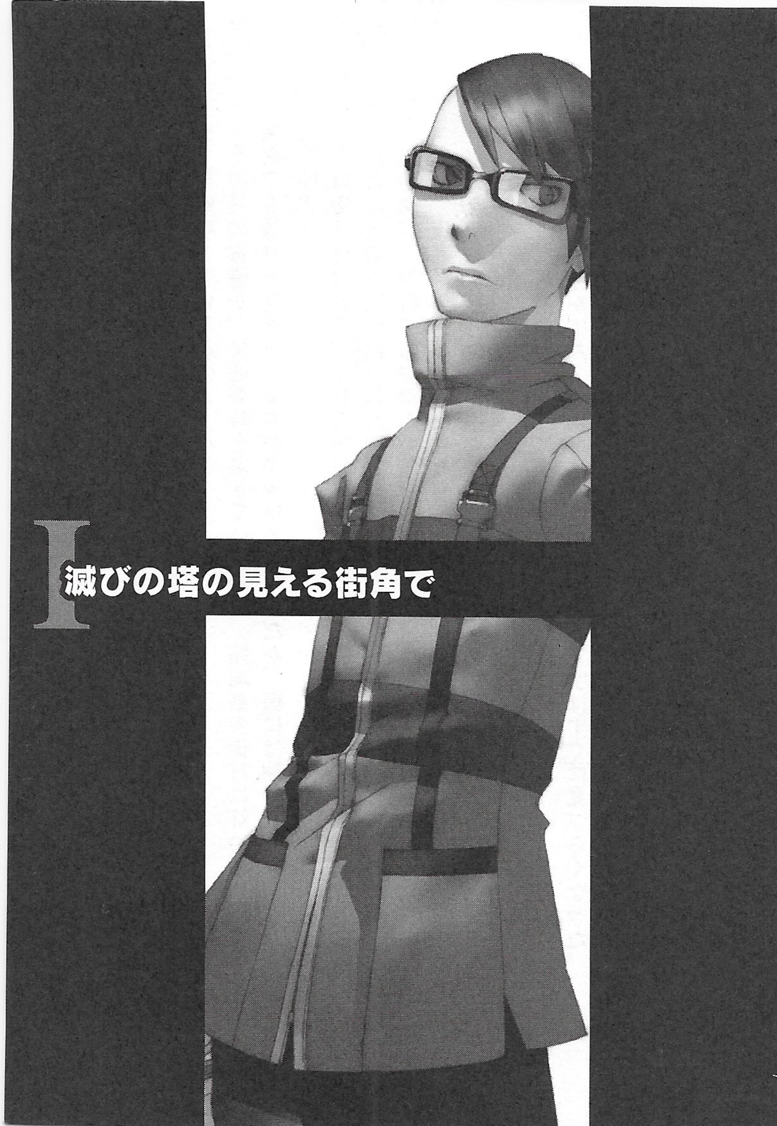

P3
PERSONA3
ペルソナ3
シャドウクライ



CONTENTS

P3

PERSONA3



I 滅びの塔の見える街角で

奇妙な緑色の燐光（りんこう）を湛（たた）えた夜空。

その頂点に、わずかに欠けた十六夜（いざよい）の月が佇（たたず）んでいる。

気味悪いほどに明るく輝くその月には、異様なまでの存在感がある。まるで、照らす全てを威嚇（いかく）しているかのようだ。

その月の影響か。午前零時を過ぎているのに、路地裏の街灯に灯っているものはなく、深夜でも通りを行き交う車両が多少はあるはずだが、街には物音一つない。

〈影時間（かげじかん）〉。

今はそう呼ばれる、今日と明日との狭間（はざま）に隠された怪異の刻（とき）である。

ほとんどの人間が棺（ひつぎ）に似たオブジェと化し、あらゆる機械が停止するその刻の中——

路地裏に、対峙（たいじ）する影があった。

「住所、氏名、年齢、その他もろもろ。おまえで間違いないな?」

眼鏡を掛けたその少年は、数歩前にいるブランド物のスーツを着た若い男の足下に、左手で一枚の紙を放った。

血のような赤黒い水たまりに、紙が落ちる。

紙に赤い液体が染み、印刷されていた顔写真や文字はすぐに見づらくなった。

だが、スーツ姿の男には充分に内容が見て取れたらしい。

男の表情と顔色に、疑問と恐怖が入り交じる。顔に滲（にじ）む汗は、真夏の夜の蒸し暑さのせいではないだろう。男は背筋に寒気さえ感じているはずである。

「俺の写真、俺の名前——俺を殺すって。どういうことだよ、これは」
男の言葉通りのことが、紙には印刷されていた。
紙は、この男を殺してくれという依頼書だったのだ。
「どないもこないもない。ただの自業自得（じごうじとく）や」
眼鏡の少年は、上着のポケットからオレンジほどの大きさの丸い物体を取り出すと、それを片手でお手玉をするようにもてあそび始めた。
空に放るたび、金属のボディに丸い針金の輪がぶつかり、ちりんちりんと音を立てる。丸い輪は、発火装置の安全ピンを引き抜くためのものだ。
彼が無造作に扱っているものは、手榴弾（しゅりゅうだん）だ。
少年——ジンは、つまらなそうに言った。
「依頼人は、おまえにさんざん食い物にされた女や。復讐代行の定番過ぎて、眠とうなるわ」
復讐代行。依頼に従い標的を消す——金で請け負う、闇の仕事だ。ジンは復讐代行を請け負うサイトを運営している。
復讐代行のジン。インターネットの暗部では、知られた名だ。
「復讐の代行って、お、おまえら何者だ！」
男は噂話（うわさばなし）でもジンを知らないようだった。ジンは先ほどよりもさらにつまらなさそうに言う。

「わしらか。〈ストレガ〉の子供と呼ばれたこともあったが――そないなことは、おまえにはこれっぽちも関係あらへん話や」

ストレガ。

その言葉の意味を、ジンはあまり説明したくない。話したところで、一般人に信じられるはずのないエピソードだからだ。

「関係ない話なんかするなよっ、わかるように話せ、この野郎」

この野郎。その男の言い様に、ますますジンは説明する気が失せた。

「わかるように、か。せやな。わしらにわかるのは、おまえがたいがい阿呆っちゅーことやな」

「阿呆だとおっ？」

頭に血が上ったか、顔を赤くして怒る男を、ジンは鼻で笑った。

「おまえも阿呆なら依頼人も阿呆や。ホストに騙されるなんてな。そんな女に恨まれるなんて、ほんまにおまえ、阿呆や。なあ、タカヤ」

ジンは、隣にいる長髪の青年を横目で見た。

裸の上半身。病的に肌の白いその両腕に、手首から肩に至るまで、絡み合う蛇のようなタトゥーが施され、ジーンズの太い革ベルトには、巨大なリボルバー型拳銃が無造作にねじ込まれている。

「馬鹿にするものでもありませんよ、ジン。愛はつまり憎しみであり、憎しみは愛であ

る……そう言ったのは、古いイタリアの哲学者でしたか。おめでとう。依頼者は、殺したいほどにあなたを憎んだ。すなわち、それほどにあなたを愛したということです」

大仰な仕草で、タカヤは標的のホストの男に拍手を送った。

男が、異様な物を見るような目をタカヤに向けた。タカヤの腰にある拳銃に気付き、膝が震え始める。危機感が一気に増したらしい。

「……意味、わからない」

タカヤの隣で、レースとフリルの多用された豪奢なゴシックロリータ様式の白いドレスに身を包んだ少女が、不機嫌そうに呟いた。

「いずれあなたも理解する日が来るかもしれませんよ、チドリ」

「そんな日、来なくていい」

剣が刺さったような飾りのあるヘッドドレスが異様な、ゴスロリ服の少女——

チドリはやはり不機嫌そうだった。笑えば華やかだろう綺麗な顔には、不快感が浮かんでいる。

「今日はもう眠いから、帰りたい……シャワー浴びたい。早く済ませて」

「そうですか」とタカヤが拍手をやめ、ベルトの拳銃に手を伸ばした。

「せやな」とジンが頷き、手榴弾のお手玉をやめた。

「こないなクズに長々とつきあえるほど、わしらの時間は安うない——ほな、選べ。銃殺と爆死。どっちがええんや？」

銃殺ならタカヤが拳銃で撃つ。

爆死ならジンが手榴弾で始末する。

詳しく説明されなくても、選択を迫られた男にはそうわかっているようだった。

「そそ、そんなもの選べるわけないだろ!! 復讐の代行だあっ? 寝言は寝てからほざきやがれ、何で俺がそんなのされるんだよ、お、おかしーだろーがっ!!」

焦燥感(しょうそうかん)を滲ませながら男が毒づいた。

は、とジンは鼻で笑った。

「寝言ゆうとるのは、おまえや。ゆうたやろ、どないもこないもない……と。おまえが選べるのは死に方のみや。それかて出血大サービスなんやで」

「あなたは影時間に堕(お)ちました」とタカヤ。

「しかし、私たちのような力に恵まれはしなかった。残念ですが、あなたの終焉(しゅうえん)は決定事項です。明日か、明後日か。はたまた一週間後か……いずれにしても、次の満月を目にすることは、おそらくはもうありません。今宵(こよい)死んだところで何の問題も――」

男はタカヤの言葉を最後まで聞かずに、

「ふざけんじゃねーよっ!!」

怒鳴り、身を翻(ひるがえ)した。即座に走り出す。

「あのクソ女に言っておけ、てめーこそ自業自得だろって!」

捨て台詞(ぜりふ)を吐き、男がこの場から逃げ去る――

ジンたちが、それを許すわけがなかった。
やれやれとジンが肩をすくめる。
「銃殺がお好みか。ほなタカヤ、頼んます」
「いいでしょう」
タカヤが拳銃を片手で構えた。
グリップから銃口までの長さが四〇センチに迫り、重量が二キログラムを超える、拳銃としては常軌(じょうき)を逸(いっ)した巨大な代物だ。弾丸も巨大なため、銃の見かけに反して弾は五発しか装填(そうてん)できない。
スミス&ウェッソン・M(モデル)500。500S&Wマグナム弾という専用の弾丸を用いる世界最強の拳銃の引鉄を、タカヤは片手で構えたまま平然と引いた。
銃声が路地裏に轟(とどろ)き、瞬間、銃口から炎が迸(ほとばし)った。
発砲の反動でタカヤの腕が跳ね上がる。
よほどの熟練者でも両手で構えないと扱えない大砲じみた銃を、不健康なまでに痩身(そうしん)のタカヤが簡単に片手で操った。
数十メートル先。スーツの背に大穴の空いた男が、悲鳴もなく前のめりに倒れる。
確かめるまでもない。即死だ。
屍体(したい)を始末する必要はない。この影時間に起きた事件は、誰かの仕業か、それとも超常的な現象なのか、それはわからないが、何故(なぜ)か事実がねじ曲げられる。

撃たれて死んだ男は、明日の報道ではおそらく交通事故あたりが死因に変わるだろう。

「これで彼も、この滅びの夜の一部となりました——」

発砲でまだ熱を帯びている拳銃を、タカヤはベルトにねじ込んだ。

「帰りましょう」

タカヤが踵（きびす）を返し、屍体とは逆の方向へと歩き出す。

無言でチドリがタカヤに続く。

ジンは足下に置いていたトランクを手にすると、二人の背を追った。

一瞬だけ足を止め、ジンは振り返った。目を細め、暗がりに伏して動かない男を見る。

「かかわった女のせいで死ぬ。阿呆な死に方や」

言葉に弔（とむら）いの思いなど欠片（かけら）もない。

あるのは、侮蔑（ぶべつ）のみだった。

ストレガたちの行く路地裏の路肩に、ぽつりぽつりと西洋の棺桶（かんおけ）としか表現できないオブジェが立っている。これらは、影時間に適応していない人間が変化した姿だ。

象徴化という現象である。象徴化した人間にとっては、この影時間という怪異と理不尽が支配する時間は存在しない。今日と明日は当たり前のように続いていく。

棺となった人々は、世界が毎夜毎夜、つかの間の仮死を迎えていると知らずに生きていける。それは幸福なことだ。

いつか必ず訪れる、世界の死。

たとえ仮にであっても、その体験は人の精神に様々な影響をもたらす。

ある者には不安を。ある者には使命感を。ある者には悲哀を。

そして、ある者たちには——

ストレガたちには、愉悦（ゆえつ）と恍惚（こうこつ）を。

「今宵も滅びの塔は美しい」

ゆらゆらと軽く酔ったような歩調で歩きながら、タカヤが言った。

その視線は、正面にそびえるいびつな塔から離れない。

路地裏のいびつな街並みの向こう。

月下に悠然（ゆうぜん）と佇むその巨大な塔の名は〈タルタロス〉。

ギリシア神話の冥府（めいふ）の奥底を意味する言葉を名に持つ、影時間を象徴する存在だ。

ストレガたちのいる場所からタルタロスまでは近く、その怪異の塔は、異常なまでの存在感を放っている。

「どうでしょう。たまには前に行き、塔が沈むまでの時間、名残（なごり）を惜しみませんか？」

影時間には機械が止まり、時計の針も午前零時を示したままで停止する。

刻が止まったかのように思える現象ではあるが、影時間にも終わりはある。

秒針は再び刻を刻み始め、その時にはタルタロスの姿も消える。

後に残るのは、月光館（げっこうかん）学園の学舎だけだ。

タルタロスは、月光館学園の施設が変貌して出現する塔なのである。
タカヤと肩を並べているジンは「せやな。たまにはええか」と頷いた。
チドリは黙ってついてくる――
「待って」不意にチドリが足を止めた。
「何や」ジンはチドリを振り返った。
チドリが無言で見据えているのは、ジンの肩の先。進もうとしている路地の奥だ。
表情が乏しいチドリの胸中は、付き合いの長いジンでも簡単に読み取れない。
「どないしたんや」
ジンが再び訊ねた時だった。
チドリが両手で、ばっとスカートをはためかせた。
次の瞬間。マジックのように、左手に分銅と鎖のついた手斧が、右手にはオートマチックピストルに似た形状のそれが出現した。
それは、拳銃ではない。
〈召喚器〉である。
影時間に選ばれた彼らの、真の力を精神の奥底から呼び覚ますための特殊なツールだ。
その力は〈ペルソナ〉。
真実の己の姿を映す、もう一人の自分とも呼ぶべき超常の存在だ。
チドリは、召喚器の銃口をためらいなくこめかみに押し当てた。

「おいで、〈メーディア〉……」

無感情に呟き、引鉄を引く。銃口から弾丸は放たれないが、衝撃がチドリの頭を揺さぶった。

血しぶきの代わりに蒼いガラスに似た破片が虚空に散らばり、チドリの分身が隣に出現した。

女の体に、羊の頭部。右手にはダガーを、左手には炎に満たされた杯を持つ異形。

メーディア――悪名高いコルキスの魔女の名を持つ、チドリのペルソナだ。

「いきなりメーディアなんぞ呼び出して、ほんまに――」

「黙っていて」

チドリはジンの質問を遮って、正面の闇を見据えた。

メーディアの紅い瞳が、人には見えないモノを見通す――

メーディアは感覚に優れたペルソナだ。人では捉えられない存在を、敏感に察知する。

そしてその感覚を、チドリはメーディアと共有している。

すなわち、チドリは見えざる怪異を感じ取れるのだ。

「……いる」

チドリがスカートの中に召喚器をしまった。手斧を持つ手がぴくりと動く。

「何やて？〈シャドウ〉か？」

ジンに答えず、チドリは身を捻って手斧を前へと投げつけた。

じゃらっと鎖の音を引きずって、手斧が正面の闇を穿つ。

闇の中で何かが動いた。手斧を避けたのだ。アスファルトに突き刺さった手斧の鎖を勢いよく引き、チドリが武器を手元に戻す。

その動作に合わせたかのように、甲高く耳障りな奇声を放ち、何かが闇からチドリに飛びかかった。

粘菌のような黒い体を持つ、〈臆病のマーヤ〉と呼ばれるシャドウだ。

シャドウ。これが、人間に代わって影時間を支配する怪異である。

そしてペルソナ使いであるストレガは、シャドウの天敵同然の存在だ。

遭遇すれば必ず戦いになる——今のように。

「メーディア。あれを殺して」

チドリの命令に従い、音もなくメーディアが前に出る。

飛びかかってくるシャドウには、石とも骨ともつかない硬質な物質でできた仮面がついている。その仮面に、メーディアが右手のダガーを突き立てた。

欠片を散らしてひび割れる仮面。さらに、メーディアの左手にある杯の炎が溢れ、蛇のようにシャドウに絡みつく。

一瞬にしてシャドウは痕跡も残さず燃え尽きた。

同時に、メーディアの姿も霧のように消える。

ペルソナは一つ命令をこなすごとに、ペルソナ使いの精神に戻ってしまう。

その際に生じてしまう隙(すき)は、ペルソナ使いの致命的な欠点である。

「……」チドリが舌打ちした。

奥の闇の中から、倒したモノと同じ種類のシャドウが次々と這(は)いだしてきたのだ。数は、少なく見ても一〇を超えている。

「こないなところで雑魚シャドウの群れか。タルタロスが近いせいやろな」

焦(あせ)りを感じさせない口調でジンが言った。片手でもてあそんでいた手榴弾の安全ピンを歯で噛(か)んで引き抜き、ピンを吐き捨てつつ手榴弾を前に放る。

手榴弾は、一〇メートルほど離れたシャドウの群れの真ん中に落ちた。

こん、と手榴弾がアスファルトを叩く音が路地裏に響く――

直後。轟音(ごうおん)が大気を揺さぶり、閃光(せんこう)が空を焼いた。

「爆薬の調整、ちょいと間違うたか」

ジンの使っている手榴弾は、彼の手製だ。目的に応じて威力を変えるように爆薬を調合しているのだが、上手くいかない場合がある。

「これじゃ花火や。配合、考え直さんとあかんな」

ぼやくジンの眼鏡のレンズに、まったく数の減っていないシャドウの群れが映った。

「しゃあないな」

ジンは、普段はシャツの裾で隠している、腰の後ろのホルスターから召喚器を抜き、銃口を頭に添えてトリガーを絞った。

「出番や、〈モロス〉!!」
衝撃が魂を揺さぶる。精神の奥で、じゃらりと鎖を引きずるような音をジンは聞いた。
メーディア召喚と同じ現象が起こり、その機械仕掛けの神はジンの前に出現した。
ステンレスの独楽を重ねたような姿。それぞれの独楽には数字や模様が刻印されていて、ぼんやりと発光しながら独楽は回転している。
ペルソナ、モロス。ギリシア神話の夜の女王〈ニュクス〉の子のひとつであり、死を支配する神だ。モロスに刻まれている数字は、いつか尽きる命の刻を示している。
「焼き払え！」
ジンはモロスに命じた。体を構成している三つの独楽の回転速度が上がる。
シャドウの群れが、それそのものが燃料になったかのように発火した。
一つ残らずシャドウが炎に包まれる。キィキィと薄気味悪い悲鳴を上げるシャドウが、それでもジンたちを襲おうと動いた。
す、とモロスが消滅する。
「もう一度や」
再び召喚器を使おうとしたジンの肩を、タカヤが摑んだ。
「今夜は気分がいい——ここは私が引き受けましょう」
タカヤが出る幕でもない。
口から出かかった言葉をジンは飲み下した。

引き受けるとタカヤが言った以上、出る幕がないのはジンのほうだ。
ジンにとって、タカヤの言葉は絶対に限りなく近いのである。
数年前。ジンはタカヤによって自由を得た。その自由はタカヤのためにのみ使うべきだとジンは信じて疑わない——タカヤのために。それがジンの生存理由とさえ言える。
タカヤの希望を叶えることが、ジンの望みなのだ。
「ほな任せます」
ジンはタカヤに場を譲った。
入れ替わりでタカヤがジンの前に出て、唐突にアスファルトに膝をついた。
「ぉぉぉ……おおお——」
わなわなと震える両腕を、何かを求めるように掲げるタカヤ。彼には召喚器が不要だ。己の意志のみで、ペルソナを召喚できる。
タカヤは目を閉ざし、その名を呼んだ。
「——〈ヒュプノス〉——」
タカヤの頭上に異形が出現した。
黒曜石の欠片を集めて作られたような黒い翼。その翼から、血管の束でぶら下がっている青白い肌の少年——だらりと手足を下げ、うなだれている。
ヒュプノス。ジンのモロスと同じニュクスの子のひとつ、眠りを司る神。
このタカヤのペルソナが授ける眠りは永遠のもの。すなわち死だ。

「全てに等しく安らぎを」
　タカヤが大きく目を見開いた。
　その刹那(せつな)、ストレガたちへと迫っていたシャドウに衝撃が降り注いだ。
　物理的な圧力を伴った、黄金の炎。
　旧約聖書にある、ソドムとゴモラを滅ぼした天の火だ。
〈メギド〉というヒュプノスの攻撃スキルである。この力の前には防御も耐性も関係ない。雑魚シャドウなど、荒ぶる力の奔流(ほんりゅう)で死地へと流されるのみだ。
　ちりちりと炎の余波が消えていく。シャドウも光の塵(ちり)と化して失せていく。
　そしてヒュプノスの姿が消えた時、辺りは静まり返っていた。
　ゆっくりとタカヤが立ち上がり深く息をつく。強い力をペルソナに使わせた反動に、全身を苛(さいな)まれていた。
「少し疲れました」
「……もうシャドウはいないわ」
　索敵(さくてき)を得意とするチドリが戦闘終了を宣言した。
　シャドウの群れとの遭遇から一分も過ぎてはいない。まさしく瞬殺だ。
「寄り道にもならへんかったな。さて、タルタロス見物に――」
　再び歩き出そうとしたジンを、チドリが制する。
「待って」

「またか。今度は何や？」
「まだそこに誰かいる……今度は人間」
「人間？　こないな場所でシャドウが出たんやし――〈影人間〉か？」
影人間。魂から負の部分が抜け落ちてしまい、無気力状態に陥った人間のことだ。
この抜け落ちた負の部分が、すなわちシャドウである。
ストレガが一掃したシャドウは、元は人の魂の一部。
そしてストレガの使う力、ペルソナも人の魂の一部。
ペルソナとシャドウは、本質的には同じ存在なのである。
先ほどストレガに滅ぼされたシャドウは、いずれ元の人間の精神に帰る。そうなれば影人間は気力を取り戻す――元に戻るのには多少の時間を要するが。
「違う。影人間じゃない……この感じ。似てる……ペルソナ使い……」
「ペルソナ使いやて!?　まさか昨夜の連中か!!」
昨日のことだ。ジンとタカヤはタルタロスを消し去ろうと行動しているペルソナ使いのチームを、ある場所に閉じこめた。
今後そのチームと、敵対し続けていくだろうと覚悟はできている。
連中が、じっと閉じこめられたままでいるわけがないと、ジンは承知していた。
「奴らなら、ぶっ潰すまでや」
召喚器を腰の後ろのホルスターに戻すと、ジンは新たな手榴弾を上着のポケットから

取り出した。いつでも安全ピンが抜けるように胸元に掲げ、チドリの視線の先にある暗がりを見据える。

「出てこいや。今度はきっちり地獄見せたる」

ざり、と靴裏がアスファルトでこすれる音がかすかに聞こえてきた。

闇の向こうから、わずかながらに息づかいも感じられる。

——間違いなく、誰かがおる。

己の感覚でジンもそう確信した。

「来ないなら、こっちから行くで」

その言葉に呼び込まれたかのように、相手が駆け出した。建物の影から月明かりに照らされた路地裏に飛び出してくる。

全身黒ずくめ。毛先の不揃いな長めの髪が目元を隠していて、顔はよく見えない。

その右手に銀の煌（きら）めき——ナイフを持っている。折りたたみ式なのか、小型のナイフだが、刃に代わりはない。急所を狙われたら最悪死ぬ。

「下がれ、タカヤ」

ジンはタカヤをかばうように前に出た。

「止める」チドリが手斧を投げた。

機敏な動きで黒ずくめが手斧を避ける。瞬間的に足を止め、すっ飛んでいく最中の手斧の鎖を素早く片手で掴み、間髪入れずに引っ張った。

「あ」
　チドリがつんのめってバランスを崩し、転倒する。
　その時には、黒ずくめは鎖を放して再び走り出していた。ナイフを振りかざして襲いかかる。ターゲットは転んで無防備な姿をさらしているチドリ――
「させへん、このダボが！」
　ジンは手榴弾の安全ピンを歯で引き抜き、黒ずくめに投げつけた。
　黒ずくめはナイフで手榴弾を弾(はじ)いた。
　斜め後に飛んだ手榴弾が爆(は)ぜ、閃光と爆圧が広がる。
　背中を蹴飛ばされたような衝撃で黒ずくめがたたらを踏み、まばゆい光がジンたちの影を路地裏に焼き付ける。
　黒ずくめが、閃光で一瞬はっきりと浮かび上がったジンの顔を見て、動きを止めた。
　ゆっくりとした動作で黒ずくめが体勢を整えたが、もはや襲撃の意志は感じられない。ナイフを持った手は、だらりと下げられている。
　立ち上がるチドリを、黒ずくめはもう襲おうとしない。やはり敵意はないらしい。
　黒ずくめは荒い息を飲み込むようにして静めた後、口を開いた。
「――おまえ。ジンか？」
　見知らぬ相手に唐突に名を問われ、ジンは警戒した。すぐに答えず、一歩下がって改めて黒ずくめを観察する。

痩せぎすの男だ。体格はタカヤとよく似ている。黒い服はトレーニングウエアだった。顔の上半分を隠している前髪を、男はナイフを持っていないほうの手でかきあげ、素顔を晒した。

「俺だ、俺。何年ぶりか——俺の顔、忘れたとか言わないよな」

気安い口調で話しかけてきた男の左目の上に、額からまぶたの上まで引きつった傷痕がある。男が前髪を伸ばしているのは、この傷を隠すためだったらしい。

その傷で、ジンは思い出した。

「……イズミ……か？　イズミなんやな？」

イズミ。数年前、ある施設で一緒に暮らしていた男だった。

その施設では『ペルソナ使いを人工的に造り出す』という目的で身よりのない子供を集め、様々な非人道的な実験が行われていた。

ストレガ計画。

それが、人工ペルソナ使い研究プロジェクトの名称。ストレガとは、あるイタリアの古い伝説に登場する、魔女を意味する言葉だ。

ジンたちは、そのプロジェクトからの脱走者である。

イズミは、そのプロジェクトで行われた「人工ペルソナ使いチームによるタルタロス内部探索実験」で、行方不明になった数名の子供の内の、一人だ。

あの、シャドウという怪異が巣くうタルタロスの中で行方不明になったのだ。

研究者たちも、そしてジンたちも、イズミは死んだと信じて疑っていなかった。
「生きとったんか、おまえ！」
「おいおい。幽霊にでも見えるのか？」
イズミが、ばちんと音を立ててナイフをたたみ、ズボンのポケットにしまった。
冗談っぽく言ったイズミに、思わずジンは提げていたトランクをその場に投げ出して駆け寄った。両手でイズミの肩をばんばんと乱暴に叩く。
「ほんまや、ちゃんと実体あるな！」
今度はイズミが軽くジンの額をはたく。
「相変わらずいいデコしてるな、おまえ……ちょっと生え際後退したか？」
「余計なお世話や！」
イズミの手を払ってジンが離れた。広い額をからかわれて、むっとした表情をしたが、それは一瞬だけのことだった。思いがけない再会に、ジンの頬が再び緩む。
「ほんまに……よう生きとった。今まで、どこで何しとった？」
「や、俺のことなんか話すと長くなるだけで面白くもないって——そんなことより。そっちはタカヤと……チドリだったか。おまえたちも無事だったんだな！」
イズミは声を弾ませて、ジンの肩越しにタカヤとチドリを交互に見た。
タカヤの口元には薄い笑みが浮かんだが、チドリは怪訝そうに眉根を寄せている。
「ジンの友達でも……私はあなたと親しくない。気軽に話しかけないで……軽い男は好

きじゃないから」

「……俺、そんなに軽ぃか？」

首を傾げるイズミに、チドリは無言で頷くと鎖を引っ張って手斧を手元に引き戻し、それを袖の中に収めた。暗器。手斧はそう呼ばれる隠し武器の一種である。

そのまま突っ立ったチドリを残し、タカヤがイズミに歩み寄る。

「実によい夜となりました。力に選ばれし者との再会は、何より喜ばしいことです――積もる話もあるでしょう、ついてくるといい。落ち着ける場所があります」

タカヤはイズミをアジトに案内するつもりのようだ。ジンに反対する理由はない。チドリが何の意思表示もしないため、タカヤは先頭に立って歩き出した。

「行こか」

ジンはイズミを促し、置き去りにしていたトランクを取りに戻った。

「いいのか？」とイズミ。

「タカヤがええと言うんやから、ええに決まっとる。余計な気ぃ、遣うな」

ジンはトランクを拾い、立ち止まったままのチドリをちらりと見やった。

「せやな、チドリ？」

「……知らない」

チドリは、ぷいとそっぽを向くと早足でタカヤを追った。

「チドリにはとことん嫌われてるみたいだな、俺」

「あいつは誰にでもあんな感じや。気にしたら損や、損」

イズミのところに戻ると、ジンは動こうとしないイズミの背を軽く叩いた。押されて歩き出した旧友と肩を並べて歩く。

「イズミ。さっきはシャドウに追われて隠れとったんか？」

「………そんなところだ」

ストレガなら敵にもならない雑魚シャドウから逃げていたのが恥ずかしいのか、イズミが歯切れ悪く答えた。

「よっぽどビビっとったんやな。確かめもせずにわしらに飛びかかるなんて、余裕のなかった証拠やろ」

「俺の力は、おまえらほど強くないからな。弱い者は弱いなりに、考えてるんだよ」

これでもまあ、必死なんだ。

イズミが小さな声でそう言い加えた。

何やようわからんなと思いながら、ジンは話題を変えた。

「おまえ、今。何しとるん」

「女のところに世話になってる」

しれっとイズミが言った。

世話になっている。その言葉の意味をジンはすぐに理解した。

同棲相手の女性に生活を頼っているという意味だ。世間で言うところのヒモである。

「そか、女か。奇特な奴もおったもんやな、イズミを囲うとはな」
くっくっくと笑いながら、ジンは肘（ひじ）でイズミの脇腹を小突いた。
「言ってろ」
「なんぼでもゆうてやる。この甲斐性（かいしょう）なしのヒモ野郎」
「そこまで言うこともないだろーが。一応、バイトで多少は稼いでるんだぞ、俺も」
イズミが唐突にジンの肩に腕を回した。面食らったジンの首を抱き込むようにして絞める。その腕は、的確にジンの頸動脈（けいどうみゃく）を締めた。
自分でも顔が青ざめるのがわかったジンは、慌ててイズミの二の腕を手で叩いた。
「く、首、はいっとる、ギブやギブ！」
「ふふん。俺の勝ちー」
子供っぽく笑って宣言し、イズミがジンを離した。変わらへんな、とジンは思う。
イズミもペルソナ使いだが、能力はジンたちと比べられないほどに低い。
完全に実体化するジンたちのペルソナと違い、イズミのペルソナは黒い霧のような人型だ。雑魚シャドウにどうにか勝てるという程度の戦闘力がある以外、際だった特徴もなく、神話などに由来する名もない――〈名無し〉。
イズミは己の不甲斐（ふがい）ないペルソナを、そう呼んでいる。
本来なら、その低いペルソナ能力にイズミがコンプレックスを持っていてもおかしくないのだが、ジンの見る限りそんな様子はない。

はしゃぐのが好きな、年下の面倒を見ずにはいられない男。
つい頼ってしまいたくなるような——兄のような、年上の友人。
それが、ジンにとってのイズミだった。
「何が勝ちや。不意打ちは卑怯（ひきょう）やて、卑怯」
文句をつけながらも笑えてくる。
笑ったのはいつ以来やったか——ジンは久しぶりに気分が良かった。
「いったい、どこで何しとったんや」
イズミが遠い目をする。
「タルタロス探索の、あの日。俺はどうにか塔から逃げ出した——実は、その後のことを、よく覚えてない」
「覚えてない？　そんなら、一緒に探索に行った連中はやっぱり——」
ジンの言葉の途中で、イズミが首を振った。
「逃げ出せたのは、俺だけだ。俺もとうとう深手を負わされて、気がついたら、ある人に助けられていた。その人に迷惑かけるのはまずいと思って、この街を離れたんだが——そこで出会った女（ひと）が、先月、仕事の都合でこの街に引っ越すことになってさ。俺はそれについてきただけだよ」
イズミがどこか憂鬱（ゆううつ）そうな顔した。
「……帰りたくて、帰ってきたわけじゃない」

せっかくの再会に水を差すのは嫌なのだろう、イズミはすぐに表情を明るくした。
「そういうおまえこそ今は何やってるんだ。手榴弾なんか持ってるし——それに。少し前に銃声も聞いた気がするが……タカヤのあれ、まさか本物の銃か？」
堅気（かたぎ）じゃないとばれてるやろな。ジンは、色々隠すこともないと考えた。
「ああ、本物や。ついさっき、使うてきた——それがわしらの仕事やから」
「仕事？」
「せや。復讐代行をしとる——職業殺人者や。ネットで依頼を受けてな」
「……復讐、代行」
不意にイズミが立ち止まった。
数歩遅れてジンは足を止め、振り返った。
「どないしたんや」
数秒ほどためらうように黙り込んだ後、イズミが真顔で言った。
「……数日前。復讐相手がわからないが何とか見つけて殺してくれ、という依頼を受けなかったか？」
復讐相手が不明の復讐。意味不明で当然の言葉だが、ジンには理解できた。
『二年前、港区である女性が死んだ。死因は交通事故として処理されたが、実際は殺人だ。真犯人を捜し出し、復讐をして欲しい』

復讐代行サイトで、ジンは確かにそう依頼された。不明な点が多すぎるため、断りの返事さえしないで無視するつもりでいた依頼だ。嫌がらせやないかと疑ってさえいる。
「あ？　何でおまえがそれを知っとる——ちょい待て」
言葉半ばで気がついた。一瞬まさかと疑ったが、他に考えようがない。
「あの依頼……イズミがしたんか？」
「まあ、な」
ばつが悪そうにイズミが続ける。
「まさかおまえに殺人依頼したとは想像もしなかった——悪かった」
ちらりとジンは背後を振り返った。タカヤとチドリが後を気にせず歩いていく。
「かまへん、わしらは己の意志でやっとる仕事やし……歩きながら話そか」
「そうだな」
ジンとイズミは、再び肩を並べて歩き出した。
イズミは黙っている。悪かったという言葉がイズミの素直な心情だとわかるから、ジンはあえて遠慮しないことにした。
「あの依頼な、受けられへん。わしらのやっていることは復讐の代行。殺人の犯人捜しなんて探偵の真似事させたいんなら、他をあたってくれ」
ストレガは裏の世界に浸かっている。人捜しとなれば、表の世界に関わらざるを得な

くなるかもしれない——闇の住人には、それはできるだけ避けたいことだった。

「…………やっぱりそうだよな」

諦めたような口調のイズミに、思わぬところから助けの声がかかった。

「引き受けましょう、ジン」

数歩先でタカヤが足を止めて振り返っていた。

すたすたと一人で先に行ってしまうチドリのことはひとまず無視して、ジンはタカヤに歩み寄った。

「何やて?」

依頼を受けるはずがない。そう考えていたジンは、普段ならタカヤに口答えなどしないが、反射的につい訊ね返してしまった。

「二度も言いません——他ならぬ友の頼みです。けどな、引き受けたからって必ず遂行できるとは限らへんからな、捜して殺せなんて依頼受けたことないし」

「タカヤがそう言うんなら、しゃあない。いいですね、ジン」

肩をすくめつつジンはイズミを見やった。

イズミは、ほっとしたような、それでいて後悔しているかのような、複雑な表情をしていた。イズミが口を開く前にジンは釘を刺すことにした。

「先に言わせてもらうわ。やる以上、きっちりと代金はもらう。友人割引なんてこともせん。せやからそこで『面倒かけてすまん』なんて言ったらぶん殴るで。わしらはプロ。

余計な気ぃ遣うなや」

「う」とイズミが声をつまらせた。指摘された通りのことを言おうとしていたらしい。

「……それから、支払いな。おまえ、あんま金持ってるよーには見えへんし、何なら特別にローンにしてやってもええで」

「う」再びイズミが声をつまらせた。まさにローンを頼もうとしていたようだ。

「重ね重ね、ほんとうにすまん。恩に着るよ」

　そう言うと、イズミは手を合わせて何度も頭を下げた。

「そないぺこぺこせんでも――ほんま、相変わらずわかりやすい奴っちゃな、おまえ」

「人の本質は、どれほど年月が過ぎようとも変わるものではありません。持って生まれた宿業（しゅくごう）には何人たりとも抗（あらが）えないのですよ――こうして、影時間の終わりを阻（はば）めないように」

　タカヤが言った時だった。

　月の存在感が、急速に薄れ始めた。

　天を彩っていた緑の燐光が失せ、当たり前の白い月が佇む夜空で星が瞬（またた）き始める。

　タカヤが感じ取った通りに、影時間が終わったのだ。

　路地裏にぽつりぽつりと立っている街灯が、数度点滅すると頼りなく灯った。

　不意にイズミのズボンのポケットで電子音がなった。単純な短いメロディが三度繰り返され、途絶える。

「ちょっと悪い」
イズミがポケットから携帯電話を取り出した。フリップを開いてキーを操作する。メールをチェックしているらしい。
「うーん。せっかく誘ってもらったんだが、帰らないといけなくなった」
どこか幸せそうなイズミの苦笑から、ジンは理解した。
イズミは今の生活を大切にし、守ろうとしている。
かつての仲間よりも、今一緒に生活している女のほうが大事になっている。
――何や。変わらへんと思たが、しっかり変わっとるやないか。
離れていた時間以上に、自分たちとイズミは生き方が変わっている。
そう認識してしまい、ジンはすぐ前に立つイズミを遠くに感じた。
「気にすることあない、用があるなら帰ればええやろ。わしらはこの街にアジトを構えとるし、受けた依頼で何かあったら、こっちから連絡するわ」
「なら、この携帯の番号――」
連絡先をイズミが教えようとした。不要や、とジンは言った。
「復讐代行依頼のメールで連絡先やと寄越した番号とメアド、その携帯やろ？」
「おお、よくわかったな」
感心してイズミが頷いたので、ジンは呆れた。
「……不用心な奴っちゃ。こういう時はな、最低でもプリペイド携帯使うくらいの慎重

さが欲しいで？」

「そうなのか？」

訊ね返しながらイズミが携帯電話をポケットにしまった。

「そういうもんや。次があったら気ぃつけや。今のアジトの場所は、おまえが依頼に使うたメアドに送っとく。気が向いたら来るとええ。ほな、またな」

「待っていますよ、イズミ」

ジンはタカヤと共にイズミに背を向けた。チドリはこちらを気にすることなく行ってしまったらしく、その姿はどこにも見あたらない。

去り際に、タカヤは振り返ることなく言い加えた。

「そうそう、イズミ。あなたは限りある時間の中で今の生き方を守るべきだと私は思います——決して多くを望みすぎてはいけません……警告は、しましたから」

「どないな意味や、それ」

「わかる時が来れば、必ずわかります」

ジンの質問には正確に答えず、タカヤは予言者のような物言いをした。

何のこっちゃと気になりながら、ジンはちらりとイズミを振り返った。

前髪で鼻筋まで隠れたイズミの顔色は、古ぼけた街灯がちらほらあるだけの路地ではうかがえない。

「……心配されるようなことはないよ。じゃあ、またな」

少し歯切れの悪い口調でそう言って、イズミが踵を返した。

「なあ、タカヤ――」

イズミの素振りがどこか気になったジンは、タカヤの意見を聞こうとしたが、意図的にか、タカヤが話題をそらした。

「急いで帰りますよ、ジン、あまり待たせるとチドリが怒るかもしれません。調子の悪い給湯器を扱えるのは、あなただけなのですから」

今のストレガのアジトは、小さな廃ビルだ。勝手に拝借していて、電気は近くの電柱から盗んでいる。水道の元栓も勝手に開けた。

ビルのシャワー室に備えられている電気式給湯器はスクラップに近い代物で、誰かが湯を使おうとしたら、他の誰かがつきっきりで温度調整をしたり勝手に切れる電源を入れ直したりと操作をしなくてはならない。

それは、ジンの役目なのだった。

「手斧を投げられるのは、わしも嫌や」

今は夏。蒸し暑い夜だから水でも構わないだろうとジンは思うが、チドリは冷水シャワーが絶対に許せないらしい。

実際。調子の悪い給湯器のせいで「シャワー。浴びれない。許さない」とジンは二度、チドリに手斧を投げられた。

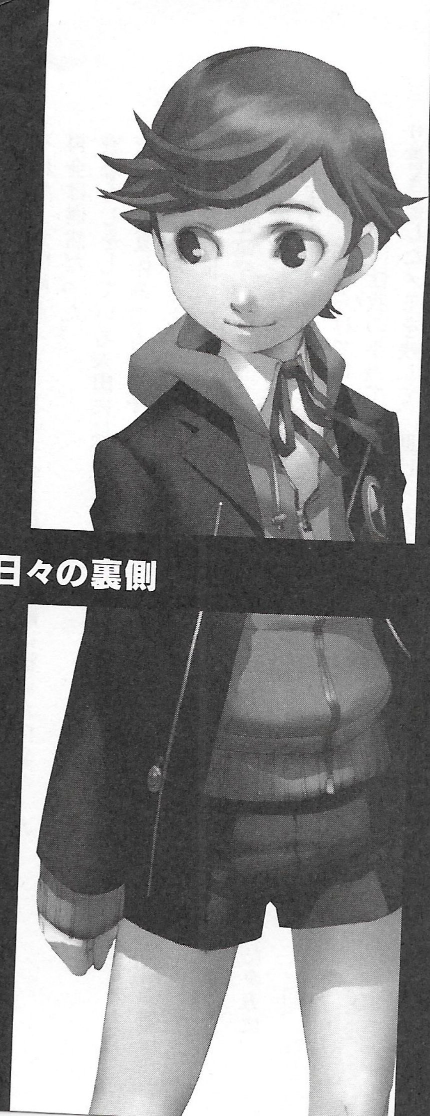
「急ぐか」と肩をすくめて、もう一度だけジンは振り返った。

暗い路地には誰もいない。
旧友と再会した幸運が嘘だったかのように、路地裏は空虚だった。

P3

PERSONA3

II 平穏な日々の裏側



「ええと、確か乾（けん）君だったよな。俺だよ、俺」

──俺だ俺って、誰？

──なれなれしい人だな。

それが、天田（あまだ）乾がイズミという男と再会した際に抱いた印象だった。

再会は偶然だった。

寮暮らしをしている天田には、今は身寄りと呼べる人間が遠縁にしかいない。

天田には夏休みでも帰省する場所はなく、無人同然になってしまう初等部の寮での生活も寂しいだろうと、学園理事長の配慮で、夏休みの間も学生が残っている月光館（げっこうかん）学園巌戸台（いわとだい）分寮に世話になることになったのだが、そこは高等部の寮である。

同じ月光館学園の生徒とは言え、天田は初等部五年生。馴染みづらくて当たり前だ。

巌戸台分寮に居場所が見つけられず、ふらふらと目的地もなく散歩に出かけた夕方に、たまたまイズミと道ですれ違い、呼び止められたのだった。

数年前。血だらけで倒れていたイズミを、天田の母が助けたという出来事があった。

天田の母に怪我（けが）の手当てをされたイズミは『助かりました。ご恩は忘れません』と走り書きをしたメモを残して、助けられた数日後に姿を消した。

当時子供だった──今でも充分に子供だが──天田には、血まみれのイズミは怖いだけの存在で、ろくに会話もしなかった。

だから。呼び止められてもすぐに思い出せなかった。

「お母さん、元気にしてるかな。一度、お礼に行きたいと思ってるんだ」
そう言われて、ようやくイズミのことも、あの夜のことも天田は思い出した。
忘れようのない悪夢の夜。
夜空が緑色に染まり、テレビが消え、時計が止まり。
化け物が家に突っ込み、何もかもを押し潰したあの夜を。
「母さんは、死にました――殺されたんです」
イズミにそう教えてしまったのは、一〇日前のことだった。
何か力になれることがあるかもしれないと言うイズミに、連絡先を天田は教えた。
どうせもう連絡なんてないだろうな、と思いながら。

ところが今日。イズミから会いたいと連絡があり、天田は待ち合わせに指定された、巌戸台の神社を訪れた。
時刻は夕方。日没が近く、傾いた陽が視界をほのかな朱色に染めている。
「――は？　それ、本気で言ってます？」
天田は耳を疑っていた。
寂れた境内の片隅のベンチに並んで座り、イズミは土産だと駅前のハンバーガーショップの袋を天田に手渡した後、とんでもないことを言ったのだ。
まだ温かい袋を横に置き、天田はイズミに訊ね返した。

「母さんの復讐を殺し屋に頼んだなんて——何考えてるんです、イズミさんは」

イズミはインターネットで復讐代行を請け負うサイトを見つけ、そのサイトで、天田の母の復讐を依頼し、引き受けてもらった。

天田の聞き間違いでなければ、確かにイズミはそう言った。

馬鹿な話だと次の言葉を見つけられないでいる天田に、真面目な顔でイズミが言う。

「何考えてるって、復讐は当然じゃないか。君は見たんだろ？　交通事故なんかじゃないんだろ？」

交通事故。天田の母の死は、そう処理されている。

天田は、事情を話した警察官の応対を思い出した。

やれやれ、この子供は夢でも見ていたんじゃないか。

警察官はそう言いたげに、天田に告げた。

『いいかい。これは事故なんだ、交通事故。酒飲み運転の車が家に突っ込んだんだよ』

僕、嘘なんか言ってない。見たんだ、ちゃんと。

そう主張をしても無駄だった。

『すでに事故を起こした車もその事故で死んだ運転手も確認されている』

と、警察官は説明した。

この件はもう終わったようなものだから。

そう警察官は言わなかったが、警察がこれ以上の捜査をしないだろうことは、小学校中学年の幼い天田にもわかってしまった。

嘘だ！　そんなの作り話だ！

そう繰り返して叫んでも、無駄だった。

『君の話こそ作り話だろう』

面倒くさそうに、その警察官が呟いたことを天田は忘れられない。

両手を握りしめ、天田は地面を睨み付けた。

――そうだ。交通事故なんかであるもんか。

――僕は見たんだ。得体の知れない怪物が、家を押し潰すのを。

――誰かが、あの怪物を操っていたんだ。

天田にはよく見えなかったが、高校生くらいの男だった。

その男から、馬を思わせるシルエットの巨大な怪物が、突如として出現したのだ。

――あれは、誰なんだよ。

――見つけたら、絶対に生かしておかない。

僕ガ、コノ手デ殺シテヤル

握りしめられた天田の拳（こぶし）に、ますます力がこもる。

「子供がそんな思い詰めた顔をするもんじゃない」

不意に、イズミが天田の背を平手で軽く叩いた。まるで幼児をあやすかのように。

天田は顔を跳ね上げた。胸中の理不尽さを、親しくもないイズミに叩きつける。

「でも！　誰も信じなかったんですよ！　事故なんかじゃないのに!!」

――どうせこの人だって信じちゃいないんだ。

天田はそう思っている。だから、あえて怪物の話をイズミにはしていない。

ただ、母さんは殺されたと結果を語っただけだ。

――この人だって、僕をからかって遊んでいるだけなんだ。

急に天田は虚（むな）しくなって、ぶつける先のない怒りが消えた。

「……これでも僕、忙しいんです。そんな冗談につき合う暇（ひま）なんてないんですよ」

嘘だった。高校生ばかりの寮に自分の居場所がなく、この街に親しい友人がそれほど多くない天田にとって、夏休みなど暇でつまらないだけの日々だ。

天田はイズミから顔をそらした。視線を足下に落とし、ぼそぼそと呟く。

「復讐の代行？　そんなサイト、インチキに決まってます。お金だけ取られておしまいですよ。バカじゃないんですか、そんなのに騙（だま）されるなんて――」

言ってから、言い過ぎてしまったと天田は気がついた。

ぎしっとベンチを軋（きし）ませてイズミが立ち上がり、天田の前に回ってしゃがみ込んだ。

「誰が信じなくても、俺は君を信じる。だから拗ねなくていいんだ」
「誰も拗ねてなんてっ！」
怒鳴り、天田はイズミを睨んだ。
鼻筋までを被っている前髪の間に見えるイズミの目は、真摯そのものだった。
天田は声を失った。ここで加えて怒鳴るほどに、愚かではなかった。
「そりゃ俺なんか信用できないと思うのは当然だ。でも、俺が君を信じるのは俺の勝手でいいだろ？　それもダメだというなら、うーむ……何て言えばいいんだろうな……」
悩み始めたイズミをしばらく見つめた後、天田は言った。
「僕は、母さんの死が事故じゃなかったと信じてもらえるだけでも、今は嬉しいです」
本音だった。警察官が嘘と決めつけた真実を、信じてくれる人がいる。それは天田にとって救いに他ならなかった。イズミを信用したわけではないが、少なくとも、悪い人ではなさそうだと天田には思えた。
——こういう人って騙されやすいんだろうな。
ふうと天田は一息ついた。改めて、丁寧な口調でイズミに意見をする。
「でもですね。そのサイト、やっぱりインチキだと思います。そんなドラマみたいな話、身近にあるわけないですよ」
「いや。インチキなんかじゃない」
心底そう信じているような顔で、イズミが言う。

「復讐代行は信用できる。あ、金のことなら心配要らない。俺が勝手に依頼したんだ、君に迷惑をかけるつもりはこれっぽっちもないから安心してくれよ」

「お金のことは置いておくとして――何を根拠に信用できるなんて言うんです？　さすがに不用心すぎませんか、それ」

　イズミが瞬き（まばた）をして苦笑した。

「……不用心……あいつにも言われたな。俺、そんなに危なっかしいか？」

「ええ、かなり。小学生の僕に心配されていて大丈夫かな、と思えるくらいに」

　そっかあ、とイズミが弱り切ったような顔をした。

「真希（まき）さんにもよく言われるんだよな、俺。不用心だって」

「真希さん？」

　聞いたことのない名を、天田はおうむ返しにした。

　イズミがわずかに頬（ほお）を赤くする。

「――そのだな。大人には大人の事情がだな」

「恋人さんですか」

　思いついた通りに天田は言った。

　露骨（ろこつ）にイズミの雰囲気が変化した。

　立ち上がり、あたふたと身振り手振りを加えつつ話し始める。

「ちょ、そんなんじゃないって。俺はただただ真希さんに甘えてるだけで、飯（めし）も住む場

所も全部真希さんに頼ってるし、俺なんかじゃちっとも彼女の支えになんてなれないし、そりゃあ紗耶ちゃんは俺を慕ってくれてるけどさ、俺じゃあの子の父親役なんて務まるわけないんだよ、そこんとこわかるよな」

イズミは女性と暮らしている。経済的にその女性に依存している。

その女性には子供がいる。そしてイズミはその女性のことが好きである。

暴露同然のイズミの台詞から、天田はそう理解した。

「はあ」曖昧な相づちを打ち、とことんこの人は不用心だと天田は改めて納得した。

「——そこまで訊いてませんけど、僕」

「んなっ。誘導尋問とは汚いぞ、乾君」

「誘導してませんし」

神社の境内に沈黙が降りた。ひぐらしだけが寂しげに鳴いている。

唐突に、イズミが「こほん」と一つ咳払いをした。

「とにかくだ。復讐のことは俺に任せておいてくれ。また何かあったら連絡する」

「…………期待はしませんけど」

もし犯人が見つかるならば、自らの手で復讐を果たしたい。それが天田の願いだ。

——どうせこの人に見つけられっこないんだ、犯人なんて。

「でも。ほんとに犯人がわかったら、それが誰なのか僕に教えてもらえませんか」

ダメで元々と疑いながらも、天田はイズミにそう頼んだ。

「いや、ダメだ」
即座にイズミが首を横に振った。天田に何でと問わせる間もなく言い加える。
「犯人がわかったら、君は自分で復讐するつもりだろ。そんな罪、俺は君に負わせたくなんてない」
「……まさか。復讐なんてしませんよ、僕は」
「とにかくだ。復讐なら奴らがちゃんと果たしてくれるからさ、心配するな」
な？ とイズミが強い口調で念を押した。
ふう、とまた天田はため息をついた。
「何か信じてもらえてない気がしますけど……いいです。それより気になるんですが」
「何がだ」
「イズミさん。さっきから聞いていると、復讐代行のサイトの人と顔見知りな気がするんですけど。もしそうなら、そんな危ない人たちと関わらないほうがいいですよ」
「…………いやいや。知り合いなんて、そんなわけないだろ」
ごにょごにょと言ったイズミは、視線を明後日の方向に泳がせている。
――わかりやすい人だな。
あえてこれ以上は何も突っ込まず、天田はベンチから立ち上がった。
「僕、そろそろ帰ります……あ。お土産、ありがとうございました」
天田は忘れそうになった土産のハンバーガーの袋を手にした。

なんとなく中を覗(のぞ)いてみる。子供向けのセットメニューの、キャラクター物の安っぽい玩具(おもちゃ)が一番上に入っていた。

「……子供扱いしないでくださいよ」

苦笑した天田の頭を、軽くイズミが叩いた。

「バカ言え、子供扱いしてもらえるうちは、子供扱いしてもらうんだ。絶対にそのほうが得をする。大人なんてな、なりたくなくてもそのうち勝手になるんだし」

「イズミさんだって、大人って雰囲気じゃ」

イズミは、二〇歳に届くか届かないかというくらいだろうと天田には見える。人によっては大人だと主張するだろうし、まだまだ自分は子供だという人もいて当然の年齢だ。

「まあな……大人か。なれるものなら、なりたいんだが……」

何故(なぜ)だかイズミが言い淀んだ。変だなと天田は思う。

「さっき。恋人さんの話をした時、自分で大人には大人の事情がって言いましたよ」

揚げ足をとるつもりはないのだが、ついそう指摘してしまった。

「――そうだったか？　じゃあそういうことにしてくれ」

妙に不自然な笑顔を浮かべると、イズミは天田から離れた。

「それじゃ、吉報を待っていてくれ。復讐の話じゃなくても何かあったら遠慮なく連絡してくれ、俺にできることなら何でもするからさ」

手を振りながらイズミが去っていく。

ハンバーガーの袋を抱え込んだまま、天田はしばらくその場所に立っていた。
境内から道路に降りる階段にイズミの姿が消えても、ぼんやりと立ち続けた。
鳴き続けていたひぐらしの声が、不意に途絶えた。
――イズミさんには悪いけど、犯人なんて見つからなきゃいいんだ。
――いつか、僕が犯人を見つけて。
「僕が、殺すんだ。絶対に」
天田はぽつりと呟いた後で、ぎくりと身を固くした。この境内に続く階段を上がってくる人影に、気づいたからだ。
今の呟きを聞かれたりはしなかっただろうかと内心で焦っている天田のところに、トレーニングパンツにTシャツ姿で首にタオルを巻いたその男が、ジョギングで近寄ってきた。
「天田。どうしたんだ、こんなところで」
男は訊ねながらも、軽くステップを踏みながら上体を振り、リズミカルに左右の拳を繰り出した。シャドウボクシングだ。
「真田先輩は、ロードワークですか」
真田明彦。それが男の名前だ。月光館学園高等部の三年生であり、ボクシング部主将。過去に負けたことがない、強い男――そして、天田の憧れている先輩である。
真田は、天田が居候している巌戸台分寮の寮生だ。

夏休み前、真田がいる寮での暮らしを天田は楽しみにしていたのだが、いざ始まってみれば、自分のほうで壁を作ってしまい、寮になじめないでいる。
だから、真田がこうして話しかけてくれたのがとても嬉しかった。それが口調に出る。
「夏休みなのに、真面目ですね。僕、尊敬しちゃいます」
「トレーニングは、一日サボると元に戻すのに三日かかる。夏休みなんか、関係ないからな」
ひとしきりシャドウボクシングをすると、真田は立ち止まって首のタオルで顔の汗をぬぐい、天田に向き直った。
「天田こそ。こんなところで何してるんだ」
再び訊ねてきた真田の目が、天田が胸元に抱えているハンバーガーの袋に止まる。
「——これから晩飯か？　こんなところで食べずに、寮で食えばいいだろう」
真田は、そう勘違いしたようだ。天田は先ほどの物騒な呟きを聞かれていなかったみたいだと一安心し、真田に話を合わせることにした。
「……寮。ちょっと、空気になじめなくて。僕一人、小学生ですし」
「そんなの、気にすることないぞ。そんな奴はあの寮にいないとは思うが、おまえに悪くする奴がいたら、俺に言えばいい。俺からそいつに注意してやる」
真田に兄弟がいるという話を天田は聞いたことがないが、弟か妹がいたら、良い兄になるだろうと考えた。天田自身も、こんな兄がいたら良かったのにと思う。

「あ、ありがとうございますっ」
つい、声が弾(はず)んだ。顔も綻(ほころ)ぶ。
「嬉しいです、僕。頑張って寮に馴染もうと思います。それから、その——力にも。絶対に、目覚めてみせますから」
力——〈ペルソナ〉のことだ。
真田はもちろんのこと、巌戸台分寮の高校生全員が、ペルソナ使いなのである。
特別課外活動部〈S.E.E.S.〉。
それが、真田のいるペルソナ使いのチームの名だ。
その目的は、〈影時間(かげじかん)〉の象徴である怪異の塔〈タルタロス〉の謎を解き、影時間を世界から消し去ること。そのために、〈S.E.E.S.〉は毎夜のように〈シャドウ〉という怪異と戦っている。
つい先日も、大型シャドウという害悪の退治作戦を行い、多少のトラブルはあったが、見事にシャドウを倒して来たと天田は聞いた。
〈S.E.E.S.〉の一員として、早く戦えるようになりたい。
それが、母の仇討(かたきう)ちとは別の、今の天田の願望だった。
「力か——正直、俺はおまえが戦いに加わるのに賛成できないが……もし、その時は。必ず、俺がおまえを守る。だから安心しろ」
びっと真田が親指を立てて見せた。ほんとうにこの人は凄いと天田は改めて感動した。

守る。そんなことを平然と他人に言える人など、なかなかいないだろう。
「凄いですよね、真田先輩。それってやっぱり、強い力が――ペルソナが使えるからですか？」
真田は無敗のボクサーであると同時に、ペルソナ使いとしても優秀だ。
天田はまだ真田のペルソナを見たことがないのだが、きっと格好良いに違いないと信じている。
「俺は特に凄くもないと思うが、ペルソナは無関係じゃないな。力を扱える者が、他者を守る。それは、力を得た者の義務だと俺は思っている」
「やっぱり凄いですよ」
天田は三度、感動した。一日でも早く、真田の隣で戦いたいとさえ願う。
「見ていてください、必ず僕、お役に立ちますから！」
真田が、意気込む天田の頭に手を置いた。ぐしぐしと少し乱暴に撫でる。
普段の天田なら、子供扱いしないでくださいと怒るところだが、相手が真田だからか、少しも腹が立たなかった。
「帰るか、天田。俺も途中で晩飯を買うから、ロビーで一緒に飯を食おう」
「はい！」
踵を返した真田の背を天田は追った。
「何を買って帰るんです、晩ご飯」

「決まっている。〈海牛〉の牛丼だ。遠回りになるが、構わないか？」

牛丼専門店、海牛は巌戸台駅前にある。今いる神社と寮の位置関係では、かなりの回り道になる場所だ。真田と過ごす時間が長くなるのだから、天田には遠回りの寄り道は、むしろ歓迎だった。

「全然問題ないです。牛丼ですか——お好きなんですか？」

「まあな」と、真田は軽く返事をした。

後日、天田は少し呆れることになる。

真田は、弁当と言えば実は牛丼しか買ってこないのだった。

ジンは床に座り、コンクリート剥き出しの壁に背を預け、膝に置いたノートパソコンのキーボードを無表情で叩いている。

ここは〈ストレガ〉がアジトにしている廃ビルの一室だ。時刻は夜の一一時前。

ストレガは無断占拠がばれないように、外に灯りが漏れない、窓のない部屋を選んで使っている。家具はろくにない。あちこち表皮の破れたおんぼろのソファー。傷だらけで足が傾いているローテーブル。たまに映らなくなるテレビ。いずれも拾ってきた物だ。

「執着はいけません。家具などどうでもいいのです」

というのが、ストレガのリーダー・タカヤの考えだ。

このアジトも、いつまで使えるかわからない。今のところ無断占拠が不動産管理会社

にバレてはいないようだが、疑われ始めたらすぐに出て行く予定である。

このビルを使っているのは、たまたま都合が良かっただけのことであり、アジトがこのビルでなければ困るということはない。警察が調べに来る前に姿を消すほうが、何かと面倒がなくていいのだ。

「ベッドは綺麗な物じゃないと、絶対に嫌」

そう常に主張するチドリのベッドだけは、アジトを変えるたび、影時間に家具店から新しくかっぱらってくる。今のアジトでは隣の部屋に置いてあるが、天蓋（てんがい）付きのベッドなんかをチドリが選んだため、盗むのにも運ぶのにも酷くジンは苦労させられた。

アジトをストレガが放棄する際、ベッドは残していく。もし誰かがここを調査にきたら、廃墟のようなビルに不似合いなベッドに首を傾げることだろう。

チドリは今、ベッドのある部屋にいる。ジンには理解できない薄気味悪い絵をスケッチブックに書き殴っているはずだ。

タカヤはソファーに寝そべり、古くかびくさい文庫本を読んでいる。

だいたい、毎夜毎夜このパターンだ。仲間だからといって一緒に何かをしているということはなく、それぞれが好き勝手に過ごしている。

もっともジンは今、遊びでパソコンを使っているわけではない。

イズミに依頼された『女性の不審な交通事故死』についての調査を、インターネットを使って始めたのである。

まず、イズミから聞いた被害者の名前と事故の起きた日時から地方新聞社のバックナンバーのデータを探し出し、記事を確認した。

その上で、ソーシャルネットワークサービスや大規模掲示板やらを使って『あの事故って殺人だったらしい』という噂（うわさ）を流し、反応を窺（うかが）っている。

地方で起きたせいもあり、二年前の当時でも注目度の低かった事故だ。

今のところネットでの反応はほとんどゼロに等しい。

ネットの掲示板で見かけた、噂に関係ありそうな書き込みは、

『知らない』『そんなことあったんだ』『どうでもいい』

この程度だ。事故の存在自体が忘れ去られていて、興味を持つ人もいない。

——まあそんなもんやな、普通。

噂を流したばかりで事件の真相に迫れるなんてジンはまったく思っていなかった。

今回は、種をまいたのみ。少し時間をおいて別人の振りをし、

『この前、港区の事故がどうのって話があったよな。あの事故、やっぱり事故じゃなくて、殺された女が化けて出るって話があるんだよ』

と、適当に話を膨らませてネットに噂を流そうと考えている。

最近ちまたに増えている無気力症の人間——〈影人間（かげにんげん）〉の話題を噂に織り交ぜてオカルト好きをあおるようなネタに仕立てれば、食いついてくる人間もそれなりにいるだろう。

——ネトゲでも撒き餌しとこか。

インターネットを使うオンラインゲームには不特定多数の人間が匿名で出入りし、そこでのチャットから思わぬ情報が入手できることもある。

ジンはノートパソコンにインストールしてある幾つかのネットゲームの中から、適当に一つを起動させ、すぐさまログインした。

デビルバスター・オンライン。一時期、大ブームになったオンラインRPGだ。かってほどの勢いはないだろうが、それなりに流行っているだろうとジンはログインした。

モニタにジンの使うキャラクターのステータス画面が表示される。

『性別・男　職業・デビルバスター　名前・名無し』

その他、レベルやら所持金やらが表示されているが、ジンが気にしているのは風景だ。

「……何や、ずいぶん寂れとるな」

パソコンのモニタに映るゲーム画面の街並みは、まるでゴーストタウンだった。他のゲームユーザーが操作しているキャラクターが周囲にいないのである。

「これでは噂の流しようもあらへんな。別のゲームに——」

ジンがゲームを終了させようとした時だった。

画面の横手から赤い服を着た女のキャラクターが駆け寄ってきて、テキストウィンドウに台詞が表示された。話しかけられたのだ。

『人、ハッケーソ！』

ハッケソ。ンをソとわざと誤入力するのは、ずいぶんと昔に一部のネットで流行った一種の悪ふざけだ。今時、そんなことをする人間は珍しい。

話しかけてきたプレーヤーは結構な歳だなとジンは推測した。何て応じようか。そう思考する短い間に、赤い服のキャラクターがさらに語りかけてきた。

『こんな廃(すた)れたゲームに来るなんて、ひょっとしてN島の知り合い？』

ジンの指がキーボードの上で踊り、高速で会話文が入力される。もちろんブラインドタッチだ。

『N島？　誰やそれ』

『関西弁キャラだ！　きゃはきゃは！』

テキストウィンドウに笑顔の顔文字が幾つも並ぶ。ハイテンションなプレイヤーだ。ジンがもっとも相手にしたくないタイプだった。会話するだけで疲れてしまう。

『わしはもう落ちるし、ほなもう会うこともないやろ』

ジンはさっさとゲームを終わらせようとしたが、相手がさらに話しかけてきた。

『待ってってば☆Y子さみしいっ』

「――知らんがな。何やこのY子って奴」

ぼそりとこぼしたジンの頭の上から、その声が降ってきた。

「N島。Y子。ある小説の主人公、中島(なかじま)と弓子(ゆみこ)ですね」

「は？」とジンは顔を上げた。いつの間にかモニタを上から覗いていたタカヤが、片手に開いた文庫本を提げてソファーに戻っていく。
「何でタカヤが知っとるん、そないなこと」
「詮無きことです」
タカヤはごろんとソファーに倒れ込んで横になると、再び無言で文庫本を読み始めた。説明する気はないようだ。
『ねぇねぇもうちょっと話につき合ってよ』
モニタでは、しつこくY子が話しかけてくる。タカヤが話しかけてきたせいで立ち去るタイミングを失ったジンは、やむなく少しだけ会話につき合うことにした。
『しゃあないな。なら訊くわ』
『なになに！　何でも訊いてよ、個人情報以外なら何でも話しちゃうから！』
Y子は嬉しそうだ。こうまで無邪気に喜ばれるとジンも悪い気はしない。
『ここ、えらく寂れとるけど。最近はずっとこんなんか？』
『まあね。これも時代かなぁ、一人減り、二人減り、気がついたらみんな他のネトゲにハマっちゃって、ここのことなんてもう忘れてるっぽい』
――利用価値はなさそうやな、このネトゲ。
――それでも。このプレーヤーがよそで噂広げるかもしれへんか。
『そか。寂しい話やなぁ』

相づちを打って話題を変える。

『ところでや。ほんまは殺人なのに、警察が事件じゃ面倒やと交通事故にして処理してまうって話、聞いたことないか？』

ちょいと不自然やったかな。ジンはそう思ったが、どうせネットでも二度と会うことがないだろう相手だ。気にするだけ損である。

『最近の警察、全部が全部じゃないけど腐ってるとこあるもんね、やりそうな気がするけど……でも、よくある都市伝説みたいなものじゃないのかなぁ』

Y子が話題に乗ってきた。

『わしも噂だけやと思っとったんやけどな。なんでも港区っつーところで、二年くらい前にホンマにあったらしいねん』

『港区？　うわ嫌だな、Y子の住んでるところも港区だよ。どこの港区、それ』

——もしかしたら、こいつ。地元の人間か？

ネットの世界は広大なようで、案外狭い。見ず知らずの他人とチャットしているつもりだったのに、実は古い知り合いだったというケースも珍しくはない。

世界のどこからでも接続できるのがインターネットだ。それはつまり、すぐ隣の部屋で、見知らぬ誰かがネットを介して自分とつながっていても不思議ではないのである。

——用心にこしたことはないか。

『噂で聞いただけやし、どこの港区か知らん。悪かったな、変な話して』

『全然いいけどぉ。それよりも暇なら一緒に京浜第二シェルターのほう行かない？　そっちならN島もきてるかもしれないし』

『遠慮しとくわ。悪いけどちょいと用事思い出してしもたしな』

『……そう……残念だなあ。N島以外のプレーヤー、久しぶりだったのに』

『ほな、縁があったらまたな』

名残(なごり)惜しそうなY子に挨拶してジンはログオフし、ゲームを終了させた。

「別のネトゲをやる前に、何が流行ってるんかググって調べてみたほうがええな、まず。あないな閑古鳥(かんこどり)鳴きまくりなネトゲじゃ調査の役に立たへんで」

ジンは独り言をこぼしつつパソコンを操作した。

「客。ジンに」

唐突にその声が聞こえた。ジンが顔を上げると入り口にチドリが立っていた。

チドリが着ているのは寝間着(パジャマ)代わりの白いレース生地のシャツ一枚。

レースの目は細かく、生地が重なっているデザインのために肌はほとんど透けないが、白い太股があらわになっている。

肌を出しているが、チドリに恥じている様子は、まったくない。

「またそないな格好で歩き回りおって。ちっとは人目を気にしぃや」

「そんなことなんてどうでもいい……それより。ジンに客」

チドリの部屋は出入りに使っている非常階段に近い。だから来訪者に気がついたのだ

ろう。客が来たら頼むとジンもタカヤもチドリに頼んでいなかったのに、あのチドリが客に応対したことは、ちょっとした奇跡に近い。

だから、ジンは驚いていた。

「客て。いったい何の気まぐれや、おまえ」

「……追い返していいなら。そうする」

チドリなら本気でそうしかねない。ジンは膝からパソコンを床に降ろした。

「いや、今行くし――おまえ。そんな格好で出迎えに出たんかいな」

「…………ジンの貸しにしておく。後でちゃんと返して」

ぺたぺたと裸足(はだし)の足音を立て、チドリは不機嫌そうに去っていた。

「客――」

考えながらジンは腰を上げた。このアジトの場所を教えたのは一人しかいない。

「やっぱりイズミ以外におらへんか」

非常階段のスチールドアを開けたところに、予想通りにイズミがいた。

「よ」と片手を揚げて挨拶するイズミを、

「いいから入れ」とジンは中に招き入れた。

昨日と同じ黒いトレーニングウエア姿のイズミは、片手にかなり大きなスーパーマーケットの買い物袋を提げていた。何やら色々と入っていそうだが、特に目立つ大きめの

ステンレス水筒が重いのか、持ち手がかなり伸びている。

「暗いし気をつけてな」とジン。

外に光を漏らさないよう、使っている部屋以外は照明をつけていない。廊下も例外ではなく、タカヤといた部屋とチドリの部屋からこぼれる光で、うっすらと照らされているだけだ。

「何や、その袋」

イズミを部屋に案内しながら、ジンは訊ねた。

「土産だよ。ガスコンロとかってあるか？」

イズミは何か調理をする気らしい。

ストレガは、食事と言えば、影時間を使って盗んでくるコンビニエンスストアの弁当などが基本で、料理はしない。せいぜい、レトルト食品を温めて食べる程度だ。つまりその程度の器具があるだけだ。

「電気コンロとアルミの鍋しかあらへんで。湯を沸かすくらいしか無理や」

「湯が沸かせるならなんとかなる。どっちだ、厨房」

「厨房なんて気の利いた設備ちゃうけどな——先にそっちか？」

「できるだけスープが冷めないうちに振舞わないと、大将に怒られる」

ジンはタカヤのいる部屋の前を素通りし、かつてはお茶くみに使われていただろう簡易キッチンのある給湯室にイズミを案内し、手探りで灯りをつけた。

キッチンの鍋とコンロを見て、何とかなりそうだと呟いたイズミに、ジンは訊ねる。
「スープやら大将やら――おまえ。バイトしとるゆうたけど、何してるんや」
「ラーメン屋。駅前の〈はがくれ〉だ。この辺に住んでるなら、知ってるだろ」
「ほお。名店やないか」
この地区では旨(うま)いと有名な、巌戸台駅前にあるラーメン店である。
「バイト歴一カ月の俺なんかがラーメン作るなんて身の程知らずもいいとこなんだけどな。事情で外に出られない友達に食べさせたいと言ったら、大将が、スープと麺と具を持ってけって、どんぶりまで貸してくれた――断っておくが、これから俺が作るラーメンが、はがくれの味だと思うなよ?」
「たかがラーメンやろ。そない気張らんでもええんとちゃうか?」
腕まくりをしながら簡易キッチンに向かうイズミの背に、半ば呆れてジンは言った。
「気張って何が悪いんだ？　いいから黙って見てろ」
狭苦しい給湯室にイズミが入り、作業を始めた。ゆがみとへこみのあるアルミ鍋になみなみと水を張り、古くさい電気コンロにかける。
「湯が沸くまで、だいぶかかりそうだな」とイズミ。
「おんぼろやしな、それ」とジン。
「影時間までまだ時間あるし、それまでに準備できれば、まあいいか」
イズミが、買い物袋からラーメンどんぶりやら湯切り用のザルやらを取り出しながら、

話を続ける。

「で、どうなんだ。何かわかったか？」

――ははん。さては、ラーメンは口実やな。

ジンはすぐさま勘づいた。イズミがアジトを訪れたのは、依頼した復讐代行の調査が気になってのことであり、来るための理由付けにラーメンを持ってきたのだと。

――そないなことせえへんでも、気楽に来ればええのに。

「調査のことを知りたいなら、んな土産なんぞ持ってこなくても。依頼者なんやし、妙な気ぃ遣うんやない」

ぱっと勢いよくイズミが振り返った。

「みょ、妙な気なんて遣ってないぞ。これはだな、俺がろくなもの食ってなさそうなおまえらに食べさせたくてだな」

慌てるイズミの様がほほえましい。くっくっくとジンは短く笑った。

「ほな、そうゆうことにしよか」

「わ、わかればいい」

こほんと咳払いをしてイズミが改まった。

「で、どうなんだ？」

「昨日の今日やで、どないもこないもあらへん。そないに簡単な依頼ちゃうことは、イズミかてようわかっとるやろ」

「そうか」と、露骨にイズミがしょんぼりした。
ほんまにわかりやすい奴やとジンは思う。
「そないに落胆せえへんでもええやろ。恩人の仇を討ちたいという事情はわかっとるし、わしらはプロや。最善を尽くす」
依頼を受けると決めたので、イズミからジンは詳しい事情をメールで伺った。
事情を知り、イズミの力になってやらなければとジンは改めて考えた。
だが、意気込みだけで事は簡単に片づかない。
「でもな。調べごとっちゅうんは考えるより時間かかるんや。何かわかったらすぐ教えるし、焦らんと待っといてくれ」
「……時間、か」
どこか暗い口調で呟き、イズミはコンロに向き直った。
様子が妙やなとジンが疑うのもつかの間。イズミが振り返り、口を開き直した。口調からは先ほどの暗さが失せている。
「こっちも準備にちょいと時間かかりそうだ。おまえは部屋に戻ってろよ」
「わしがいると何や都合悪いんか？　別に見とってもええやろ」
イズミが少し視線を泳がせた。ややあって、
「……ちょーっとばかり照れくさい気が。変な言い方だが、仕事っぷりを見られるのって、自分の裏側見られるような気分だ」

「優雅に見える水鳥も水面下では必死に足を動かしているっちゅー奴か……ちゃうな、そんなええもんやないな」

再び、くっくっくとジンは笑った。

「わかった。なら出来上がりを楽しみに待ってるわ」

「あまり期待されると、それはそれで困る」

「ややこしい奴っちゃなあ」

「うるっさい。俺に待てって言うんだから、おまえだってあれこれ言わずに黙って待ってろ！」

言っていることは文句だが、イズミの口調は楽しげだった。

それでも、これ以上からかうとどんぶりくらいなら飛んできそうな気がして、ジンは給湯室を後にした。

三〇分ほど過ぎてようやく、テーブルの上にどんぶりが三つ並んだ。

トロ肉のチャーシューが目を引く、こってり系のラーメンである。

食欲をそそる魚系のダシの匂いが湯気と共にどんぶりから立ちのぼり、少なくとも見た目はバイト歴一カ月の素人が作ったものには思えない。

「自信なさげだった割には、ちゃんとしとるやないか」

「ええ。実に美味（おい）しそうです」

ローテーブルについたジンとタカヤに誉められ、イズミが苦笑しながら頭をかいた。
「麺をゆでて盛りつけただけだ、誰でも見た目はそれっぽくなる。味は、まあ……大将にはまっったく及ばないんだが」
「同じスープで同じ麺やろ。同じ味になるのとちゃうか」
ジンの質問にイズミが真顔で首を振る。
「ゆで加減とか温度とか、微妙なんだよ。ほんの少しの違いで味がすごく変わるんだ、これが」
「そうしたこだわりなら、執着も悪くありませんね」
タカヤが割り箸を手にした。せやなと同意してジンも箸を取る。
「俺、チドリ呼んでくるよ」とイズミ。
「それ、おまえのとちゃうんか」
三杯目のラーメンは、イズミの物だとジンは思っていた。太るからとチドリが夜食を避けることを知っているからだ。
だがそうしたチドリの習慣を、再会したばかりのイズミが知るはずもない。
「土産に持ってきた物を自分で食うか、阿呆。そこまで図々しくねえよ、俺でもな」
廊下に向かおうとしたイズミが、すぐに足を止めた。
「……いい匂いがする」
入り口にチドリがいた。じっとテーブルの上のどんぶりを見据えたまま、ぺたぺたと

裸足で歩いてくる。
「これ……食べていいの？」
イズミの横に立ち、誰にともなくチドリが訊ねた。
「当然」とイズミ。「麺が伸びないうちに大急ぎで食ってくれ」
「大急ぎは嫌」
ぼそりと呟きながらチドリが座った。さっそく割り箸を持つ。
「チドリ。おまえ夜は――」
食べないんやろと言おうとしたジンは、チドリに横目で睨まれた。
余計なことを言わないで。
そんな無言の圧力を感じ、一つ身震いするとジンは割り箸を割った。
「い、いただこか」
「ええ、では」
ストレガたちは同時にラーメンに箸を付けた。
「ほお。旨いやないか」「ふむ。悪くない」「…………」
三人の箸が止まらないのを見て、イズミが嬉しそうに笑みを浮かべた。
「気に入ってもらえたなら、今度店に来てくれ。大将が作るほうが、数段旨いからな」
「ああ、そうさせてもらうわ」
ジンは口中のものを飲み下し、イズミにそう言った。

「待ってるからな」
イズミは頷くとズボンのポケットから携帯電話を取り出し、時間を確かめた。
「……影時間が近いな。俺、もう帰るからさ。悪いがどんぶりとか洗っておいてくれ、そのうち取りに来る」
「何や、慌ただしいな。もう少しのんびりしてけばええやろ、どうせ影時間になったら世界は止まるんやし」
「ちょっと人と会う約束してってな。そろそろ行かないと待ち合わせに間に合わない」
人と会う。その言葉にジンは首を傾げた。
「こんな夜中にか?」
「まあ、色々と事情があるんでな、俺にもさ」
苦笑し、イズミはどこか焦っているように部屋を出て行った。すぐさま、非常階段に通じる金属ドアの軋み音がかすかに聞こえてきた。
「せわしない奴っちゃな、あいつも」
そう言うと、ジンは再びラーメンを食べ始めた。不意にタカヤの箸が止まる。
「急ぐ理由があるのですよ、彼には」
「せやな。事情は人それぞれやし」
深く考えずジンは相づちを打ち、食事を続けた。

人気のない路地裏。もうすぐ影時間が訪れる。

街灯の支柱に寄りかかり、イズミは片手で左胸を押さえた。

息は不規則で荒い。額（ひたい）には脂汗がにじんでいる。

「……騒ぐんじゃない……じきに餌（えさ）をくれてやる……」

イズミは左胸を摑（つか）むように指を曲げた。中のモノをえぐり出さんばかりに力を込める。

そこに足音が近づいてきた。イズミが顔を上げると同時に、声がした。

「こんな時間に何の用だよ、イズミ」

体育会系の大学に通っていそうな雰囲気の、体格のいい若い男だった。

イズミは街灯の支柱から背を離した。息苦しさをこらえて笑顔を作る。

「すいません、先輩」

「挨拶はいいからさ。どうした、バイトで何か悩んでるのか？」

男はバイト先の先輩である。バイトを始めて日の浅いイズミに色々とよくしてくれている、気の良い青年だ。お人好しとさえ言える。でなければ、こんな時間に後輩の呼び出しに応じたりはしない。

——すいません、先輩。

もう一度、イズミは胸中で謝罪した。

「悩んでいるのは先輩じゃないんですか？」

「はあ？」

男が怪訝(けげん)な顔をした。構わずイズミは話を進める。

「俺、知ってるんです。先輩が最近彼女と上手くいってないとか、貸した金を返そうともしない友人に腹を立てているとか、うるさい親に辟易(へきえき)してるとか、そんな負の感情をもてあましていること」

「何でそんなこと、おまえが知ってるんだよ」

男の表情がますます怪訝になる。

「……だいたい、おまえに関係ないだろ。そんな話をしたいだけなら、俺は帰るぞ。何だよ、わざわざ来てやったのに――」

不愉快そうに身を翻(ひるがえ)そうとした男を、イズミが呼び止める。

「そりゃあ早く帰りたいか。もうすぐあの時間だからな」

イズミの口調から敬意が消えた。

「時計が止まる。照明が消える。そこかしこに血のような水たまりが出現し、月は巨大に輝き、空が燐光(りんこう)に覆われる」

「……な」

絶句し、男が身を固くした。ややあって、絞り出すように言った。

「あの時間を知っているのか？」

「まあね。俺はあの時間の――影時間の住人だ。抱え込んだ不安から最近堕(お)ちたあんたとは違う……」

イズミはトレーニングウエアの上着を脱いだ。Tシャツの類は着ていない。細身の裸体があらわになる。
「何だ、その体の入れ墨は」
イズミの首近くまで、上半身は絡みついた荊(いばら)のような黒い紋様に覆われていた。
左胸、心臓の上あたりに無数のひきつれた傷跡がある。
みみず腫(ば)れに似た赤い傷跡は、その一つ一つが花弁を思わせ、薔薇に似ていた。
「入れ墨じゃない。烙印(らくいん)だ——出来損ないのさ」
イズミはズボンのポケットから折りたたみナイフを取り出した。
柄に羽根のような装飾が埋め込まれたそのナイフを、ぱちんと開く。
「悪いね、先輩。あんたに恨みはまったくないんだ」
そばの街灯が数度点滅し、消えた。
何もなかった路地裏の地面に赤黒い水たまりが出現し、夜空から星が失せた。
緑色の夜。影時間の到来である。
男は、絶句したままそこに立っている——象徴化していない。
棺(ひつぎ)となることなく、この夜に存在している。
男は強い負の感情を持ったために、影時間に適応してしまっているのだ。
「恨むんなら、影時間に堕ちた自分を恨んでくれよ」
イズミはナイフを左胸に突き立てた。

歯をかみしめて、浅く刺さった刃を斜めに引く。
新たな傷が肌に刻まれ、血が垂れる。
「運がなかったな——俺なんかに会っちまってさ」
何かを感じ取ったのか。
男の股間に染みが広がり、臭気が立った。
「イ、イズミ。おまえはいったい何なんだよ」
「さあ。今の俺が何なのか、今じゃ俺にもよくわからない……たぶん、まだ人間のはずなんだけどな……最近じゃ、それも少し自信がなくなってきたよ」
自嘲気味にイズミが笑う。胸からナイフを引き、ぶんっと振って血の滴を飛ばす。
血の散った路面で、イズミの影が蠢いた——数秒後。
路地裏に男の絶叫がこだました。

「…………」
夜食後。食休みでぼんやりしていたチドリが、不意に視線を虚空にさまよわせた。
「どないしたん」とジン。ぼそぼそとチドリが言う。
「……今。一瞬感じた。シャドウか、ペルソナ……」
「ほんまか？」
問うたジンに、チドリは小さく首を振った。

「よくわからない。もう消えた……寝る」
チドリはふらりと立ち上がり、部屋を出て行った。
「なあ」とジンはソファーに寝そべっているタカヤを見やった。
「こないだ街中で遭遇(そうぐう)したシャドウの群れといい、妙やないか、最近」
「イギリスのことわざでしたか……好奇心はネコを殺すと言います。余計なことは考えないで、今だけを楽しみなさい」
ごろりとタカヤが寝返りを打ち、ジンに背を向けた。
「もし、何かが我らの前に立ち塞(ふさ)がるとしたら、それを滅ぼすだけのこと。どの道、いずれ時が満ちれば明らかになりますよ」
「何や、ようわからんが……ま、ええか。ほな、どんぶり片づけてくるわ」
ジンは残っているスープを一つのどんぶりに集めた後、どんぶりを重ねた。影時間でも、水は屋上の給水タンクから供給されるので水道は使えるのだ。
こうした雑事をするのはジンのみだ。チドリがするはずはなく、タカヤに至っては片づけという発想さえない。
片づけをしながらジンは考えた。
――イズミ。次はいつ来るんやろ。

P3

PERSONA3

III シャドウを喰らうモノ



「今度は、ばっちり威力出るやろ」

薄暗い部屋で、床に座ってジンは手榴弾を作っていた。

数日前、〈シャドウ〉に一発、イズミに一発と手榴弾を二個使ったが、それで予備が乏しくなったということはない。

上着のポケットには、せいぜい二個しか入らないが、いつも持ち歩いているトランクには、かなりの数の手榴弾が入っている。

ただし、今の予備の手榴弾は、いずれも爆薬の調合が同じだ。

先日使った結果、手榴弾というよりも閃光弾に近い性能だったため、調合する薬品の比率を調整し、手榴弾を作り直してみたのだ。

「爆発するだけやなく、炎も発生する。武器としては上等のはずやけどな」

完成した数個の手榴弾を前に、ジンはため息をついた。

「ま。実際に使うてみないことにはわからへんってところが、素人仕事やなぁ。タカヤの銃の弾薬と同じルートで軍用を仕入れたほうがええか——いや。それやとおもろない。今をどう楽しむか、それがわしらの唯一のこだわりやし。手榴弾作り、何やかんや言ってもおもろいからな」

そう、ぼそぼそと独りごちた。端で聞いたら爆弾魔にしか聞こえない台詞だが、ジンは爆弾魔だと自分では思っていない。あくまでミリタリーマニアだ。

「ジン。何を一人でぶつぶつ言ってるの」

背中で聞いた声に、ジンはびくりと身じろぎした。
「な、何でもあらへん。おまえこそどないしたんや、チドリ」
言いつつ上半身を捻(ひね)って振り返る。
部屋の入り口にチドリがいた。
今日の部屋着は、ずるずると裾を引きずるほどに長いワンピースだった。
袖も手が見えないほどに長く、襟元や袖、裾や前の切り返しなど、あらゆる箇所にびっしりとフリルがついている。
そないな服でよく転ばへんなと思うジン。チドリが言う。
「スケッチブックを使い切ったから、新しいのを買ってきて」
暇(ひま)さえあれば絵を描いているチドリにとって、メインの画材であるスケッチブックが切れるのは死活問題だが、ジンには関係がないことだ。
「そないなモン、〈影時間(かげじかん)〉になったら盗みに行けばええやろ」
「今、欲しいの。ついでだからまとめ買いしたい。たくさんあると安心するから」
「そんなら自分で行って買ってくればええやろ——あ。ついでに巌戸台(いわとだい)駅前の〈はがくれ〉行って、どんぶり返してきてくれや。いつまでも借りっぱなしやと、イズミに迷惑かかりそうやし」
あの日以来、イズミは姿を見せない。だから、どんぶりも借りたままだ。ええ加減返しに行かないと、とジンは考えていたから、チドリが出かけるのは都合がよかった。

チドリが不機嫌そうに返事をする。
「絶対に嫌。ジン、行ってきて」
「わしかて嫌や。ここ、おんぼろやけどクーラーあるしな。こないな時間に外に出たくないわ」
今は夕方だ。暑さのピークは過ぎているとはいえ、盛夏の八月。とてもじゃないが、外を出歩きたくはない。
それでもチドリは譲らなかった。
「でも、スケッチブックがもうないの」
付き合いきれへんわ、とジンは前に向き直った。
「せやから自分で買うてこいっちゅーねん、嫌ならどんぶりは返しに行かんでもええ」
じゃらりと鎖が動く音を聞き、ジンは硬直した。
まさかなと思いながら、ゆっくりと振り返る。
「チドリ。斧はやめぃ」
鎖分銅付きの手斧を、チドリは手にしていた。家の中でも持ち歩いているのはどうかとジンは思ったが、それを責めたら問答無用で手斧が飛んでくる。
ジンは妥協(だきょう)することにした。
「――わかった。じゃあわしも外に行く。わしはどんぶりを返しに行く。おまえはスケッチブックを買いに行く。そうせえへんか？」

チドリは黙り込んでいる。どう答えるか、考えているようだ。
しばらくして、チドリが舌打ちした。
――ヤバい。怒らせたか？
手斧が飛んでくるかとジンはすくみ上がった。
「……仕方ない。着替えてくる」
ずるずると裾を引きずってチドリが去っていく。ジンは安堵に深く息をついた。
「まったく。扱いにくい女や」
そう呟いた直後。ずがっと入り口のそばに手斧が突き立った。チドリが投げたのだ。
――聞こえたから。
そう告げるかのように鎖を鳴らして手斧が廊下から引っこ抜かれ、そのまま引きずられていった。
――スケッチブック、一〇冊くらいまとめ買いでもしてやらんと。
――今日はいつ、手斧が頭に突き刺さるかわかったもんやないな。
ぶるりとジンは身を震わせた。それほどクーラーが効いているわけではないが、妙に寒さを覚えた。
「ジン……遅い」
スケッチブック一〇冊が入った紙袋を足下に置き、噴水脇のベンチにチドリは座って

いる。服装は、いつものゴシックロリータ様式の白ドレス。
　ここはポロニアンモールという、この近辺では一番の繁華街にある広場だ。噴水を中央にして憩（いこ）いの場所となっており、人通りは多い。
　夏には不似合いということもあって、チドリの服装は強烈に人目を引く。目立ちすぎて、逆にキャッチセールスにさえ声を掛けられないくらいだ。
　離れた場所から物珍しげな目をチドリに向け「何か凄いな、あの子」と連れの友人と頷（うなず）き合う男たちや、「何あれ。バッカじゃないの」と陰口のようなことを言い合う少女たちがいる。
　普通の人間ならその声は聞き取れない。だが、チドリは感覚に優れた〈ペルソナ〉使いだ。否が応でも聞こえてしまう。
　――ウザい。いらいらする。この服装を変だと思うなら、目の前に来てはっきりとそう言えばいいのに、とチドリは考える。
　バカにされたところでチドリは平気だ。この格好も、描いている絵も、誰にでも理解してもらいたいと望んでいない。良さがわかる人だけにわかればいい――それに、良さを説明するつもりもない。
　自分が満足していれば、チドリはそれでよかった。
　ジンは今、隣駅の前にあるラーメン店はがくれに、どんぶりを返しに行っている。

　スケッチブック一〇冊は重いから、持ちに来るようにとチドリはジンに命じていた。それくらい、してくれて当然だ。そもそもジンがスケッチブックを一人で買ってきてくれたらよかっただけのことなのだから。

「――遅い」

　再びぼそりと呟いた時だった。片方の袖を、つんつんと引っ張られた。

　何、と袖を引かれたほうを見やる。

　くるりとした幼い瞳と目があった。

「お姫さま？」

　ワンピースを着た保育園児くらいの女の子が、横に立って袖の端を握っている。肩で髪を揃えている、可愛らしい子供だ。その視線は座っているチドリよりも低い。じいっとチドリが見つめていると、女の子がもう一度、

「お姫さま？」

　と首を傾げて訊ねた。女の子はきらきらとした目で、ちらちらとチドリの目と服を交互に見る。チドリのドレスは、言われてみれば童話の絵本で見る姫の衣装っぽい。

「……このドレス。そう見える？」

「うんっ」弾けるような笑顔で女の子が頷いた。

「そう。でもお姫さまじゃないわ」

　チドリは表情を変えずにそう答えた。女の子の笑顔が消える。

「……お姫さまじゃないの？」
「ええ」
幼女の幻想につき合う義務はないとまでは考えていないが、姫でもないのにそう装うなんて発想は、チドリにはなかった。
当然、意地悪をしているつもりなど毛頭ない。
だが、幼女は大きな目に涙を浮かべた。チドリが姫ではないのが悲しいほどに残念なようで、くしゃりと顔を歪めるとぼろぼろ涙をこぼし始めた。
女の子が袖を握る小さな手に力を込める。
――何で泣くの、この子。
チドリは困惑した。どうなだめればいいのか、考えもつかない。
女の子は、今はまだ涙を流しているだけだが、いつ大声を上げて泣きわめき出してもおかしくない雰囲気だ。時折、ひ、ひ、と息を飲み込んでいる。
チドリは、袖を摑まれたまま動けない。
いつまでこうしていなければならないの、と途方に暮れかけた時だった。
「何、幼女を泣かしとんのや、おまえ」
広場にジンが現れた。
「まさか、こないな街中で手斧出したりしたんやないやろな」
「するわけがない」

じろりとチドリはジンを睨み付けた。
「そないな顔じゃ子供も泣くわ」
悪びれる素振りもなくジンが言った。
「うるさい」
わずかにチドリは声を荒げてしまった。
しまったとチドリとジンが女の子に注目した、その途端。
「ひ」女の子がしゃくり上げる。
「びぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいっ!!」
女の子の中の何かがぷちんと切れたのだろう、まさしく火がついたように声を上げて泣き出した。
「ちょ、チドリ、おまえのせいやで、何とかせい、何とかっ」
「無理」
「優しくしてやればええねん、それくらいできるやろ」
「……どう優しくしてあげればいいのか、わからないわ」
ジンはあたふたしているが、チドリはなだめることなど諦めている。
「くっ。わしが何とかするしかないか」
ジンは腹を決めたようだ。女の子の前にしゃがみ込むと、必死にあやし始めた。
「ほらほら、泣くんやない。このおねーちゃん怖いかもしれへんが、とって食ろうたり

せえへんから、な？」

チドリは袖を摑まれていないほうの手で、すぐ前にあるジンの頭を拳骨(げんこつ)で殴った。

「いきなりなんやねん！」

「私は別段怖くない」

「いきなり殴らへんでもええやろ、まずは口で言え！」

ジンが怒鳴った。ますます女の子の泣き方が酷くなる。

「ぶええええええええええっ!!」

「今度はどないしたんやっ」

「今のはたぶんジンのせい」

「何でわしのせいやねん」

「目の前で大声出されたら誰でも驚くわ」

しもた、と小さくジンは呟き弱った顔で女の子に向き直った。

「すまんすまん、びっくりさせてもうたか。大丈夫やて、ほーら見てみぃ」

しゃがんだままの姿勢で、上着のポケットからジンが何かを取り出した。

野球ボールほどの大きさの球体が二つ――手榴弾である。

「ほいさっと」

あろうことかジンは、公衆の面前で、手榴弾でお手玉を始めた。

「えええぇぇぇ……」

女の子が泣きやんだ。涙でべたべたの顔をきょとんとさせ、軽くしゃくり上げながらも、宙を舞う手榴弾の動きを目で追っている。

「ジン。危ないわ」

「大丈夫や。ピンが抜けへん限りは爆発せえへんし」

「そうじゃなくて。そこ」

チドリは広場の一角を指さした。お手玉をしながらジンがそちらを見やる。

「げ」ジンは絶句した。

そこには交番があった。目つきの悪い、妙に迫力のある警察官が立ち番をしている。

ジンは警察官と視線が合った。

復讐代行という闇の仕事をしている〈ストレガ〉にとって、警察官はもっとも関わりたくない相手だ。

本物の手榴弾でお手玉をしているとは、警察官も夢にも思わないだろう。

だが、ジンは焦った。つい手榴弾を落としそうになる。

「と、とと」

慌てながらもジンは手榴弾をどうにか落とさずに済ませ、ポケットにねじ込んだ。

「お手玉、もう終わりなの？」

残念そうに訊ねた女の子の頭を軽く撫で、ジンは立ち上がった。

「あっこで怖いおっさんが睨んどるからな。ほな、さいなら——行くで、チドリ」

「そういうことだから離して」
まだ女の子に握られたままの袖をチドリは引っ張った。だが女の子は離してくれない。
「迷子やったら、あっこの怖いおっさんのところに行くんや。そしたらあのおっさんが、親探してくれる」
「さや、迷子じゃないの。パパが迷子」
「それを迷子と言うのよ」
少し辟易（へきえき）とした口調でチドリは言った。正直、気分的にはこれ以上つき合いきれない。
チドリはベンチから腰を上げた。
「ついてきなさい、交番行くから。ジン、荷物持ってきて」
袖を摑まれているのをいいことに、チドリは女の子を引っ張った。
その強引さに驚いたのか、再び女の子の顔が歪む。
「あ、あかん。また泣きそうや」
「――もう知らない」
チドリとジンは二人揃って途方に暮れた。
この場を収めてくれるなら、警察官でも歓迎したい気分だった。
「あー！　こんなところにいたのかっ」
その声が聞こえてきた途端、女の子の表情が明るくなった。
「パパ！」

　あれほど離さなかったチドリの袖を呆気なく離し、女の子は声の聞こえたほうへと駆け出した。
「さ、探したんだぞ、紗耶っ。ダメじゃないか、勝手に歩き回ったら！」
　露骨に動揺した口調で、男が女の子――紗耶に注意する。
「紗耶が迷子になったなんて真希さんが聞いたら、失神して倒れちゃうぞ。心配かけるんじゃない、まったく」
　あたふたと男が諭すように語るが、紗耶は笑顔だった。
「違うー、迷子はパパ！」
　男が、困ったように眉を寄せながらも、口元を緩めた。可愛くてしょうがないという素振りで、紗耶の頭を撫でる。
「あのな。パパはお薬買ってくるから、お店の前で待ってろって言っただろ」
「ここだってお店の前！」
　確かに、男が買い物をしただろう雑貨と薬を扱う店はここから見える。さほど遠くはないから、紗耶の言葉は、あながち間違いではない。
「しょうがないなあ、紗耶は」
「しょうがなくないもん」
　ひしっと紗耶が男の足にしがみつき、ぐりぐりと顔を黒いジャージにすりつける。服に鼻水がついたが嫌な顔一つしない男に、ジンが目を瞬かせた。

「――イズミ。おまえ、いつの間に子供なんかこしらえたんや」

慣れた手つきで紗耶を抱き上げて歩いてきたイズミが、苦笑した。

「俺の子に見えるなんて、眼鏡のレンズが曇ってるんじゃないか？」

「違うよ、さやはママの子だよ？」

紗耶が何故だか得意げな顔をした。

「せやかて、今、パパて」

ジンが不思議そうな顔をした。

「この子の歳を考えたら、イズミはあの施設で子供を作ったことになる」

チドリは口を挟んだ。そりゃそうやとジンが頷いた。

「たぶんこの子は、イズミの彼女の子……一緒に暮らしているから、パパと呼んでいるだけだと思う」

おー、とジンが納得して手を打った。

「わかってもらえたか」とイズミ。

「いーや、おまえが年増好きやったとは知らんかった」

「納得するポイントが違うだろ！」

イズミが笑った。「違うだろー」と紗耶が真似をする。

一緒になって笑っていたジンが、不意に表情を変えた。目つきに影が宿っている。

「……せやなあ。確かに違うわ。行こか、チドリ」

ジンは足下のスケッチブックの束が入った紙袋を手にすると、踵を返した。
「……?」
首を傾げるチドリを残し、ジンが足早に立ち去る。
「――ジン?」
困惑しているイズミをちらりと横目で見て、チドリはジンを追った。
「お姫さま、ばいばい」
と背中で紗耶の声を聞いたがチドリは振り返らず、ジンに並ぶ。
ジンの横顔は、不機嫌そうだった。
いったい何が気に入らないのか、チドリにはわからない。
わからないから、ただチドリはジンの隣を歩いていた。
アジトへの帰り道、始終無言で。

その日の影時間。ジンは一人で、ある場所を訪れていた。
イズミに依頼された「交通事故に見せかけた殺人」の現場を見に来たのだ。
調査から数日。報道された表の情報以外、何も明らかになっていない。
俗に〈釣り〉と呼ばれる手法で、インターネット上の複数のポイントで情報収集を試みたが、噂でさえ目撃者が出てこなかった。
事件の起きた日。場所。時間。全てが明白なのに、これは妙なことだった。

インターネットの利用者は、それこそどこにでもいる。誰か一人くらい「俺、この港区の人口を考えたら、日時のはっきりした事故ならば、見た」と反応するほうが自然なはず。

何か不自然だ。何らかの原因で事件の内容が変わってしまっている――

事実が事実ではなくなっている。

影時間に起きた殺人が、別の事件にすげ替えられてしまうのと同様の現象だ。

――この件。どうやら影時間がらみやな。

そうジンは判断した。だから、事件が起きたはずの影時間に事件現場に来た。

現場には家があったという。飲酒運転の車が家に突っ込み、被害女性が死亡したというのが事件のあらましだが、そこは更地になっていた。家があったという痕跡さえない。

辺りを見回してみても、影時間特有の血のように赤い水たまりがぽつんぽつんとあるだけで、これと言って特筆するようなものは――

「何や？」

ジンは目についた物へと歩み寄った。

更地の隅に古くさい牛乳瓶があり、一輪だけ小菊が生けられている。

小菊はもう枯れかけていた。死者への弔いだろうが、こんなものにジンは用がない。

「やっぱり何もないか……二年も前の事件や。証拠なんぞ残ってるほうが妙な話か」

無駄足だったがジンは落胆していなかった。予想通りだったからだ。

何もないのがわかっていて、現場を見に来たのには理由があった。
「……ほんま。わしらしくもない」
意味なくジンはアスファルトを蹴った。まだ少し苛立ちが残っている。
「何年経ったと思ってるんや。わしはどっぷり闇に浸かった。奴は普通の女との生活を選んだ。その違いやないか——イズミは向こう側に行っただけのことや」
イズミは〈表の世界〉に生活の場を築いている。
同棲をしている女性の娘を嬉しそうに抱きかかえているイズミを、ほんの一瞬だが、ジンはうらやましく思ってしまった。
——わしにもあんな生き方ができたんやろうか。
それはすなわち、タカヤとチドリといる今を否定するということ。
そんなことを考えてしまった自分が許せず、ジンは苛立ったのだった。
タカヤにもチドリにも悪いと思ってしまい、アジトにいるのが息苦しく、一人になって頭を冷やそうとジンは外に出てきたのであった。
事故当時のままなのか、更地脇の歪んだガードレールにジンは浅く座った。
一つ、大きくため息をつく。
「何や、イズミと再会してから調子狂っとる」
今さら、当たり前の暮らしを手に入れたいとは思わない。
そんな執着など物心ついた頃に失っている。

今さら、日の当たる場所で生きていきたいとは思わない。
――どうせ、もって数年の命やからな。
ジンはポケットから剥き出しのカプセル薬を幾つか取り出すと、口に放り込んだ。
飲んだのは、ペルソナの制御剤である。たいていの自然覚醒のペルソナ使いには無用の物だが、ジンのような人工ペルソナ使いには欠かせない薬だ。
定期的に薬を飲まないと、ペルソナが暴走してしまう――
主であるペルソナ使いを、分身にして下僕のペルソナが、殺すことさえある。
人工ペルソナ使いの研究施設から脱走する際、制御剤を大量に盗み出してきたから、薬が尽きることでストレガたちが死を迎えることはない。
逆だ。薬のせいで死ぬのである。薬の副作用で内臓がやられてしまうのだ。
血を吐き始めたら長くない。
幸いなことに、ストレガの誰も血を吐いたことはない。
だが、薬を飲み始めてかなりの期間が過ぎている。そう余命はないはずだ。
イズミが今どうやって薬を調達しているかをジンは知らないが、イズミも制御剤の服用を続けているはずである。
それはすなわち、イズミの命の期限も決まっているということだ。
「イズミかて、もう長くは生きられへんのにな。女と暮らすなんて、未練残りそうなこと、ほんまようやっとるなぁ」

ジンは頭を後に傾けた。

西の空。半ばまで欠けた月が佇む影時間の夜空は、いつものように緑色の燐光を帯びている。

「この空が、毎夜毎夜訪れるたびに。わしらは一歩ずつ、死に近づいていくわけや」

——何、感傷的になっとるんや、わし。

「らしくない。やめったら、やめや。とっとと帰ろ——」

ギィィという耳障りな獣の悲鳴のような叫びを背中で聞き、ジンはガードレールから腰を上げた。

「……何や？」

警戒しつつ、慎重に歩を進める。

交差点を一つ過ぎ、次の交差点に至ったところで、くちゃくちゃと湿った音が聞こえてきた。

ジンは電柱に隠れながら、音のするほうを覗きこんだ。

空がぼんやりと光っている影時間だ。街灯は消えていても、視界はそれなりにある。

薄暗がりに、巨大な影がうずくまっているのが見て取れた。

影は、背を丸めて何かを一心不乱に喰らっている——傍らに転がった仮面のようなオブジェにジンは気がついた。

「……な……シャドウを喰ろうとる……」

喰われているモノ。それは影時間の怪異、シャドウだった。

さらに、そのシャドウの奥。倒れている人間の足が見える。

状況からジンは、こう考えた。

喰われているシャドウは、その人間の中から強引に引きずり出され、狩られた。

この巨大な影は――

シャドウを狩るモノ。

名付けるとしたならば〈シャドウ喰らい〉。

そんなもの、ペルソナ使いのジンでも聞いたことのない化け物だ。

――ヤバい。

ジンの背筋を、悪寒が駆け抜けた。

同時にシャドウ喰らいがジンに気づいたか、顔を上げた。

ジンは隠れていた電柱から飛び退いた。

直後、シャドウ喰らいがこちらに向かって跳躍した。

じゃぎっと耳障りな音が響き、隠れていた電柱が、ジンの頭の高さで大きくえぐれた。

巨大な熊の爪で引き裂かれたような、いびつな断面。電柱はコンクリート製だ。こうやすやすとえぐられる代物ではない。

切り倒される木のように、電柱が傾いで倒れる。幾本か電線が千切れて踊った。

ジンはさらに跳びずさった。シャドウ喰らいが追いすがる。

その気配。どう見てもまっとうな生き物ではない。
「――こいつもシャドウか！」
ジンは跳びずさりながら即座に上着のポケットから手榴弾を一つ取り出し、安全ピンを引き抜いてシャドウ喰らいに放った。
ごおんっと重く大きな破裂音が轟き、火球が発生した。
「よし、威力はばっちりや」
今日こしらえたばかりの手榴弾は上出来だった。数個使えば、乗用車でもスクラップにできるだろう。
炎が収まる――飛びだしてきた影に、ジンは眼鏡の奥の目を丸くした。
「阿呆なっ⁉」
シャドウ喰らいは無傷だ。その全身が、消えゆく炎に浮かび上がる。
五指が鎌のように鋭く伸びた手を持つ異形。
人に似た四肢のバランスだが、枯れ枝のごとく細い体に不似合いなほど両手が大きい。
背を丸めているが、体軀はゆうにジンの倍はあるだろう。
その体は真っ黒で、表面は溶けたコールタールのように平滑でぬらぬらと光っている。
実体化した悪魔の影法師。
ジンには、そう見えた。
目鼻のない頭で、ジンに食らいつこうとシャドウ喰らいが顎門を大きく開く。

「冗談やない」
ジンは二個目の手榴弾を取り出すと即座に安全ピンを抜き、シャドウ喰らいの口に放り込み、大きく跳びずさった。
どん、とシャドウ喰らいの頭が破裂した。
食わされた手榴弾で内側から爆破されたのだ。
頭を失ったシャドウ喰らいが、数歩たたらを踏み、よろけて立ち止まる。
「さすがにおだぶつや——ろ？」
瞬間的にシャドウ喰らいの頭が復元した。途端、シャドウ喰らいの体のふらつきはぴたりと収まり、ジンに向けて一歩踏みだした。
「——洒落(しゃれ)にならへんて」
ジンが持っていた手榴弾は、使った二つだけ。予備の入っているトランクは、アジトに置いてきてしまった。
残る武器は、ただ一つ。
最強にして最後の、己(おのれ)の分身。
ジンは、腰の後のホルスターから〈召喚器(しょうかんき)〉を抜いた。
すぐさまこめかみに銃口を押しつけ、トリガーを絞る。
「出番やっ！」
呼び出しに応え、死を支配する機械仕掛けの神、〈モロス〉がジンの前に出現した。

「目にモノ見せたる」
モロスの独楽型ボディに刻まれた文字が発光する。
呼応して、地に青黒い光が幾筋も走った。
シャドウ喰らいを中心に光の筋は互いに交わり、幾何学的な模様を描く。
モロスの有する特殊スキル。五割の確率で一撃死をもたらす闇の呪い〈ムドオン〉という術を発動させる魔法陣だ。
「闇に呪われ死にさらせ‼」
カッと魔法陣が発光した。モロスを通じて、ジンは呪いを成功させたという手応えを感じた。確率勝負に勝ったのだ。
——これで奴もイチコロや。
敵は塵と化して消滅する。
そのはずなのに、シャドウ喰らいは何事もなかったように立っている。
シャドウには闇の力に耐性を持つものが存在する。運の悪いことに、シャドウ喰らいはそのタイプらしい。
ヤバい、と思うジンの前で、力を使ったモロスが消滅する。
今のモロスが使える術は、おおまかに言えば、死の呪いと火炎の二種類。
死の呪いはたった今、シャドウ喰らいには無効だと判明した。火炎は——
「あかん、モロスの火力じゃ足らん」

手榴弾に耐えた相手だ。相当に高い火炎耐性を持っていると考えられる。

ストレガ三人のペルソナは全て火炎の力を扱えるため、三人同時に火炎を放つなどの手段で術の威力を徹底的に強化すれば、この敵を屠れるかもしれない——だが、この場にはタカヤもチドリもいない。

——どないする。

ジンは立ちすくんでしまった。手が何も思い浮かばない。

まさしく打つ手なしという状態だ。

ゆらりとシャドウ喰らいが再び動き出す。

動作は悠然としていて、焦りなどまったくない。

己の優位を確信した狩人のオーラをまとい、シャドウ喰らいが近づいてくる。

それでもジンの足は動かない。

完全にシャドウ喰らいに呑まれてしまっていた。

このままでは、文字通りに飲まれてしまう。

不意にシャドウ喰らいが止まった。何かに気づいたように、わずかに首を傾げる。

逃げ出すチャンスだ。だが、それでもジンは立ち尽くしていた。

「馬鹿野郎、何を突っ立ってやがる!」

ぐんっと後から襟首を強く引っ張られ、ようやくジンは我に戻った。

「逃げるぞ」

ジンを窮地から救った男が身を翻す。ジンはその背を追った。

その男は夏だというのにニット帽を目深に被り、タイトなコートを着ている。

荒垣真次郎。

ストレガの敵でも味方でもないペルソナ使いである。自然覚醒タイプだがペルソナの制御に難があり、ストレガが制御剤を融通してやっている男だ。

「何でおまえが、こないなとこに」

「……ただの偶然だ」

走りながら、荒垣が持っていた物を捨てた。

ジンの視界の隅を後方へと去っていったのは、見間違えでなければ一輪の小菊だった。

事件現場の隅にあった、一輪挿しをジンは思い出した。

「あの花、おまえか」

「無駄口叩く暇があったら走れ」

シャドウ喰らいはもう追ってこないようだったが、荒垣は振り向かず、走る速度も落とさなかった。

どれほど走ったのか。ジンの息がかなり上がってきたところで、ようやく荒垣が足を止めた。

「……逃げ切れたらしいな」

さっそく立ち去ろうとした荒垣を、ジンは呼び止めた。

「ちょい待て、礼くらい言わせろや」
「別に礼なんかいらねぇ。……薬、調達してもらってるしな」
一瞬だけ足を止めて荒垣はそう言うと、後は無言で去っていった。
「相変わらず無愛想な奴や――今度、何か礼をせんとな。助けられたのは事実やし」
呟き、ジンは考える。
――あの化けモン。いったい、何やったんや？
もっとも似た存在は、ジンの考えた通り、やはりシャドウと呼ばれる影時間の怪異だ。シャドウには人型も存在する。あの黒い異形は見たことのないタイプだが、人型シャドウと考えることは、それほど的はずれではない。
そのはずなのに、ジンは納得できなかった。
ジンの前で立ち止まって見せた、首を傾げる動作。
あれが、妙に人間くさかった。
無論、シャドウ喰らいが人間なはずはない。
ジンの背の倍ほどもある人類などありえない――
だがジンには、あの異形の後に人間の気配が透けて見えたような気がしていた。
「……ほんまに。何やったんや、あれは」
思い出すだけで背筋が寒い。
どうしてシャドウ喰らいを自分がこれほどに恐れるのか――

これほどに気になってしまうのか、ジンにはわからなかった。
アジトに帰ったジンを見て、いつものソファーに寝そべっているタカヤがこう言った。
「どうしました。そんな浮かない顔をして——シャドウにでも襲われましたか」
忘れ物でもしてきたかと訊ねるような軽い口調だったが、ジンはトラブルに遭遇（そうぐう）したことをタカヤに見抜かれていると察した。
「シャドウを喰らうというけったいなシャドウに、わしも喰われそうになった。危ないところで、荒垣に助けられてもうた」
「彼にですか」
ふむとタカヤが小さく頷いた。
「彼にはこれからも、色々と情報を教えてもらいたいところ——何か礼をすべきですね。いいですね？」
そうタカヤが丁寧な口調で命令した。ジンは頷き返した。
「わかっとる。近く、連絡取るつもりや」
「ところで、ジン。先ほどの、シャドウを喰うというシャドウですが」
タカヤが話題を元に戻した。
「どんな姿形をしていましたか」
姿。ジンには思い出すまでもない。まだ脳裏（のうり）に恐怖と共に異形がこびりついている。

「影が凝固したような真っ黒い奴や。背は、わしの倍ほどか。一発で電柱をへし折るような化け物——わしはシャドウ喰らいと呼ぶことにした。もう会いたくないけどな」
「影が凝固したような、ですか」
何やらタカヤは考え込んだ。ややあって、首を振る。
「——いえ。それはさすがに悲劇ですね。そうではないことを祈りましょう……」
ジンには意味のわからないことを言い、タカヤはそれっきり黙り込み、目を閉ざした。
「……タカヤ？　寝てしもうたか？」
返事がない。ジンも今日はもう休むことにした。壁に寄り添うように、床に寝そべる。
——何や、今夜は酷く疲れた。荒垣への礼は、明日また考え——……
思考の途中で、ジンの意識は途絶えた。

——奴には余計なとこを見られたな。
ジンと会った翌日の夜。荒垣は改めてあの更地に行ってきた。今はその帰り道だ。
先日は、人に見られまいと影時間を選んだのが裏目に出て、ジンと遭遇してしまったため、今夜は影時間前に用事を済ませてきた。
——今日は誰とも会うことなく終わりそうだ。
そう安堵しながら、荒垣は路地裏を行く。午前零時が近い深夜だ。暗い路地裏を歩いているような人間は、自分の他にはいないはず。

荒垣はそう考えていたのだが、前方から誰かが軽快な足取りで走ってくる。

こんな時間にでも、ジョギングをする人間。

そんな珍しいとさえ言える、ある意味では非常識な男を、荒垣は一人だけ知っている。

「……ちっ」

荒垣は舌打ちした。来た道を戻ろうと踵を返す——が、少し遅かった。

走ってきた男に声をかけられた。無視して立ち去ろうとしたが、

「シンジじゃないか。どうした、こんな時間に」

「おい、待てよ」と呼び止められた。

さすがに気づかない振りをするのも不自然だと、嫌々ながら荒垣は振り返った。

「——アキ。おまえこそ、こんな夜中にロードワークなんかしてんじゃねぇよ」

真田明彦。それが声をかけてきた男だった。荒垣も真田も孤児であり、付き合いは孤児院の時代からだ。荒垣にとって、一番古い馴染み——親友だった。

「今週は夏期講習でな。夜中にならないとトレーニングの時間が作れないんだ」

と、真田が首に巻いたタオルで汗を拭きながら答えた。

夏期講習。荒垣も真田同様、月光館学園高等部に在籍しているのだが、今は自主休学中だ。夏期講習という単語が荒垣にはどこか懐かしく思えたが、それを顔には出さない。

「……このトレーニングマニアが。勉強で忙しい時くらい、ロードワークなんぞ休めばいいだろ」

「バカを言うな、シンジ。俺はボクサーだ。トレーニングを一日休めば――」
　真田に皆まで言わさず、荒垣は口を挟んだ。
「取り戻すのに三日かかる、だろ。ったく、くそまじめで暑苦しい奴だ、相変わらず」
「暑苦しいとはなんだ、暑苦しいとは！」
　向きになって詰め寄ろうとする真田を、
「そういうところが暑苦しいってんだよ」と荒垣は突っぱねた。
う、と真田が真顔で声を呑む。思うところがあって、反論ができないようだ。
「用がねぇなら、俺は行くぜ。じゃあな」
　改めて立ち去ろうとした荒垣の肩を、真田が掴む。
「そんな逃げるように帰ろうとしなくてもいいだろう。少しぐらい、話をさせろよ」
「おまえが話をっつー時にする話は、いつも同じだろうが。俺はそれを聞きたくないんだよ」
　肩を掴んだ真田の手に、いっそう力がこもった。
「聞きたくなくても、何度でも言うぞ。寮に戻ってこい、シンジ。俺たちにはおまえの力が必要なんだ」
「――今さら〈S.E.E.S.〉に俺は必要ねぇだろ。二年の新人どもだって、すっかり戦力になるようになってるんじゃねぇのか。美鶴（みつる）とおまえ、さらに二年の三人で、五人もペルソナ使いがいるんだ。それで何が不満だ」

荒垣も、かつて〈S.E.S.〉に在籍し、巌戸台分寮で暮らしていた。
ある事故がきっかけで荒垣はチームを離れて寮を出たが、真田はしょっちゅう、帰ってこいと説得しにやってくる。
戻る気のない荒垣にとって、いくら親友でも、それは歓迎できない行動だった。
「不満なら、あるぞ」と真田。
「あ?」と予想外の言葉に荒垣は眉を寄せた。真田が話を再開する。
「先日のことだ。俺たちは、ある旧陸軍地下施設に潜んだシャドウを討伐に行ったんだが、邪魔者が現れた。それも、二人もだ」
二人。荒垣は心当たりがあったが、黙って真田の話を聞き続けた。
「そいつらが、俺たちを地下に閉じこめようとした。どうやら奴らは――」
ペルソナ使い。荒垣はその言葉を聞く前に、
「……俺には関係ないって言ってんだろ」
と言い放ち、真田の手を振り払った。
〈S.E.S.〉の邪魔をしたのは、間違いなくストレガだ。荒垣はそう考えた。
そのストレガと、多少なりとも交流があるために、ますます居心地が悪くなる。
〈S.E.S.〉が何のために大型シャドウ討伐を続けているのか、その目的をストレガに教えてしまったのは、他でもない荒垣なのだから。
荒垣は、早足で真田の前から立ち去った。

「おい！」と真田に呼ばれたが、今度はもう振り向きもしない。
「……やけに機嫌が悪そうだな……今日のところは出直すか」
真田がそう呟き、去っていくのを荒垣は背で感じ取った。
──悪ぃな、アキ。
ちらりと荒垣は思ったが、帰っていく真田を振り返りはしなかった。
己自身に、荒垣はひたすら腹が立つ。
「クソが」
手近な場所にあった空き缶を、思いっきり蹴飛ばした。
勢いよく飛んでいった空き缶は、道路の縁石で跳ね、荒垣の額(ひたい)を直撃した。
普段から被っているニット帽の額には、金属プレートの飾りがついている。そのおかげで、缶が当たっても衝撃はあったが怪我(けが)はしなかった。
それでも荒垣は、小声でこぼした。
「……痛ぇな、畜生」
痛むのは、心の奥だった。

IV 夏祭りの夜



夜の巌戸台駅前。今日が週末だからか、繁華街のポロニアンモールほどではないが、夕食時をとうに過ぎた時刻にしては、行き交う人が多い。

そんな駅前の一角で、ジンは人を待っていた。

待ち合わせに指定した時刻は、すでに一五分ほど過ぎている。

「……思ったよりも人多いな……」

ジンはぼやいた。こうしたにぎやかな雰囲気をジンは好まない。

呼び出した相手は、ジンに輪をかけて喧噪を嫌う傾向がある。

独りでいたい。待ち合わせの相手は、常にそんなことを考えていそうな男だ。

「――来ないかもしれへんなぁ。こないに人がいるとは思うてなかった。失敗や」

復讐を代行する職業暗殺者のジンは、普段から世間に――表の世界に興味がない。曜日なんて、興味がないことランキングの上位に位置する。

今日が何曜日だろうが、どうでもいい。ある意味、毎日が休日なのだから。

やれやれと肩をすくめつつ、帰ろうかと周囲をジンは見渡した。

「ん」ジンは、街灯と街灯の狭間の暗がりにある街路樹に目を止めた。

それほど立派な樹ではない。幹の太さは電柱よりもずっと細く、当たり前だが人が隠れられるような物ではない。

だが、そこには隠れるようにしている人影があった。

ジンはため息をつくと、つかつかと街路樹に向かって歩いていった。

「あんな。来てるなら来てるで、隠れとることないやろ」
「別に隠れてなんかねぇよ」
待ち合わせの相手——荒垣がぼそりとこぼした。気まずいのか、ジンを見ない。
「うるせえな。何の用だ。こんな時間にこんな場所に呼びだしやがって」.
「用があるのは、そこや」
ジンは親指で肩越しに後を指し示した。横目で荒垣がそちらを見やる。
そこには、飲食店が多く入っているテナントビルがあった。
イズミがバイトしているラーメン店も、このビルの中にある。
「この前の礼——〈はがくれ〉で、特製ラーメン。どないや」
これが、シャドウから窮地を救われたジンの考えた謝礼だった。
以前、ちらっとだけジンは荒垣から聞いたことがある。
『一人で食うならラーメンが気楽でいい』と。
荒垣は素直な物の言い方をしない。
ジンは、暗にラーメンが好きだと言ったんちゃうか、と察していた。
申し出に一瞬だけ荒垣が目を見開いた。黙り込むこと、およそ一〇秒。
「悪くねぇ提案だ。乗ってやる」
荒垣は仏頂面のままだが、口調にはわずかに機嫌の良さが感じられた。
「ほな、行こか」

にやりとジンは笑み、先に立って歩き出した。

店内に入ると濃厚な匂いが鼻を刺激した。

イズミが差し入れに持ってきたラーメンと同じ魚系のダシの匂いだが、ジンには密度が違って感じられた。服に匂いが染み付きそうなほどだ。

食事時を過ぎているからだろう、店内はそれほど混雑していない。

「いらっしゃい、お好きな席にどうぞーっ！」

威勢のよい声が、カウンター席奥の厨房(ちゅうぼう)から飛んできた。

聞き覚えのある声だ。その店員とジンは目があった。

「何や。イズミ、今日は出勤日やったんか」

「何だ、俺が働いてたら文句あるのかよ」

イズミがカウンターの向こうから、お冷やの入ったコップとおしぼりを二人分乗せたトレイを持って出てきた。

「ありまくりや。おまえが真面目に働いとるなんて気味悪いわ」

エプロン姿のイズミに軽口を叩き、ジンは近くのテーブル席に向かった。

無言で荒垣がそれに従い、ジンと向かい合わせに座る。

「そう言ってくれるなよ」

お冷やとおしぼりをテーブルに置き、エプロンのポケットから伝票ホルダーを手にし

て、イズミが続ける。
「ご注文、お決まりですか？」
知り合いでも客は客。イズミはそうわきまえているようだ。
他人行儀な口振りに違和感を覚えながら、ジンは答えた。
「ほな、特製二つ——ええよな？」
ジンに問われた荒垣は、無言で小さく頷いた。
ところがイズミは、注文を伝票に記入しない。
「どないしたん」
訊ねたジンに、イズミが顔を寄せる。
「あのな。特特特っつー裏メニューってあるんだが、興味ないか。特製より値段が高いんだが、俺がおごる」
「……裏メニューだと？」
即座に反応したのは荒垣だった。
「そんなもんがあるのか」
仏頂面のままだが、荒垣は興味が隠せないらしい。
ジンも、そんなメニューの存在を聞かされたら関心がわかないわけがない。
イズミがいっそう声を潜める。
「ま、実は常連向けに色々ある。その中でも、特特特が俺のお薦めだ」

「んなら、それ二つ頼むわ」
ええよな、とジンは荒垣に話題を振った。再び荒垣が頷いて見せた。
何事もなかったかのように、イズミが作り笑顔で身を離した。
「大将、特製二つお願いします！　それにしても今日は暑いですねえ！」
厨房の奥から「あいよ、特製二つ！　しかし暑いな！」と太い声が返ってきた。
暑い。それが符丁らしい。
「OK(オーケー)だってさ。じゃあ楽しみに待っていてくれ」
ウインクしてイズミが厨房に戻っていった。荒垣がその背を横目で見送った。
「……知り合いか？」
「昔の連れや」とジン。
「昔のだと？」
荒垣が口をつぐんで考え込む。しばらくして、
「奴も〈ペルソナ〉を使うのか？」と声を潜めて訊ねた。
「同じ施設にいたからな」
それで返事は充分だったようだ。荒垣は難しい顔をした。
荒垣が何を考えているのか、ジンにはおおよそ想像できた。
「心配はいらん。イズミは、わしらのように連中の敵にはならんよ」
連中——〈ストレガ〉が敵対している、正義の味方気取りの一団。

〈影時間（かげじかん）〉の象徴である怪異の塔〈タルタロス〉の謎を解き、影時間を世界から消し去ろうと活動している、〈S.E.E.S.〉のことだ。

荒垣が、かつてその〈S.E.E.S.〉の一員だったとジンは知っている。チームを抜けた理由は知らないが、今でもメンバーから戻れと繰り返し誘われていることも知っている。

「——敵、か。聞いたんだが、おまえら、あいつらに喧嘩を売ったらしいな」

荒垣に言われた通りだ。先日、ストレガは〈S.E.E.S.〉の作戦を邪魔するべく行動した。〈S.E.E.S.〉調査に赴いた旧陸軍地下施設に行き、彼らを中に閉じこめたのである。

〈S.E.E.S.〉が閉じこめられっぱなしになるような、間抜けな連中だとジンは考えていない。荒垣が話を聞いているのだから、おそらくはその日のうちに地下施設から脱出したのだろう。それはジンの予測の範囲内だった。

「もう知っとったか。せや、こないだの満月の晩、連中の作戦を邪魔してやった。ついでに顔見せしといたわ」

〈S.E.E.S.〉が影時間をなくすために行動しているとストレガに教えたのは、荒垣だ。責任の一端を感じているのか、荒垣が渋い顔をした。

「何や、その顔は。やっぱ仲間を裏切るようなことをしたと悔いとるんか」

「……そんなことはねぇ。前にも言ったが、俺は連中の仲間なんかじゃねえよ」

そう答えた荒垣は、ジンから目をそらしたままだった。その態度こそが雄弁に事実を語っていたが、ジンは追及しなかった。
「まあええわ。こないなとこでする話ともちゃうしな」
「ああ」と荒垣が相づちを打つ。そのまま二人は黙り込み、ラーメンを待った。
カウンターに座っていた、太った背の低い男が席を立ち、何故(なぜ)かジンたちのテーブルに来て、話しかけてきた。歳はジンたちと同じくらいだ。学生だろう。
「お話は終わったかね、チミたち。今の話、ボクのキングイヤーが聞き逃さなかったんだけど」
「あ?」と荒垣が太った男を睨(にら)み返す。
「知っとる奴か?」とジン。荒垣が軽く首を横に振る。
「知らねぇな、こんな奴——おい、おまえ」
「ななな、何かっ」
荒垣の目つきに、男が狼狽(ろうばい)した。荒垣がむすっとした顔で言う。
「用があるのはそっちだろ。何の用だ」
明らかに男は怯(おび)えているのだが、それでも妙に偉ぶった態度を取った。
「さ、さっきのだねぇ、特特特とかいう話。詳しく聞かせてもらえるかねぇ」
「わしらにゃ答えることなどあらへん。あっちの店員に訊(き)けや」
ジンは顎(あご)で、カウンターの向こうで働いているイズミを指した。

不満そうな顔をしている男に、ジンはひらひらと手を振った。
「わかったら、とっとと去ね」
男は、ボクを軽く見たことをいつか後悔するんだとブツブツ文句を言いながら、カウンター席に戻っていった。
「あー、チミチミ。あちらのテーブルと同じモノをボクにも可及的速やかに大至急、餓死する前に、くれたまえ。酷いじゃないか、常連のボクに内緒にしてる裏メニューがまだあるなんて」
声をかけられたイズミではなく、店主が男に応対した。
「いやあ、実はそのメニュー、一日一〇食限定でしてね。お客さんに教えたら、一人で一〇食、毎日食べたがるかと思いまして」
「ほほぅ。ボクがそこまで気に入ると？　よほど味に自信が……これは食べずに帰るわけには……マイグルメフレンドも呼ぶとしよう」
男は携帯電話を取り出した。すぐに店主が苦い顔をする。
「あのー。件のメニュー、今日はお客さんの分でラストなんですよ」
「なんと！　……それはしかし……ぅぅむ……腹は背に替えられぬ……彼には涙を飲んでもらうということで、美味しいところをより美味しく頼むよ」
男は驚き、悩み、一転してやけに晴れやかな顔になり、携帯電話をしまった。
それにしても、と店主が男に話しかける。

「はがくれ丼に特々盛に担々メンまで喰って、まだ喰えますか」
突き出た腹をさらに突き出し、男が胸を張った。
「体脂肪率以外、ボクは超健康優良児だからねぇ。まだお腹が可哀想な声で鳴いているよ——うっぷっ。ぇエぇマぁあぁジェンシィぃぃ……」
唐突に背中を丸めて口を両手で押さえると、男は椅子から飛び降りて店の奥のトイレに駆け込んだ。
しばらくして、すっきりとした顔で帰ってくる。
「リセット完了。早く頼むよ」
「へいっ」と店主は返事をし、仕事に戻った。
ジンと荒垣は、呆れた顔で今の男と店主のやり取りを見ていた。
「変な奴やな」「まったくだ」
軽く頷き合って、再び黙ってラーメンを待つ。
数分後。
「お待たせしました！」
イズミがラーメンを運んできた。どんぶりは、大盛用の物でかなり大きい。
ごん、とテーブルに置かれる音も重量感たっぷりだった。
(はがくれ裏の裏の裏メニュー、特盛特濃特製ラーメンだ。特が三つの豪華さ、堪能してくれ)

ささやくように言い、イズミは「では、ごゆっくり」と挨拶して厨房に去っていった。

まじまじとどんぶりを見下ろし、荒垣が呟く。

「すげえ。チャーシューが七分に味玉が三分……具が多すぎて麺が見えねぇ」

特製に比べて分厚く切られたトロ肉チャーシューと、縦切りにされた味付けゆで卵がどんぶりにはみっしりと並べられている。その中央、こんもりと盛られた白髪ネギ。

荒垣が言った通り、麺などまったく見えない。

「うは。こりゃ食い出ありそうや」

ジンはさっそく割り箸を割った。そのジンよりいち早く、荒垣が食事を始めていた。

ず、とレンゲでスープをすすり、唸る。

「む。スープも特製より濃いな――旨ぇ」

一口麺をすすったジンにもすぐにわかった。イズミの土産とは旨味のレベルが違うと。

チャーシューも厚切りだからか、味が濃く感じられる。

「なるほどなぁ。確かに特濃や」

互いに一言感想を交わした後、その味にしばし没頭する。

会話もなく、ジンと荒垣はしばらく食事を続けた。

カウンターの男が特特特製ラーメンにやたらと感激しているが、相手にするとうるさそうなので、二人揃って無視を決め込む。

半ばまで減ったところで、ジンはためらいがちに口を開いた。

「こないだの、影時間——あの更地に花を供えてたの、おまえやろ」
ジンが荒垣を呼んだのは、助けてもらった礼とは別にこの質問をするためだった。
気になっていた。何故、荒垣がそんなことをしていたのか。
荒垣の箸がぴたりと止まった。
「あそこで起きた事故で、女が一人、死んだそうやな。何か関係あるんか、おまえ」
「知らねえな」
そう速答されるだろうとジンは予想していたが、荒垣は黙り込んでしまった。
——ほんまに関係あるんか。
胸中でジンは、そう呟いた。
ゆっくりとした動作で荒垣が箸をテーブルに置く。
ジンと目を合わせることなく、がたんと椅子を鳴らして荒垣が立ち上がる。
「悪ぃ。用事、思い出した」
「……そうか。なら、しゃあないな」
荒垣の態度をジンは答えとして受け取った。
——目一杯、関係あるわけか。
ペルソナ使いである荒垣の関わった事件ならば、やはり影時間に起きたことだろう。
イズミの依頼の事件が起きたのは、二年前。
以前に聞いた、荒垣が〈S.E.E.S.〉を抜けた時期と一致する。

この場で、どう関わったか問いつめることは、ジンにはできなかった。
ごまかすことさえ上手にできない荒垣の不器用さに、どこかチドリの影を見た。
チドリは感情表現が下手だ。荒垣も、チドリほどではないが心情を表現するのが苦手そうだとジンは思った。あえて何も言わず、立ち去る荒垣を見送る。
「あの店員にも謝っておいてくれ」
最後までジンと視線を交えることなく荒垣は去っていった。
荒垣のどんぶりには、まだラーメンが半分ほど残っている。
少し遅れて、イズミがやってきた。
「……どうしたんだ、おまえの友達」
「――友達ちゃうけどな。何や用があるそうや」
ジンは荒垣が残したどんぶりを手元に引き寄せた。
「心配すな。おまえの好意は、わしが残さずたいらげる」
「いや、無理するなよ。特特特製、一人前でもそうとうボリュームあるし」
困惑を隠さないイズミに、ジンはびしっと箸を立てて見せた。
「食える時に食う。それが、わしがあの施設に拾われる前に覚えたことや。ガキの時分、ストリートで寝起きしとったイズミも同じやろ？　のんきな同棲暮らしで忘れたか」
そうだったなと苦笑したイズミが、オーダーに呼ばれて別のテーブルに向かった。
ふ、とジンは小さく笑った。

「さて。気合い入れて食うか」
アジトに戻るなり、ジンは床に転がった。
「あー。さすがに食い過ぎや……」
かなり旨かったから食い切れたが、さすがに厳しい量だった。特盛というだけあって、一人前でも、実際は二人前はあったんじゃないかとジンは今さら思った。
荒垣が残した半分を含めて、おおよそ三人前相当。ラーメンは汁物だから腹に溜まる。食える時に食うという主義でも、さすがに今日は度が過ぎていた。
「みっともないですよ、ジン」
定位置のソファーに寝そべっているタカヤに注意されたが、姿勢を正す気力もない。
「仕方のないジンですね……」
呆れた口調をタカヤは改めた。
「ところで、どうです。イズミの依頼、調査は進んでいますか」
調査に進展はあった。事件に、おそらく荒垣真次郎（しんじろう）が関わっているとわかった。これまでは目撃者さえ見つけられなかったのだから、大きな前進だ。
だがジンには、今の段階でそれをタカヤに話すつもりはなかった。
疑わしきは罰しましょう。
タカヤがそう言い出す可能性は、ゼロではない。そして言い出した場合、ジンは従う。

よほどのことがない限り、ジンはタカヤに逆らうつもりはない。

しかし。あの不器用な男を、できることなら殺したくないとも、ジンは望んでいる。

——おかしな、矛盾(むじゅん)した執着やな。我ながら。

いずれにしても調査は必要だ。その結果、偽りなく荒垣が『黒』ならば——その時は。

——腹をくくるしか、ないんやろうけどな。

「ぼちぼちな。まだ確証はないが影時間がらみっぽいで、この事件」

「そうですか。では引き続き、調査を頼みます」

あっさりとタカヤが引き下がった。ごろりとソファーで寝返りを打つ。

すぐさま寝息が聞こえてきた。今日はもう、このまま就寝するのだろう。

部屋が静まる。そこに、ぺたぺたと裸足(はだし)の足音が聞こえてきた。

「ジン。ラーメン」

部屋に来るなり、いきなりチドリはそう言った。

仰向けに寝そべったまま、ジンは顔だけを入り口に向けた。

今日のチドリの部屋着は、すっぽりと頭から被る奇妙な貫頭衣(ポンチョ)だった。

袖らしきものはなく、腕が見えない。さらに色が白いせいもあって、裾を引きずるてるてる坊主のような感じである。

「ラーメンて。んなもん、あるかいな」

「でも、匂う。隠してるなら出して」

「隠してなんかおらんて。匂うわけ——あぁ、服やな。はがくれ行って来たんやけどな、店の中はスープの匂いが充満しとった。そのせいや」

「独りで美味しい物を食べてくるなんて……許せない」

チドリの服の中で、じゃらりと音がした。手斧の鎖の音だ。

さすがにジンも跳ね起きた。

「ま、また今度イズミにラーメン持ってこさせるし！　今夜のところは我慢してくれ、な？」

チドリは口を真一文字につぐんで何やら考えている。

やがて「いいわ」と呟いた。

ほっと、ジンがラーメンで胸焼け気味の胸を撫(な)で下ろす。

「今夜中に、イズミの携帯にメールしとくわ。それで——」

ふるふるとチドリが首を振った。

「ラーメンは要らない」

「……？」ジンは目を瞬(まばた)かせた。

「なら〈ワック〉か？」

ワック。やたらと冒険的なメニューで有名な、ワクドナルドハンバーガーというフランチャイズ店の略称だ。

また、チドリが首を横に振る。

「ほなら、〈海牛（うみうし）〉か？　それとも……〈わかつ〉はテイクアウトしてへんよな、確か」
海牛は人気の牛丼店、わかつは評判のよい大衆食堂だ。ワックも海牛もわかつも、はがくれと同じテナントビルにある。
繰り返してチドリが首を振る。
「どれでもない……明日、神社でお祭りがあるらしいの」
「は？　祭やて？　それがどないしたっちゅーねん」
ジンにはさっぱりだ。食べ物の話をしていたんちゃうかと首をひねる。
「リンゴ飴。焼きそば。お好み焼き。わたがし。アメリカンドック。フランクフルト」
ぼそぼそとチドリが食べ物の名を幾つも挙げていく。
「……かき氷……は無理かもしれない。溶けるから」
一般的に、チドリが並べた食べ物は、全て祭の出店に並ぶものだ。
ようやくジンは、チドリが何を要求しているのか理解した。
「祭に行って、出店の食いモンを片っ端から買うてこいと？」
こくりとチドリが頷いた。
「そう。買ってきて、ジン」
「……己（おのれ）で行けばええやろ」
神社の祭に出向くなど、ジンには面倒でしかない。そもそも週末の繁華街の喧噪でさえ苦手に思うのに、確実に混雑するだろう神社の祭になんて行きたくはない。

それはどうやらチドリも同じようだった。

「嫌。お祭り、行ったことないからよく知らないけど混むんでしょう……人混み、嫌いだもの。だからジン。行ってきて」

ノーと言ったら手斧が飛んでくる。立っているのもおっくうな満腹の体で、かわしきれるかは、冗談抜きで怪しい。

ジンに選択肢はなかった。

「しゃあない。明日の晩やな？」

頷きもせずチドリが踵を返した。もう用はないとばかりに自室に帰っていく。

こりこりとジンは頭をかいた。

「……祭、か。考えてみたら、わしも行ったことないわ、一度も」

物心ついた時には、わしは不遇な子や、と自信を持って言えるような生き方をしていたジンだ。夏祭りみたいなイベントには、まったく縁がなかった。

知識として神社で行われる祭が、どのようなイベントかは知っている。

だが、初体験でチドリを満足させられる食べ物が買ってこられるか、自信はなかった。

少し考えて、ジンは携帯電話をズボンのポケットから取り出した。

闇ルートで仕入れた、いわゆるクローン携帯と呼ばれる不法端末だ。

手早くメールを打ち、すぐに送信した。

「たぶんまあ。これで何とかなるやろ」

祭の当日。出かける予定の時刻まで、まだかなりある。
ジンは床にあぐらをかいて膝にノートパソコンを置き、インターネットを使っていた。
「……やっぱり何の情報もないな」
連日、イズミの依頼を調査するために掲示板サイトなどをチェックしているのだが、役立ちそうな書き込みはなかった。
こういう場合、あまりしつこく話題を振っても逆効果だ。
ネットでの情報収集を、ジンは一度打ち切ることにした。
ノートパソコンを閉じようとして、画面上のアイコンが目についた。
デビルバスター・オンラインの起動アイコンである。
すっかり廃れたネットゲームだ。もう積極的に利用することはないだろう。
「……削除してまうか――その前に。最後にログインしておこか」
気まぐれで、ジンはゲームを起動させた。
前回ログインした時と同様に、画面上の街は無人だ。
「ちと歩いてみるか」
ジンは自分のキャラクターを操作した。
適当に街をうろつく。どこまで行っても無人の街は、かえってすがすがしい。
「何や貸し切りみたいやな」

思わずにやりとした時だった。
『関西ジンだ、おひさー♪』
画面外から赤い服の女キャラがやってきた。
Y子と名乗った、あの女だ。
「――ジンて、おい。正体ばれたか……まさかな」
ジンはぎくりとしつつ慎重に会話に応答する。
『ジンだけ片仮名にするんやない、気持ち悪い。関西人とちゃんと入力せーよ』
『名無しなんて変な名前にしてるほうが悪いでしょ』
とY子。名無しというのはジンのキャラクターの登録名だが、そのせいにされても困るというものだ。
『名無しと呼べばええやろ。勝手に関西ジンなんて呼ぶなや』
『いちいち細かいぞお、関西ジン。誤変換に突っ込むなんてセコイし。もう遊んでやらないぞ』
Y子の台詞（せりふ）によると、ジンはただの変換ミスらしい。つまり、正体がばれたわけではなかった。ジンは安堵（あんど）しつつ、気楽に応対する。
『遊んでくれと頼んだ覚え、あらへんぞ』
『でもログインしてるじゃない。私と会いたかったんじゃないの、このこの』
Y子のキャラクターが、画面の中でジンのキャラクターを肘（ひじ）でぐりぐりと突いた。

「ほんま厚かましい女やな」
ジンが苦笑していると、さらにY子はジンのキャラクターの横に回り込み、来た方向に押し始めた。
『ナイスタイミングだから、こっち来てよ。紹介するから』
『紹介？』
ジンはキーボードで会話を入力しつつキャラクターを操作した。Y子と並んで進む。
動きに合わせて街並みが流れ、前に男のキャラクターが現れた。
学生服っぽいブレザー、長めの前髪にヘッドフォン。
ズボンのポケットに両手を突っ込んで立っている。
このゲームは、キャラクターの姿を好きなようにカスタマイズできる。前の男の姿は、ゲームのデフォルトで選べるキャラクターにないタイプだが、別段驚くことはない。
『我が相棒、N島でーす。ほらN島、ご挨拶』
無言で男――N島が、ぺこりと頭を下げた。手はポケットに突っ込んだままだ。
「何や、無愛想な奴っちゃな」
ぼやきつつ、ジンは挨拶した。
『ども。関西人とY子に改名させられそうな名無しや』
またも無言でお辞儀でもされるかとジンは思ったが、N島が会話を入力してきた。
『僕はY子に、N島に改名させられた』

N島のキャラクターの頭上に、ぐるぐると渦巻きが表示される。困った時の表現だ。ジンは、N島もY子の強引さに振り回されているのだろうと思った。
くすりと笑いがこぼれる。
『私とN島だけの甘美な想い出をばらさないでよー』
ぽかぽかとY子がN島を叩こうとする——ひょいとN島が後に下がって避けた。
『逃げるな！』
『逃げる』
Y子とN島の追いかけっこが始まった。なかなかに仲が良い。Y子が相棒と呼ぶのも冗談の類ではなさそうだ。
『お楽しみ中、悪いんやけどな。ちょっと話聞かせてもらえんか』
ジンは二人に呼びかけた。
画面の中をぐるぐると動いていたY子とN島が、ジンのところに寄ってきた。
『Y子には、前に話したんやけど。二年前、巌戸台の港区っちゅーところで交通事故に見せかけた殺人事件が起きてな。その被害者が化けて出るらしいんやけど、何か知らへんか？』
『事故は聞いたけどお化けは聞いてないよーガクガクブルブル。それに巌戸台って地元だよーそれもこの前は聞いてないよーガクブル』
ぶるぶるとY子のキャラクターが震える。冗談なのか本気で怖がっているのか、判断

はつかないが、特に知っていることはなさそうだ。
『N島君とやら。何か知らへんか？』
『知らない』
N島は興味すらないようだった。長話をしても得られる物は何もないだろう。
ジンはまだ震えているY子に話しかけた。
『幽霊っつーか化け物出るのはホンマらしいから、ほんまに地元なら気ぃつけや。特に午前零時を過ぎてからの夜歩きなんかするんやないで』
『しないしない、リアルに夜歩きなんて。夜歩きするならネトゲにこもるし』
『N島君も気ぃつけや。どこに住んどるか知らんけど』
『大丈夫』
あくまで手をポケットに突っ込んだまま突っ立っているN島のキャラクター。プレーヤーはモニタの向こうで動揺しているかもしれないが、ゲームでは伝わってこない。
『どうしようかなあ、今日、夏祭りがあるんだけど。引きこもってようかな』
Y子が画面をうろうろする。
『どうしたらいいかな、N島』
『どうでもいい』
N島とY子の雑談はまだまだ続きそうだった。これ以上つき合っても意味がないだろうと、ジンは、

『ほな、わしは落ちるし。また縁があったらな』

と挨拶して、相手の挨拶も待たずにゲームを終了させた。

「夏祭りを知っとった。Y子っちゅー女、ほんまにこの近所に住んでるんやな」

——まさか会ったりせえへんやろな。

ネットで二度会話しただけの、素性(すじょう)を知らない相手だ。会っても互いに気づくことはない。考えるだけ時間の無駄だ。

ジンはぱたんとノートパソコンを閉じると傍らに放りだし、横になった。

夜まではまだまだ時間がある。一眠りしておこうとジンは目を閉じた。

夜になり、人出のピークを過ぎた頃を見計らって、ジンは神社にやってきた。

わたがしの袋や水風船ヨーヨーなど、祭特有の小物を持った人たちとすれ違う。浴衣(ゆかた)姿も多い。すれ違う大半が、祭帰りのようだ。

——何や、浮かれよって。

そう思うも、自分もどことなく足取りが軽い。

「わしも修行が足らんなぁ」

自戒し、呟いたところでジンは慌ててそばの電信柱に身を隠した。

境内(けいだい)に通じる石段を下りてきた人影に、見覚えがある。

敵対ペルソナ使いのチーム〈S.E.E.S.〉のメンバーに違いない。

長い前髪で片方の目を隠した男が、浴衣姿の女を連れている。
女の顔はジンの位置からは見えないが、雰囲気からして、どうやらデートらしい。
――早よ、消えろ。
ジンは、ここで待ち合わせをしている。だから余計な騒動は起こしたくない。
いらいらと〈S.E.E.S.〉の男がいなくなるのをジンは待った。
男は浴衣姿の女と一緒に四つ角を曲がり、姿が見えなくなった。
ほっと軽く安堵したジンは、背後から、
「お。もう来てたのか」
と声をかけられた。
ジンは振り向いた。イズミが、女の子――紗耶(さや)の手を引いて歩いてくる。
昨日、ジンはメールで祭のガイドをイズミに頼んだのだった。
イズミも祭には詳しくないらしいが、紗耶が行きたがっているからちょうどいいと、子供を連れて歩くには少し遅い時間にも拘わらず、出てきてくれたのである。
朝顔柄の浴衣を着ている紗耶が、笑顔でジンを指さした。
「あ、デコのお兄ちゃんだっ」
「誰がデコやねん、誰が――ほな、行こか」
挨拶もそこそこに、先を急ぐ。紗耶の手を引くイズミと並んで石段を上る。
「悪い、イズミ。手間かけてもうて」

「全然。この子も来たがってたしな、今日も真希さんは夜勤だし、俺はバイト休みだし、ちょうどよかった……俺も祭なんてほとんど来たことないしさ」
　イズミの言葉に聞き覚えのない人の名があったと気付き、ジンは訊ねた。
「真希さんて。それがこの子の母親か？」
「ああ。看護師なんでな、生活が不規則なんだ。だから俺がこの子を見てやらないと」
　看護師不足はジンも知っている。仕事のきつさに比べて給料が安く、辞めてしまう人が多い。人が不足するから勤務時間も長くなる。夜勤も増える。その結果、また辞める人が増えていく。看護師は、そんな悪循環が途切れない職種だ。
　看護師。なるほどな、とジンは思った。
「その人に、制御剤を調達してもらっとるわけか。そりゃ頭、あがらんわな」
　人工ペルソナ使いの服用している制御剤は、成分さえわかれば調達できる代物だ。身内が医療関係者なら、危ない橋——つまりは非合法な手段さえためらわなければ、制御剤は手に入る。
　イズミが、むっとした顔をした。
「……別に制御剤が欲しくて、彼女のそばにいるわけじゃない」
「わかっとるって。で、どこの病院で働いとるんや？」
「桐条のやってる、あのでかい病院だ」
　桐条グループ。日本でも有数の企業団体だ。様々な業種に手を広げており、この付近

でもっとも大きな病院が桐条グループ傘下だとジンも知っている。
「あんな大病院でも看護師は人手不足か。大変なんやな」
社交辞令同然の言葉だった。だが、イズミは真面目な顔で頷いてみせた。
「必死だよ、生きていくのに——せっかくの祭なんだ、辛気くさい話はやめにしよう」
石段を上り切ったところで、イズミが紗耶を抱え上げた。
「ほーら、見ろ。色々あるぞ!」
普段の寂れっぷりが嘘のように、小さな神社の境内は、並んだ出店で華やいでいる。
屋台の造りは安っぽく、電飾も色づけされた電球だったりするのだが、それでも幼児には夢の世界に見えるらしい。
わぁわぁわぁと紗耶が騒ぐ。
「デコのお兄ちゃん、ヨーヨー取って!」
「何でわしが」ジンは苦笑を禁じ得なかったが、取って取ってと紗耶はしつこい。
しゃあないなとジンは折れ、ヨーヨー釣りの屋台に近寄った。
色とりどりの水風船のヨーヨーが浮かべられた水槽の横の立て看板に、
『ヨーヨー釣り一回五〇円 一個二〇〇円』
とある。釣りで遊ぶなら五〇円、ヨーヨーを買うだけなら二〇〇円ということだ。
買うなら話は簡単だ。が、挑まずに負けた気がして、ジンは面白くない。
ジンは上着のポケットから五〇円硬貨を一つ取り出して、店番の男に放る。

「おっちゃん。一回や」
「はいよ」
短い竿を渡された。竿にくくりつけられている糸は、先端の部分だけ紙のこよりになっていて、そのこよりに針金製のフックがついている。
そのフックで、水槽にぷかぷか浮いている水風船のヨーヨーのゴムひもを引っかけ、釣り上げる。手早く確実に作業しないと、紙のこよりが湿って千切れてしまう。
ジンは初めて手にした竿を見て、これなら簡単にヨーヨーが釣れそうだと考えた。
紗耶が、期待を込めた眼差しをジンに向ける。
「よう見とき。こないなモン、一発や」
ジンは、さっと手早く竿を操った。狙ったポイントにフックが着水する。
——完璧や。
ジンは手首を素早く返して竿を上げた。竿にヨーヨーのかかった手応えを感じたが、それは一瞬のことで、こよりが呆気(あっけ)なく切れてしまった。
あー、と紗耶が残念そうに声を上げる。
「……む。ちょっと力んでしもたか。おっちゃん、もう一回……いや、二回や」
ジンは一〇〇円玉と使えなくなった竿を店番に渡し、新しい竿を二つ受け取った。
さっそく釣りに挑む。先ほどとは違い、慎重に、ゆっくりとフックにヨーヨーのゴムひもを掛け、引き上げようとしたが、失敗した。

「……あ。切れよった。ちょっと水にこよりをつけすぎたか」

ぽいっと用済みの竿を店番に放って、二度の失敗の経験を生かして釣りに挑む。

「焦(あせ)らず急いで正確に……かかった。ほーれ」

今度はヨーヨーが釣り上がった。「やった！」と紗耶が歓声を上げる。

しかし。手元に寄せる前に、ぷつりとこよりが千切れてヨーヨーが水槽に落下した。

「ぬわーっ！　あとちょっとやったのに!!」

悔しがるジンに、イズミが苦笑する。

「ジン、買ったほうが早いって。金なら俺が出すし」

「イズミは黙っとけ！　これはわしと店のタイマンや！　おっちゃん、また一回な!!」

ジンは再び一〇〇円玉を店番に放った。にやりと店番が太い笑みを見せた。

「兄ちゃん、男だねぇ」

「当たり前や。わしは逃げも隠れもせん、堂々と釣ったるわ！」

紗耶が喜んで拍手する。ジンは親指を立てて見せた——

紗耶の期待に応えるのに、ジンはヨーヨー四個が買えるだけの小銭を失った。

「おまえさ。見た目はクール系なのに、根は熱いっつーか……バカだよな」

「やかましいわ、ボケ」

ヨーヨー釣りの後。今度は金魚すくいに挑み、またもジンは惨敗した。

小さな金魚一匹取るのに、相当苦労した。
五回挑戦したところで、金魚すくいの店番が一匹くれてやるから終わりにしておけと言ってくれたが、負けを認めるジンではなかった。
結局。金魚すくい用のモナカを一〇枚、ジンは使う羽目(はめ)になったのだった。
ジンがむっつりとする一方で、紗耶はご機嫌である。
「パパ、金魚さん可愛いよ」
紗耶は片手にヨーヨーを持ち、もう片方の手で、赤い金魚の入ったビニール袋を顔の前でぷらぷらさせている。
「金魚さんが目を回すからやめてやろうな、それ」
「うん」イズミに注意され、紗耶はビニール袋を振るのをやめた。
「ジン」とイズミ。「おまえの買い物はいいのか?」
ヨーヨー釣りと金魚すくいで、屋台でのやり取りは把握した。ジンはイズミに案内してもらわなくても買い物は余裕だと考えた。
「そこいらの食いモン、片っ端から買うてくる。あっちのベンチにでも行っといてくれるか?」
ジンは、出店の列から離れた境内の端にある、ジャングルジム前のベンチを顎で示した。イズミが頷く。
「わかった。ほら、紗耶。あっち行って休もうか」

「あのお面、欲しいっ」
「買ってやるからさ、行こう」
紗耶を促して立ち去るイズミの背を見送って、ジンは焼きそばの屋台に向かった。
人出の盛りは過ぎた時間とはいえ、それなりに混雑している。
通りすがりの女に、ジンは肩をぶつけた。
その拍子に、女が手に持っていた物を落としてしまった。
ぺちゃっと地面を汚したのは、ジンが向かおうとしていた屋台の焼きそばだった。
女が、あぁぁ、とどこか切なげに声を上げた。
「……晩ご飯が……」
女の歳は二〇代後半だろうか。美人ではあるが、日々にすり切れてしまっているような、どこか疲れた雰囲気があった。
「あ、すまん――弁償させてもらいます。ちょっと待っとってください」
ジンは慌てて屋台に行き、チドリの土産の分以外に、一人前を包んでもらって女のところに戻った。
「ほんま、すいませんでした」
「ぼんやりしていた私が悪かったのに」
と女。先ほど見せた疲れた気配はなく、すれた口調で続ける。
「教え子と同じくらいの歳の君に迷惑かけるなんてダメねぇ」

教え子。女は教育関係者のようだった。だがそんなこと、ジンは興味がない。
「いや、わしもよく見てなかったんで。ほな失礼します」
ジンは足早にその場を立ち去り、別の屋台に向かった。
——何や寂しい感じの女やったな。
女のすれた口調も、ジンには強がりに見えた。
「ま、わしには関係ないこっちゃ」

おおよそ一五分後。ジンはどっさりと買い込んだ荷物を抱えて、イズミと紗耶のいるベンチに来た。
イズミに寄りかかって、紗耶が寝息を立てている。
紗耶はすっかり眠り込みながら、片方の手にヨーヨーのゴムを、もう片方の手に金魚の入った袋のヒモを握りしめている。さらに、フェザーマンの何とかという、ジンのよく知らない変身ヒーローのお面を斜めに被っている。祭のフル装備状態だ。
「寝てもうたか。待たせ過ぎたか？」
「いや、待つほど待ってない。気にするな。それよりも、こっちこそ謝らないとな。悪かったな、ジン。何かずいぶんと面倒かけた——この子がさ」
「大したことちゃうて、あれくらい」
言いながら、ジンは紗耶とは反対側に座ると足下に荷物を置いた。

「おまえ。毎日がこんなんか」
「だいたいな。子供と暮らすって、楽じゃないぞ。ほとんど毎日が戦争だ」
言いつつイズミの顔は笑っている。
その笑顔がジンにはずいぶん遠くに見えた。
「――変わったな、ほんま」
イズミの笑顔が消えた。真顔で、イズミがジンから視線を外す。
「生きていくということは、変わっていくということだ――生き続けるためなら、俺はどんなことだってする」
イズミの横顔は、決意を感じさせた。危うい顔やとジンは思う。
「そないに生にしがみついてると、いずれ足下をすくわれるで。しょせん、制御剤なしには生きられないわしらの先は、見えとるんや」
それが、人工ペルソナ使いの真実だ。
近く訪れるだろう死は、避けようのない結末なのである。
イズミにも、それはよくわかっているはずだった――だが。
「冗談じゃない。そう簡単に死ねるものか。諦められるものか――真希さんと紗耶がいるんだ、俺一人勝手に死ぬわけにはいかないんだ」
生への激しい執着をイズミが見せた。
ますます危ういとジンは感じた。

「危険やで、おまえ。目が逝っとる。何をどうしようと先は変わらへん……わしらは、力を得た代償に未来を失った。それはとっくの昔に納得したことやろ」

「ああ。一度は納得したさ」

いらついた口調でイズミが続ける。

「あの施設に拾われなければ、俺はストリートチルドレンのままだっただろう。それに、ペルソナという力を得たことで、結果的には施設からも逃げ出せた――今の自由がある。そんなの、俺だってわかってる。わかってるさ。それでもな」

まだ死にたくなんてないんだよ。

かすれた声でイズミはそうこぼした。

――その願いだけはな。叶わないんや、絶対に。

言いそうになったその言葉を、ジンは胸の底に沈めた。

言葉のないジンをよそに、イズミが話し続ける。

「もし、だ――力を失うことで死なずに済むとしたら、俺はそれだっていい。こんな力、喜んで手放すよ」

「今。何て言った？」

聞き捨てならないことをイズミが言った。ジンの声に怒気がこもる。

「力なんぞいらん。そう聞こえたんやが」

ようやくイズミがジンと視線を交えた。

「ああ、言ったさ。それがどうした」
挑発的な口調のイズミの襟首を、思わずジンはつかんだ。
「わしらにとって唯一信じられるのはペルソナの力や。それを否定するゆうなら、なんぼイズミでも許さへん！」
怒鳴り返されるだろうというジンの予測は外れた。
イズミの向こうで、眠っていた紗耶が目を覚ましたからだ。
「……パパ、うるさいぉ」
よ、とさえ言えないほど寝惚(ねぼ)けている紗耶の頭を、イズミが撫でる。
「ごめんな。じゃ、静かにするから」
「う……ん……」
再び、すぅすぅと紗耶が寝息を立て始めた。
毒気を抜かれたジンは、荷物を持ってベンチから腰を上げた。
ペルソナなんて要らない。
そんなことを言う奴と、これ以上話などしたくなかった。
「わし、帰るわ」
イズミは挨拶を返さない。
一つ舌打ちして、ジンはこの場から立ち去った。

ジンはアジトに戻ってきた。廃ビルの非常階段下に、チドリがいた。
ジンを待っていたらしいチドリに、ジンはビニール袋の塊(かたまり)を押しつけた。
「片っ端から買うてきた。これで文句ないやろ」
ぶっきらぼうに言い放ち、チドリの横をすり抜けて非常階段に向かう。
「……何を怒っているの」とチドリ。
「怒ってなんかおらん」
「……嘘」
「嘘ちゃうわ。ほっとけ」
「……イズミと喧嘩したのね」
図星を突かれ、ジンは足を止めて顔だけで振り返った。
「喧嘩にさえなっとらんわ、あないな阿呆(あほ)とはな!」
じ、とチドリが無言でジンを見つめる。
心の奥底まで覗(のぞ)き込まれるようなチドリの眼差しに耐えきれず、ジンは早足で階段を上った。
乱暴に歩くせいで、さびかけた鉄板の階段が、がんがんと耳障りな音を立てる。
「ああもうムカツク階段やな! くそったれが!」
階段の途中で、手すりをがつんとつま先で蹴飛ばした。
当たり所が悪かったのか、酷く足の指先が痛んだ。

夕日で赤く染まった歩道を、自分の長い影を追いかけるように、天田乾は歩いていた。

片手には犬のリード。先日、寮で世話をすることになった犬を散歩させている。

小学生らしからぬ難しい顔をし、もう片方の手で、フリップタイプの携帯電話を閉じたり開いたりともてあそぶ。

天田は悩んでいた。

——イズミさん。あれから何も言ってこないけど。

——まさか。復讐できちゃったりとか、してないよね。

母の仇を自分で取りたい天田には、それは困るどころの話じゃない。あってはならないことだ。

——でも。絶対にインチキなんだよな、あんな復讐代行の話なんて。

天田はそう信じている。だから「依頼、取り消してください」とイズミに頼むのは、あるはずのない復讐代行の存在を認めてしまうような気がして、抵抗があった。

イズミの電話番号は知っている。携帯電話で一言、依頼取り消しを伝えれば、イズミなら間違いなく天田の思う通りにしてくれるはず。

今回の依頼だって、天田のことを思いやってのことだからだ。

天田が嫌がることを、天田の母に恩義を感じているイズミがするはずがない。

——好意だから……断るのも気が引けるんだ……。

断りの電話をする踏ん切りがつかなくて、ひたすら携帯電話をもてあそぶ。
しかし万一、復讐代行が実際に存在し、依頼を達成してしまったら――
悔やんでも、悔やみきれない。
「おまえはいいよな、コロマル。悩みなさそうで」
前を軽快に歩く犬に、天田は愚痴った。
犬――コロマルは、ちらっと天田を見ただけで、知らん顔で歩いていく。
はあ、とため息をついた天田は、前からやってくる真田に気がついた。
真田は制服姿で、片方の肩に小振りのスポーツバッグを担いでいる。
月光館学園高等部の夏期講習は先週で終わり、真田は、今日は朝からボクシング部の練習に行った。今はその帰り道ということだ。
天田は立ち止まった。少し遅れて真田も立ち止まる。コロマルが真田を見上げて尻尾を振った。
真田は腰をかがめてコロマルの頭を撫でると、天田の顔を覗き込んだ。
「どうした、天田。浮かない顔をして」
憂鬱な気分が顔に出ているようだった。天田はつい苦笑してしまう。
「実は、ちょっと悩んでて」
天田としては、イズミの問題は大事もいいところなのだが、それは真田には関係ないことだ。母の仇討ちについて話すわけにもいかず、言葉を濁す。

「でも、気にしないでください。ほんと、大したことじゃありませんから」
「どんなことでもいいから話してみろ。大したアドバイスはできないかもしれんが」
真田が身を起こしつつ、言った。その気持ちが天田には嬉しい。
——話せてしまったら、楽なんだろうけど。
そうは思っても、言えないことは言えない。事実を可能な限り隠して相談しようと、天田は苦笑したまま、慎重に言葉を選んで口を開き直す。
「……ええとですね。僕は自分で成し遂げたいことがあるんですけれど——それを、代わりにやってくれるって人が現れたんですよ」
「ふむ。それで？」
「僕は、そのことを自分で成し遂げたいんです、絶対に。でも、その人は好意で、僕の代わりにやってくれるって言ってるんです。だから、断るのも心苦しくて。それで、ちょっと悩んじゃって」
——これで意味が伝わったかな？ 何か意味不明なこと、言った気がするけど。
天田の心配をよそに、真田が「何だ、そんなことか」と平然と言った。
「……そんなことって。僕にとっては、大事なことなんですよ」
「大事なんだろ？ なら、自分自身で成し遂げる道を選べばいい。相手も好意で言っているなら、きちんと自分でやると伝えたら、お節介もやめるだろ」
真田は自信たっぷりの顔をしていた。その表情に、シンプルな人だなあと天田は思う。

もちろん、言葉には出さないが。
真田のアドバイスは単純そのものだったが、天田の迷いを払うには充分だった。
――そうだよ。僕のことなんだから、僕がやるべきなんだ。
決意を新たにしたが、断りの連絡をイズミにするかどうかは、また別問題だ。やはり、言い出しにくいことに変わりはない。
だが、できるだけ早めに断ろうという意志は固まった。
それでずいぶん、天田の気持ちは楽になった。
「そうですね。ありがとうございました」
一礼して、顔を上げる。
「その人には、そう話をしてみます。じゃあ僕、コロマルを散歩させて来ますから」
「ああ。俺も寮に帰ったらすぐにロードワークに出るから、神社の境内で待ち合わせするか。一緒に晩飯でも食おう」
「……また、牛丼ですか」と、天田は呆れ顔でそう訊ねた。
「ああ、おごってやる。じゃ、後でな」
軽く手を振って、真田が立ち去った。その背を横目で見送り、天田はコロマルと一緒に再び歩き出した。
しばらく行ったところで、不意にコロマルがぴたりと足を止めた。ううう、と喉の奥でわずかに唸る。

横手の細い路地から、子供の手を引いて姿を見せた男に、天田は目を瞬かせた。

「……こんにちは、イズミさん」

イズミが天田に気づいた。

「やあ、乾君。犬の散歩かい？」

「わんわんだーっ」

イズミが手をつないでいる紗耶が、満面の笑みで嬉しそうに声を上げた。

「あ、こらっ」イズミの制止を無視して、たっと紗耶がコロマルに駆け寄った。

「お手お手お手お手お手！」

差し出された小さな手を、ふんふんとコロマルが嗅(か)ぐ。ややあって、ぺろりと指先をなめた。

「やー、なめたー」

とても嬉しそうに紗耶がはしゃぐ。しょうがない紗耶だなあと呟きながら、イズミが一歩近づいた。

途端、コロマルの鼻筋に皺(しわ)が寄った。前に子供がいることを気にしてなのか、吠(ほ)えたり唸ったりはしない。だが、露骨(ろこつ)にイズミを警戒している。

イズミは苦笑して立ち止まった。

「……俺、やたらと犬に嫌われるんだよ。何でだろうな」

「さあ。でもいますよね、そういう人」

嫌なタイミングで出会ったなと思いつつ、天田は適当に相づちを打った。

――どうしよう。依頼の話、ここでしちゃおうか。

悩む天田の傍らで、イズミを注意しつつコロマルが紗耶の相手をする。

イズミもまた、何やら気まずそうな顔をしている。

「あのな」「あの」と同じタイミングで二人は口を開き直した。

すぐに天田は「……何ですか」と先に訊ね返した。

恐縮した素振りで、イズミが改めて話し始める。

「例の、復讐うんぬんの話なんだが……その。やってくれる奴とちょっともめてな……もしかしたら、依頼キャンセルされちまうかもしれない」

「そんなことですか」

願ってもない事態に、つい天田はそう返事をしてしまった。イズミが怪訝な顔をする。

「そんなことって。大事なことだろう……もしかして、怒ったかい？」

応対のまずさに内心焦りながら、天田は首を振った。

「いえ、怒るなんてそんなこと。実は……依頼、取り消してもらおうかなと思っていたんです」

復讐は自分の手で成し遂げたい。そう言ったら止められるに決まっているから、別の言い訳を天田は考えた。

「…………やっぱり、嫌じゃないですか。それって間接的にですけど、イズミさん

に手を汚させることになっちゃいますし」

「いや。そんなこと気にすることは――」

「気にしますよ。このイズミさんのお子さんにも、悪いです」

天田はコロマルとじゃれている紗耶を見た。ここでようやく気がついた。

「イズミさんの娘さんにしては、その。大きいですね」

「ああ。世話になっている女性の娘だよ……そんなことより、依頼――」

イズミが話題を元に戻そうとした。天田は首を横に振った。

「ですからその依頼、取り消してください。お願いしましたから」

イズミが困惑を顔に出した――唐突に片手で口を覆い、背を丸めた。

「――ごふっ、げふっ」

激しく咳き込み始める。口を覆う指の隙間から、赤黒い液体が漏れた。血だ。

「パパ、どうかしちゃったっ？」

駆け寄ろうとした紗耶を、イズミは咳き込みながらも空いている手で制した。

指の間からぼたぼたと路面に血がしたたる。

天田はただ、唖然としていた。

数十秒ほどして、イズミの咳が止まった。汚れていない手でイズミはジャージのズボンのポケットからハンドタオルを取り出し、口元と手をぬぐった。さらにウエットティッシュを出して、残った血を綺麗に拭き取る。

その手つきが、妙に慣れているように天田には思えた。

「すまん、驚かせたかな。何、大したことじゃない。ちょっとだけ胃が悪くてさ」

——そんなに血を吐いて、ちょっとなもんか。

立ちすくむ天田のそばから紗耶がイズミに駆け出す。

ひっしと紗耶はイズミの足にしがみついた。

「パパ、大丈夫？　もう痛くない？」

「ああ、痛くない。帰ろうか、紗耶」

イズミは紗耶を抱き上げて、去り際に天田を振り返った。

「依頼のことだけど——少し考えさせてくれ。じゃあ、また」

天田はぺこりとお辞儀をして、イズミを見送った。

夕日の中で、幼子に優しげな目を向けている。その幸せそうな顔は、吐血したことなど嘘のように思えた。

これが、天田が見た最後のイズミの姿だった。

V

受け入れがたい運命



〈ストレガ〉のアジトは、かつてない危機に見舞われている。
「どうにかできないのですか、ジン」
「……あかん。もうどないもならん」
悲痛な顔のタカヤに、ジンは首を横に振って見せた。
奇跡でも起きない限り、事態はすでに己の手に負える状態ではない。
「どうにかしてよ」
外出着のゴスロリ服姿のチドリが、怒ったように言った。
「……そう言われてもな。死んだモンは死んだんや。諦めぃ」
「認めないわ」
ぎゅっとチドリが両手をきつく握りしめた。
「――――シャワーが浴びられないなんて」
「そうはゆうてもな。このポンコツ、もううんともすんとも言わへんのや」
ジンは、シャワー室の壁に据え付けられている給湯器をこんこんと叩いた。
先ほどまでカバーを開いて中の機械をあれこれといじり、修理を試みていたが、どこか肝心な部品が致命的なトラブルを起こしたようで、まったく動かない。
季節は夏。今日は特に暑かった。廃ビルのくたびれたエアコンは、ないよりマシなだけで、建物の中にいてもずいぶんと汗をかいた。
正直、ジンだって早くシャワーを浴びたいと思っている。

「何とかして。今日は外でスケッチしてきたから、いつもより汗かいたの」
「……チドリ。今日は諦めて水シャワーで我慢せい。今夜の〈影時間(かげじかん)〉に、どっかから電気給湯器を盗んでくるし」
「水シャワーなんて嫌」
「嫌や言ってもな、湯は出ないんや。ちぃっとも熱くならへんねん」
がんがんとジンは乱暴に給湯器を叩いた。
「わかった」
むすっとチドリが呟(つぶや)いた。
「わかってくれたか」
ジンは安堵(あんど)した。次の瞬間、目を丸くする。
おもむろにチドリがスカートの中から〈召喚器(しょうかんき)〉を取り出した。
その銃口を、チドリがこめかみに押しつける。
「おまえ、何する気なんやっ？」
「簡単なこと。〈メーディア〉の火炎でその給湯器をあぶって、お湯を作るの」
チドリの〈ペルソナ〉、メーディアは感覚能力に秀でているが、火炎も扱える。
「メーディアの火炎なら、お湯なんて一瞬でわく」
今にもチドリはトリガーを引きそうだ。ジンは焦(あせ)った。
「そないなことしても湯なんぞ出るか、阿呆(あほ)！」

「……阿呆じゃない。どいて、ジン。でなきゃ一緒に焼くわ」
チドリがトリガーに掛けた指に力を込めた。ますますジンは焦った。
「お、落ち着け。こないな狭い場所でメーディアに炎使わせたら、えらいことになる」
「私は平気だもの。火炎なら吸収できる」
平然とチドリは言った。事実だ。メーディアの能力により、チドリには火全般の攻撃が効かない。それどころか、火炎を吸収して己の力に変えてしまう。
「火炎なら、わしかて平気や。〈モロス〉のおかげでな」
ジンにも火炎の攻撃は効かない。吸収はできないが、反射する。もし火炎でジンに攻撃をしかける奴がいたら、そいつは跳ね返ってきた己の炎で焼かれるだけだ。
「私だけが焼死しますね、それでは——ちょっと困りましたね」
ふむ、と真顔でタカヤが考え込む。
確かに、火炎でダメージを受けるのはタカヤのみだ。タカヤのペルソナ、〈ヒュプノス〉は、光や闇属性の術には強いが、他の属性に耐性がないのである。
「ちょっと困るどころの話ちゃうで」
「なら、何とかしてください」
タカヤの言葉は、ジンにとっては絶対に近い。可能な限り従わねばならない。
「何とか言われてもな——チドリ。銭湯に行くっちゅーわけには行かんのか」
ジンの提案をチドリは即座に却下した。

「絶対に嫌。烙印(らくいん)、見られたくないもの」

烙印。ペルソナ制御の失敗で体に刻まれる醜い痣(あざ)のことだ。

制御剤なしではペルソナを押さえ込めない人工ペルソナ使いは、誰もが幾度か、ペルソナの制御を失敗する。タカヤの両腕の入れ墨は、そうして刻まれた烙印の痣をデザインとして生かすように彫り込まれたものである。

チドリ同様、ジンも体に烙印を持つ者だ。チドリの気持ちは理解できる。

「それなら、影時間にこっそり銭湯に行ってくるとええ。零時過ぎなら、まだ湯船に湯が残ってるやろ」

「それも嫌」再びチドリが却下した。

「少しでも早く、汗を流したいの」

頑(がん)としてチドリは譲りそうもない。

困り果てたジンの頭に、ぽんっと一つの案が浮かんだ。

だが、その案のせいでますますジンは困ってしまった。

黙り込み「むー」と唸(うな)るジンにタカヤが訊(たず)ねる。

「……どうしたというのです」

「風呂な。今日だけなら、何とかする手がないわけでもないんやが……」

ジンの思いついた案は、おそらく実現できる。

ただし、ジンは気分的に、積極的にその案を実行したくなかった。

「何とかできるなら、そうしてください」
「早く」
タカヤとチドリに急かされ、ジンは困惑顔でズボンのポケットから携帯電話を取り出した。
「……ちょっと待ってな」
覚えている番号に電話を掛ける。相手はすぐに出た。
『もしもし』イズミの声だ。
「わしや」
『…………何だ、ジンか。どうかしたのか？』
イズミの返事が一瞬遅れた。ジンからの電話に、何か思うところがあるようだ。
ジンも気まずい。夏祭りの晩に喧嘩同然で別れて以来、イズミとはまったく連絡を取り合っていなかったのだから。
変な緊迫感を伴う沈黙が続く――黙り込んでいても意味がない。ジンは意を決した。
「――あのな。風呂、貸してもらえへんか。アジトの給湯器、いかれてしもたんや」
『風呂か。これからか？』
それほど夜は更けていない。他人の家を訪れるのには、どうにかまだ失礼にならない時間だ。
「せや。チドリが早いとこ風呂入りたいゆうとるし」

ちらりとジンはチドリを見た。

「……私のせいにしてる」

ぼそりと不機嫌そうにチドリがこぼしたので、慌てて目をそらす。

「ど、どうやろ。頼めるか——あかんか?」

『いや、大丈夫だ。真希(まき)さん、今夜は夜勤で朝にならないと帰らないし、俺、今日はバイトないからさ。風呂、すぐに沸かしておく』

「ほんまか、助かる!」

電話しながらジンはタカヤたちに親指を立てて見せた。

おお、とタカヤが小さく感嘆し、チドリの口元がかすかに緩(ゆる)んだ。

「ほな、これから——」

ジンの言葉をイズミが遮(さえぎ)った。

『けどな、タカヤは……その。紗耶(さや)が怖がると思うし、目立ち過ぎるからなぁ。近所の目もあるし、遠慮してもらえると正直助かる』

「——な」

ちらりとタカヤを見やって、ジンは考えた。

常に上半身裸。長く白い髪。いついかなる時も、ベルトに巨大な銃。

下手(へた)に外を出歩くと一発で誰かが警察に通報してもおかしくない格好だが、ジンは口出しできない。タカヤが己の意志でしているファッションなのだから。

ジンは苦渋の選択をした。
「――――やむを得ん。そうするわ」
『わかってもらえたか。すまんな、無理言って。住所はメールしておく』
「無理ゆうてるんはこっちや。ほな、あとでな」
ジンは通話を切った。
「タカヤ。悪いが留守番してもらえへんか。イズミんところの娘がな、おまえのことを怖がりそうやからって」
真っ直ぐとタカヤがジンを見据えた。ややあって、
「――仕方がありませんね。私は子供に嫌われようがいっこうに構いませんが、それでチドリまで入浴できなくなるというのでしたら、甘んじて留守番しましょう」
ほっとジンは息をついた。「じゃあチドリ――」
すでにチドリの姿はなかった。廊下の向こうから、
「早く案内して、ジン」
とチドリの声が聞こえてきた。
すぐにジンの携帯電話にメールが着信した。確認する。
予想通りイズミからで、メールで指示された住所は思いの外、近かった。
「何やら妙な予感がします。用心しなさい」とタカヤ。
「妙な予感て――影時間でもないし、別に用心なんていらんやろ」

軽い口調でそう言って、ジンは急いでシャワー室を出た。
古くさい二階建てのアパートの二階の角部屋。それが、イズミの暮らしている部屋だ。
二階に続く階段の前で、ジンが立ち止まった。
「どうしたの」
入浴道具一式を収めた手提げバッグを持ったチドリも、足を止めた。
「チドリ、独りで行ってこい。わしはそこらで待ってるし」
「……困る。イズミ、苦手だもの」
チドリはイズミが嫌いなわけではない。ただ、あの性格になじめないだけだ。
ちゃらちゃらしているとまでは言わないが、もう少し落ち着いたほうがいいと思う。
——あんな人でも慣れたら楽しいのかしら。
考えてみたが、慣れる前に疲れてしまいそうな気がする。
「困る言われてもな——ちょいと、イズミとは顔を合わしにくいんや」
「どうして」
「どうして言われてても……」ジンが言い淀む。
チドリは無言で説明を待った。プレッシャーに負けたか、ジンが口を開き直す。
「この前。おまえに指摘された通り、ちょいとイズミと喧嘩してな」
「……殴り合ったの？」

「あー。いっそ殴り合えばすっきりしたかもなあ」
ジンが明後日の方向を見て頭をかいた。
「とにかく。今は顔を合わせたくないんや」
説得するには時間がかかりそう。チドリはそう思った。そんなことに無駄な時間を費やすなら、お風呂に入ってしまいたい。
チドリは階段に足を向けた。
「行ってくる」
「ゆっくりな」
ジンの声に送られて上る階段は、アジトの廃ビルの非常階段と似た傷み具合だった。一歩進むたび、きしきしと踏み板の鉄板が鳴く。
イズミの部屋は、階段からもっとも離れた奥にある。
ひび割れのあるモルタル塗りの廊下を進み、部屋の前にチドリはやってきた。
呼び鈴を探す。ドアの周囲のどこにも、そのような物は見あたらない。
暗い蛍光灯に浮かぶ薄汚れた壁に、呼び鈴のボタンがついていたような跡がある。どうやら、壊れて撤去されたようだ。
呆然(ぼうぜん)とチドリは立ち尽くした。ノックをしたらいいのだろうかと考えたが、ドアから遠い場所にイズミがいたら、よほど強く叩かない限り、聞こえない気がする。
——どうしたらいいのかしら。

悩むチドリの前で、がちゃりと鍵の開く音がした。

慌ててチドリが半身になると、タイミングを見計らったかのようにドアが開いた。

携帯電話を耳に当てたイズミが顔を出した。

「お、チドリ。悪い、待たせたか。入ってくれ――ジン、すまんかったな。今度、呼び鈴つけておく」

イズミが携帯電話の通話を終えた。チドリが突っ立って困っているのを下から見たジンが、電話でドアを開けるよう連絡したらしい。

「お邪魔するわ」

狭い玄関にチドリは入った。玄関を入ってすぐの場所に小さな台所がある。台所の隣はすぐ部屋で、磨りガラスのはまった半開きの引き戸の向こうに畳が見えた。

部屋とは逆の方向に、トイレと思しきドアがある。その横。長いカーテンで区切られているのが、脱衣所のようだ。

――外観通りに古いアパートね。

古くさかろうが、入浴さえできるのならチドリはそれでいい。

イズミがドアを閉める間に、チドリはするっと手際よく靴を脱ぎ、部屋に上がった。

そこに、引き戸の奥から小さな影が飛び出してきた。

「お姫さまーっ」

ばふんとチドリのドレスの腰にしがみついてきた子供に、チドリは見覚えがあった。

——確かこの子。紗耶って言った。

「違うと言ったわ」

まだ姫なんて呼ぶのと少しチドリは辟易(へきえき)した。一方、紗耶は笑顔満開だった。

「違わないってパパ言った！」

「え」チドリはイズミを見やった。

すまんといきなり、イズミが頭を下げた。

「モールで会った後、紗耶、何度言っても姫じゃないってどうにも納得してくれなくてな——その。つい」

「ついじゃないわ」

これだからイズミは好きになれないとチドリは思う。だが、ここで改めて紗耶に自分が姫などではないことを言い聞かせるような気力もない。

早く汗を流して帰ろう。それがいいとチドリは決めた。

「……お風呂借りるわ。あっちでいいのね」

脱衣所だろうカーテンのほうへと足を向ける。だが紗耶はチドリを離さない。

「私はお風呂に行くの。だから離して」

「えへー。一緒ー」

にこにこ顔で紗耶がチドリを見上げている。

チドリは再びイズミに目を向けた。

今度は、イズミが両手を合わせてチドリを拝んだ。
「すまんっ。一緒に入るって言って聞かないから――つい」
「…………つい、じゃないわ。ほんとうに」
チドリは心底呆(あき)れると同時に困惑した。
入浴はしたい。しかし子供は苦手。烙印も見られたくない。
烙印は見られたくないし子供も苦手だけれど、汗が流せないのはもっと嫌。
数十秒悩んだ後、チドリは諦めた。
「……一緒に入るだけ。洗ったりはしてあげない。いいわね」
「うんっ」
首がもげるんじゃないかという勢いで、ぶんぶんと紗耶が繰り返して頷いた。
「恩に着る」とイズミ。
「仕方ないもの」とチドリ。
どちらが風呂を貸す側かわからなくなる会話の後、イズミがそそくさと玄関に降りた。
「紗耶は一人で服脱げるし、体も洗える。出た後も自分でできるから、見ていてくれるだけでいい。それじゃ、悪いけど頼むよ」
「……イズミは？」
「俺は外で待ってるよ。脱衣所、狭いからな。カーテンくらいじゃ中が見えちまう」
笑いながらイズミが玄関から出ていった。外からがちゃりと鍵を掛ける。

「ごゆっくりー」とドア越しに声が聞こえ、足音が遠ざかっていった。

「悪い人じゃないけれど……うざい人ね。相変わらず」

ぼんやりとそう呟いたチドリは、早く早くと紗耶に急かされ、脱衣所に向かった。

階段下の地べたに座り、ジンは考え込んでいた。

——ほんまに荒垣（あらがき）が、あの事件に絡んでるんやろうか。

現在は、些細（ささい）な状況証拠しかない。

事件が影時間に起きたらしいこと。

事件現場の更地に花を手向けていたのが、荒垣らしいこと。

この二つのみだ。荒垣が被害者の知り合いだったというだけなのかもしれない。

——しかし。あの、ラーメン屋での態度。

——何か、ひっかかる。

食事の途中で立ち去った時の、荒垣がまとっていた気配が『言えねぇ』と語っているかのように、ジンには思えた。

言えない。それはつまり何かを知っているということだ。

——隠すっちゅーことは。すなわち、そのことを隠す必要があるということや。

——隠さんでもええことを、隠す阿呆はおらんからな。

もしかしたら、イズミの依頼の犯人は、荒垣なのだろうか。

荒垣がペルソナ使いであり、影時間に活動できる以上、あり得ないことではないとジンは考える。

「……問いただしてみれば、わかるんやろうけどな。あいつもたいがい不器用やし」

荒垣が実直な人間であることをジンは知っている。だから「おまえがやったんやな」と直接質問したら、その場しのぎの嘘をつかないだろうことも予測がつく。

個人的に、荒垣のような男がジンは嫌いじゃない。

「やっぱ、訊くしかないんやろなぁ」

今まで、復讐代行に私情を挟んだことなどジンにはない。だが、今回は気が重かった。

はあぁと深いため息が漏れた。

「どうしたんだよ、ため息なんかついて。何か悩みか？」

不意に声をかけられ、ジンは顔を上げた。いつの間にか、すぐ隣にイズミが来ていた。考え事をしていたせいで、ジンはイズミが階段に降りてくることに気がつかなかった。

「……大したことやあらへん」

「そうは見えなかったけどな――横、いいか？」

「天下の往来や、好きに座れ」

一歩離れた場所にイズミが座った。しかしやはり気まずいのか、イズミは黙っている。

――荒垣のことは、やっぱりまだ言えへんな。

ジンも押し黙った。

一五分は過ぎただろうか。イズミが前を向いたまま口を開いた。
「この前は、悪かったな。怒らせるようなこと言って」
ちらりとジンは横目でイズミを見て、すぐに視線を前に戻した。手近な小石を拾い、ぽいっと投げる。
「そないなこと、もう忘れとったわ――おまえなんぞ、わしらにとっては路肩の石ころや。好きに生きてればええやろ」
偉ぶった台詞（せりふ）だが、口調は穏やかだった。
くくっとイズミが笑いをこぼし、立ち上がった。
「そんな石ころが、缶ジュースでもおごってやろう。アパート裏の自販機に行ってくるが、何がいい？」
少し考えてジンは答えた。
「そんなら、モロナミンG頼むわ」
栄養ドリンク系の清涼飲料の名に、イズミが首を傾げる。
「あれって髪によかったか？　そう言えば、また額（ひたい）が広くなったような――」
からかうように笑うイズミに、ジンはまた小石を拾うと投げつけた。
「どやかましい。とっとと買うて来い！」
ジンとイズミが笑みを交わす。笑顔のままイズミがアパートの裏に向かった。
見送るジンの顔から笑みが消える。

――イズミの依頼。早いとこ、けりをつけんとあかんよな。

荒垣とイズミ。その二人を天秤にかけたら、ジンにとって大切なのはイズミだ。

「わしは死を司るペルソナの使い手や――何をためらうことがある」

そのジンの呟きには、しかし迷いがあった。

狭い浴室には濃い湯煙が立ちこめている。古いアパートだからか、換気扇があまり働いていない。

小さな浴槽に、チドリは紗耶と肩を寄せ合って入っている。狭苦しいが、そこそこ快適だ。久しぶりに浸かる湯が何より心地よい。今のアジトはシャワーだけで浴槽がない。

――ジンに何とかさせなくちゃ。

チドリは、アジトにも浴槽が欲しいと思った。どうせ廃ビルなのだし、排水は適当でいい。どこかから、洒落(しゃれ)たバスタブをジンに盗ませよう。樹脂やタイル張りじゃなく、浅めの金属製で、彫金なんかが施されているのが欲しい。

自分好みにセッティングした浴室を妄想する。

無表情のまま一瞬、チドリはくすっと笑いをこぼした。

「どうかしたの？」

紗耶が不思議な顔をした。

「どうもしない」

チドリは速答し、湯船から腰を上げた。
「出ちゃうの？」
「髪、洗うだけ」
チドリは洗い場に出た。紗耶はおとなしく湯に浸かっている。
「……いい子ね」
そう言って、チドリはしゃがみ込んで髪を湯ですすぎ始めた。洗い場も浴槽と同じで狭く、チドリの背中は浴槽のすぐそばにある。
ぺた、と背中に触れられて「ひゃ」とチドリは驚いて声を上げた。
「……何」
肩越しに顔を浴槽に向けると、紗耶が悲しそうな顔をしていた。
「これ、痛い？」
紗耶が見つめているのは、チドリの背に走る二筋の痣――
人工ペルソナ使いの烙印だ。
「別に痛くないわ」
髪を洗う作業に戻ろうとしたチドリに、紗耶が訊きなおす。
「痛かった？　羽根、悪い人に取られちゃったんでしょ」
チドリは紗耶の言葉の意味がわからず、
「……羽根？」と聞き返した。

自分のことのように、心底悲しそうに紗耶が言う。

「パパがね、言ってたの。お姫さまはほんとは天使さんで、羽根を取られちゃったんだって。だから背中に傷があるけど、驚いちゃダメだって」

肩胛骨から背の半ばまで、並行に並ぶ烙印は、見ようによっては確かに翼をもがれた傷痕にも思える。

しかし、これはあくまで烙印だ。羽根を奪われた名残ではない。

――あの男は、何をおかしなことを子供に吹き込むの。

チドリは少し苛ついたが、はっと思いついたことがあり、考え直した。

チドリの背の烙印を見た紗耶が変に驚かないよう、気を遣ってイズミが作り話を教えておいたのだろうと理解した。

「……ほんとう。余計なことをする人」

イズミの気配りは不快ではなかった。だが、感謝はしない。

そもそも、チドリと一緒に風呂に入らないように、イズミが紗耶に言い聞かせてくれたらよかっただけのことなのだから。

紗耶をきちんと説得しなかったのはイズミの責任だが、紗耶に罪はないとチドリは思った。可愛らしいものは可愛らしい。罪などあるはずがない。

「……そうね。痛かった。でも今は平気だから」

心配そうな顔をしている紗耶の頭に、チドリは静かに手を乗せた。

「おいで。私より先にシャンプーしてあげる」
紗耶の表情が激変した。これ以上ないほどの笑顔で「うんっ」と頷く。
一瞬。その笑顔に、こんな子ならいつか産んでもいいかもとチドリは考えた──
ほんの一瞬。心の片隅で、未来が欲しいと願ってしまった。
すぐに軽く頭を振って、チドリは馬鹿げた幻想を意識から追い出した。
──私には。
──未来なんてない。
チドリの表情のかすかな変化を察したか、紗耶が首を傾げた。
「……どうしたの？」
「……どうもしないわ」
呟き返して、チドリは紗耶の小さな手を取った。

「……遅いな、イズミの奴」
イズミがアパート裏の自動販売機に出かけて、数分が経った。
ジュースを買いに行っただけにしては、時間がかかりすぎている。
「モロナミンG、売り切れとったんやろか」
恩人の仇討ちを願うようなイズミだ。普段は性格の軽さを感じさせるが、芯の部分は律儀そのものだとジンは知っている。

自動販売機に目当ての商品がなかったら、イズミならコンビニエンスストアまで足を伸ばしていても不思議はない。

ジンは立ち上がりかけたが、気を取り直して路面に腰を下ろした。

「もう少し……待ってみるか」

さらに数分が過ぎたが、イズミは戻ってこない。

このアパートに来る途中、コンビニエンスストアの前を通った。アパートから遠くはない。そのコンビニエンスストアまで行っていたとしても、イズミは戻ってくる頃だ。

「妙やな」

ジンは胸騒ぎを感じた。出かける直前、タカヤに言われたことを思い出す。

『何やら妙な予感がします。用心しなさい』

タカヤ自身にも、そのペルソナ、ヒュプノスにも予知能力などないはずだが、不思議と勘がよく当たる。

このお人は、わしらなんかと違う。

予言じみたタカヤの言葉は、ジンにそう思わせるカリスマ性の一端だ。

「わしまで危うい気がしてきたわ。はよ捜しにいこ」

ジンは慌てて腰を上げると、アパートの裏手に向かって駆け出した。

ぽつぽつと電柱につけられた街灯が灯っているだけの、暗く細い路地。

辺りにイズミの姿は見あたらない。

「……おらんな。どこ行ったんや、あいつ」
ジンは少し先にある自動販売機に駆け寄り、商品を確認した。
予想通り、ジンの頼んだドリンクが売り切れている。
「やっぱコンビニか？」
コンビニエンスストアに至る道筋は一本ではない。ジンが捜しに行っても、通る道によってはイズミとすれ違ってしまう可能性がある。
——もう少し、待ってみるか。
ジンは大きく首を横に振った。
「あかん。何やヤバい気がする」
己の精神の奥底に潜むペルソナ、モロス。それが何かを伝えようとしている気配を、ジンはおぼろげに感じていた。
不安を抱えてジンは走り出した。コンビニエンスストアの位置を思い描き、どの道筋を選べば最短なのかを計算する。近隣の住人が通りそうな道筋をジンは辿った。
交差点に来るたび、見える範囲だけでもと立ち止まって周囲を確かめる。
それを幾度か繰り返し、大通りに近い路地の薄暗い街灯の下に這いつくばっている人影を、ジンは見つけた。
その背格好。イズミに間違いない。コンビニエンスストアからの帰りらしく、買い物袋が傍らに落ちている。

ジンは駆け寄ろうとして、一瞬躊躇した。
全身に鳥肌が立つ。その理由がジンにはわからない。
――何を怖がっとる、わしは。
――何も恐れることないはずや。
得体の知れない恐れを振り払って「イズミ！」と叫び、ジンはイズミに駆け寄った。
イズミは四つんばいでうなだれている。息が荒い。尋常ではない熱だった。
「どないしたっ？」
イズミの肩に手をかけたジンは、驚いて身を離した。
不意にイズミの姿がぶれて見えた。
「まさか、ペルソナの暴走か？」
危惧するジンの目の前で、『何か』がイズミの姿に重なって揺らめく。
艶のある、ぬらりとした黒い人の形。
その姿に、ジンは戦慄を覚えた。
数日前。影時間にジンを襲ったあの黒い〈シャドウ〉――
シャドウ喰らいによく似ている。
「んな、馬鹿な……こないなことが――」
あるわけない。そう思ってジンは瞬きをした。
その瞬間、黒い異形は消滅した。

幻覚でも見たんやないかとジンは疑った。

幻ではないことは、全身をぬらす嫌な汗が証明している——

体の芯に恐怖が焼き付き、残っている。

「……乾く……乾くんだ……頭の中が……」

頭の中が乾く。意味不明の言葉をうわごとのようにイズミが繰り返す。

ジンはそんなイズミを呆然と見下ろしていた。

数十秒が過ぎ、ジンは我に返って携帯電話をズボンのポケットから取り出した。

「今、救急車を呼ぶからな！」

自分が裏の人間であることも忘れて一一九番に電話しようとしたジンの足首を、イズミが摑んだ。

「……やめろ……そんなことしたら殺——」

イズミがわずかに顔を上げた。長い前髪の隙間からジンを睨み上げた瞳には、怪しげな光が宿っている。

医者にかかりたくない理由はジンにもわかる。そもそも、ジンにもイズミにも戸籍さえない。保険証など持っているはずもなく、さらに普段から制御剤を服用している問題もある。だが、このイズミを放っておけるジンではなかった。

「そないゆうてもな、傍目にもう洒落になっとらん」

携帯電話を操作しようとしたジンの足首をイズミの手が締め付けた。すさまじい握力

だ。

「痛っ――何しよんねん！」

ジンは顔をしかめた。イズミの手から力が抜ける。

「かふっ」イズミが激しく咳き込み始めた。

イズミの顔の下にぼたぼたと滴るものを見て、ジンはさらに驚愕した。

血。

「イズミ、おまえ……」

ジンは言葉を失った。その手から携帯電話が滑り落ちる。

ペルソナの制御剤を服用する者が、血を吐くようになったら命は長くない。

たとえ制御剤を飲むのをやめたとしても、もう手遅れだ。

遠からず、イズミは死ぬ。それは避けられない結末だった。

かつんと音を立てて、携帯電話が路面に転がった。

携帯電話を拾うことさえ忘れて、ジンはイズミの発作が収まるのを待った。

しばらくして、イズミの咳が止まった。

吐いた血の量は相当なものだった。五〇〇ミリリットルのペットボトルをぶちまけたよりも、見た目では多い。

ゆらりとイズミが身を起こした。そばの壁に寄りかかりながら、どうにか立ち上がる。

「――悪ぃ。みっともないとこ、見せちまったな」

吐血で汚れた唇にイズミが笑みを浮かべた。どこか狂気が宿っている目つきに、ジンは背筋に寒さを覚えた。
一歩、イズミがふらりと踏み出す。
ジンはじゃりっと靴裏を鳴らして一歩後ずさった。
「……何だ、そんな怖い物でも見るような顔して。俺の顔、そんなに汚れてるか」
イズミはポケットからウエットティッシュのパックを取り出し、顔を繰り返しぬぐった。何枚使っても、ウエットティッシュが赤く染まる。
なかなかぬぐいきれない血に苛立ったか、イズミが「クソっ」と悪態をつき、まだ残っているティッシュのパックを路面に叩きつけた。さらに踏みにじる。
ぐしゃぐしゃになっていくティッシュのクズをジンは見つめていた。
──何か妙なことになっとる。
──何で。わしはこないにイズミが……
──怖いんや。
一瞬、イズミに重なって出現したあの黒い異形。
ジンの知るイズミのペルソナは、あんな姿ではなかった。
──さっきのアレ。いったい、何や。
その質問が、腹の底に張り付いて出てこない。口から出してしまえば、取り返しのつかないことになってしまう。そんな予感がジンにはあった。

シャドウ喰らいにそっくりな黒い怪異と、イズミの死の予兆。
二つの衝撃に、ただただジンは黙り込む。
「ジン？　ほんとうにどうした？」
イズミは訊ねながら足下に落としていたコンビニエンスストアの袋を拾い上げた。その素振りはごく自然で、口元がまだ多少血で薄汚れている以外におかしなところはない。
しかし。たったそれだけの動作にさえ、ジンは警戒心を覚えてしまった。
分身とも言えるペルソナ、モロスがイズミを敵として認識している。
ジンは確かにそう感じていたが、どうにか平静を装い、先ほど落とした携帯電話を拾い上げてズボンのポケットに納めた。
「――どないもこないもない。ただ……血なんぞ吐きよるから、たまげただけや」
「そいつは済まなかった」イズミの顔から笑みが消える。
「断っておくけどな、これは血なんかじゃない」
嘘にさえなっていない言い訳をイズミがする。
「最近、働き過ぎで胃の調子が悪くてな。飯が喉（のど）を通らないから、さっきもコンビニでトマトジュースを買って飲んで――胃が悪いせいか、戻しちまった。それだけだ」
「……そか。なら、しゃあないな」
あえてジンはイズミの言い訳に納得したふりをした。
近く死にゆくだろう友にしてやれることなど、そのくらいしかなかった。

「帰ろか。そろそろチドリも風呂から上がるかもしれへんし」

ジンは先に立って来た道を戻った。数歩送れてついてくるのが猛獣のように思えて仕方がなかったが、振り返ることもできない。

そこにいるのは猛獣などではなく、友人。

そのはずなのに、それが信じ切れない。

何を思っているのか、イズミは何も言わない。時折、大通りのほうから車の通る音が聞こえてくるだけの裏路地は、緊迫感の漂う静寂に支配されている。

イズミのアパートまでの、ほんの数分の道のりが、ジンには数時間にも感じられた。

ジンとイズミがアパートの階段下に戻ると、ちょうどチドリがパジャマ姿の紗耶の手を引いて降りてきた。

ドレスを湿らせないために、チドリはまだ濡れている髪をアップにまとめ、いつもの短剣のオブジェがついたヘッドドレスをしていなかった。

「おう、お帰り。すっきりしたか」

ジンは、湯上がりで紅潮気味のチドリに訊ねた。

「ええ」と無表情で答えたチドリが、イズミを見やって眉を寄せた。

「顔……それ。血?」

「パパ、またごほごほしたの?」

紗耶もイズミの口元が赤く汚れていることに気づき、心配そうな顔をした。

はは、とイズミが笑顔を見せる。

「コンビニでトマトジュース買って飲んだんだけどな。気持ち悪くなって吐いちまった。ひょっとしたら腐ってたかもな」

イズミは無理をしている。ジンにはそうわかっているが、素知らぬ顔をした。

「トマトジュース……」訝しげにチドリが呟く。

「さや、トマトジュースきらい」

味を思い出したのか、うえーっと紗耶が舌を出した。

変な顔とチドリに言われて、えへへと紗耶が笑った。

「仲ようなったんか」とジン。

「うん」と紗耶が頷く。

「別に」とチドリがまんざらでもない顔で言った。

「よかったな、紗耶」

イズミが、紗耶の乾いていない髪をぽんぽんとはたくように撫でた。

心から嬉しそうに、にこにこ顔でイズミを見上げる紗耶を、ジンは見ていられなくなって顔を背けた。

——そのパパな。もう長くないんや。

言えるはずもない——ジンは身を翻した。

「帰るで、チドリ」
返事を待たずにジンは歩き出す。
「さよなら」
チドリは告げて、紗耶の手を離した。
紗耶が名残惜しそうに、つないでもらっていた手を胸元で抱く。
「また来てね」
「約束は…………」
期待を感じさせる紗耶の瞳をまっすぐと見つめてチドリは言った。
「しないわ。来られたら来る。ただそれだけ」
わかっているのか、いないのか。紗耶は再び、また来てね、と繰り返し、手を振った。
「気をつけてな」
イズミの声を背に聞いて、チドリは紗耶に手を振り返すことなく、ジンを追った。
路地を早足で歩き去るジンに、チドリはなかなか追いつけない。
やがて、チドリは追いつくことを諦めた。足を止めて首を傾げる。
「……変なジン」
遠くない未来、イズミが死ぬ。
頭では理解できても、ジンは納得できなかった。

イズミと再会してまだ二週間も経っていない。

再会を喜んだあの夜の影時間が、つい昨日のことのように思える。

あの日、あの場所で。前髪を手でかきあげてイズミが晒(さら)した左目の上の傷は、人工ペルソナ研究所での訓練中の事故で、イズミがジンをかばった際に負ったものだ。

あの傷痕は、すなわちジンの負い目である。

だが、そのことをイズミは一回も口にしたことはない。

アジトに戻ったジンは、何をするでもなく壁に寄りかかって座っている。愛用のノートパソコンとタカヤの姿が部屋に見あたらないが、探すつもりにもなれない。

「——神も仏もおらへんのは、よく知っとる。けどな……あんまりちゃうか」

——イズミは。〈タルタロス〉の中で死んだほうが、よっぽど幸せだったやろ。

真希という同棲相手には会ったことがない。だからイズミが真希にどれほどの感情を抱いているのか、ジンにははっきりしたことが言えない。

だが、これだけはわかりすぎるほどにわかっている。

イズミは紗耶を溺愛(できあい)している。

あの幼子のためならば、イズミはどんなことだってするだろう——

千の人を殺せと言われても、ためらわずにイズミは鬼と化す。

ジンはそう信じて疑わなかった。

「……あの子。残して死ねるんかいな、イズミの奴」

常々タカヤは『物事に執着してはなりません、今のみを楽しみなさい』と言っている。それがストレガの主義だ。

「今頃になって。執着ってのがわしらには酷な結果しか出さへんと、よくわかったわ」

どうするんやろうな、イズミ。

そう呟いた時だった。別の部屋に行っていたタカヤが戻ってきた。手にはジンのノートパソコンを持っている。

「ジン。復讐代行の依頼メールが届いています」

「悪いが、タカヤ。今夜はそないな気分になれへん……メールの確認、明日でええか」

「今、確認しなさい」

妙に強い口調でタカヤが言った。

ただならぬ気配を感じ取り、ジンは重い腰を上げた。タカヤからノートパソコンを受け取り、画面に開いてあるメールをチェックする。

当然だが、差出人の名前には覚えがない。

メールに記載されている連絡先は巌戸台(いわとだい)――すぐ近くだ。

本文を読み始めたジンの顔から、みるみる血の気が引いていく。

「――嘘やろ」

我が目を疑い、ジンは絶句した。

私の彼は、バイトの後輩に会ってくると出かけた夜に、廃人のようになってしまいました。おかしいです。病院でも原因がわかりません。事件じゃないだろって警察も調べてくれません。どうかお願いです。いくらでも払います。

店の名は、はがくれです。絶対バイトの後輩のせいです！

イズミという奴を殺してください!!

ジンは動けなかった。まるで体が他人の物になってしまったかのように思えた。

息さえも止まっている。

ただ、己の心臓の鼓動だけがわずらわしいほどにうるさかった。

ひび割れそうになる意識を、かろうじて保つ。

——こないな、こと。

——あるわけ、ないやろ。

あえぐように無理矢理息を吸い、ジンはどうにか体の自由を取り戻した。

「く、くだらんっ、ほんまに悪質や！　こないな依頼、受けられるわけないやろ、どうせイタズラメールに決まっとる!!」

タカヤから顔をそらすと、ジンはうわずった声で怒鳴り、ノートパソコンを閉じてソファーに放り投げた。乱暴な扱いでノートパソコンが壊れたかもしれないが、そんなことなどジンにはどうでもよかった。

「本気で言っていますか、ジン」

落ち着いた口調でタカヤが言った。返事をしないジンに、さらなる追及はしない。

タカヤの静かな眼差しは、ジンの心を見透かしているかのようだった。

——ないなこと。あるわけないんや。

否定を念じながらも、ジンの脳裏には浮かび上がる。

一週間ほど前に見た黒い異形、シャドウ喰らいの姿が。

そして今日の、イズミに重なって出現したシャドウ喰らいにそっくりな影が。

その二つを無関係と考えるには、あまりに姿形が似すぎている。

むしろ、イズミのペルソナがシャドウ喰らいに変化し、人からシャドウを狩りだして喰らっていると推理するほうが自然だ。

シャドウは、人の精神の負の部分が具現化した存在だ。

そして人間は、精神からシャドウを失うと廃人に——〈影人間〉になってしまう。

『イズミと会いに出かけた恋人が、廃人になってしまった』

たった今、いたずらだと否定した依頼メールの内容も、ジンの推理を裏付けている。

「……気づいているのではありませんか」

静かにタカヤが続ける。

「――イズミに異変が起きていることを。ペルソナにも、彼の命にも」

「そないなこと！」

ジンは弾(はじ)けるようにタカヤに顔を向けた。

あくまで静謐(せいひつ)なタカヤの表情に、加熱した頭が冷えていく――

そないなこと、あるか。そう重ねて嘘をつくことを、ジンはやめた。

「……ああ。言われる通りや。この前話したシャドウ喰らいはおそらく、イズミのペルソナや。さっきのメールの被害者も、シャドウ喰らいにやられて影人間化したんやろ」

「ジンもそう考えますか」

ジンと比べたら圧倒的に少ない推理材料で、タカヤは同じ結論に達していたようだ。

つくづく凄いお人やとジンは思った。もしかしたらタカヤにならわかるかもしれへん、と疑問を口にする。

「――しかし、わしにはわからへん。どうしてイズミがペルソナにシャドウなんぞ喰わすのか……そないなことさせとったら、ペルソナがおかしくなって当然やないか」

ふむ、とタカヤが考え込む。

「憶測を口にするのは容易(たやす)いですが、それは愚者のすることです」

しばらくして、タカヤはそう言った。さらに、

「当人に――イズミに、直接訊ねるべきでしょう。どうせ、今から会うのですから」

「会うて。これからか？」

もうすぐ影時間だ。ペルソナ使い同士の密会には適した時間だが、血を吐いて疲弊したイズミを、ジンは今夜だけでもそっとしておいてやりたかった。

しかし、タカヤは譲りそうもなかった。

「ええ、これからです。彼にはもう、時間がない——そうですね、チドリ」

唐突に、タカヤはこの場にいないチドリの名を呼んだ。

壁の陰に隠れていたらしく、部屋の入り口にチドリが姿を見せた。

「……そう。もう、彼の命は潰えかけている。メーディアが、そう感じている」

チドリは髪を乾かし、普段通りにヘッドドレスをつけている。部屋着ではなく豪奢な外出着のドレス姿。再び出かける予感があったのか、帰ってきて着替えなかったようだ。

チドリのペルソナ、メーディアの超感覚に頼るまでもない。

イズミの命が消えかかっているのは、吐血を目の当たりにしたジンが誰よりもわかっている。

ジンは、心情を包み隠さず話すことにした。

「……奴は遠からず死ぬやろ……わしらが手を下さなくても、今日の復讐代行の依頼は、勝手に果たされる。そっとしておいてやりたい——わしは、そう思うとる」

しん、と場が静まり返る。

「それでいいのですか」

口を開いたのはタカヤだった。

「イズミはペルソナに、人間からシャドウを狩らせています。狩りの対象を今は選べているのかもしれませんが——もし。僕(しもべ)たるペルソナに逆に支配されてしまったら、どうなるか。わかりますね?」

ジンは考えずに思うがままを口にした。

「そりゃ、手近な人間から襲うやろ——」

言ってからジンは愕然(がくぜん)とした。

イズミのそばにいる人間。

それはすなわち、同居している真希という女とその娘、紗耶。

イズミが誰よりも守りたいだろう相手を、イズミ自身が廃人にしてしまう。

「——そないなこと」

ジンはぎりっと歯ぎしりした。あまりの理不尽さに、ただ悔しかった。

「——むごすぎる」

「イズミも、そんなことなど望んでいないでしょう。彼の命が消えるのが先か、ペルソナが制御不能になるのが先か、それはわかりませんが……時間は、もうありません」

タカヤは目を閉ざした。やがて、ゆっくりと開き直した。

「今、唯一の真実は。そんな彼を救えるのは、我らだけということです」

ジンは拳(こぶし)をきつく握りしめ、そばの壁に叩きつけた。皮が切れ、血が滲(にじ)む。

――今夜にも。イズミのペルソナは制御不能になるかもしれへん。

――そうなる前に、わしが。

「それなら。わしがこの手で、イズミを葬(ほうむ)る」

断固たる覚悟を込め、ジンは宣言した。

「それが。奴を友と呼ぶ、わしの義務や」

ジンはズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

これから、友人を死地に呼び出そうというのだ。

フリップを開こうとして、ジンは手が震えた。

一つ深呼吸して、気を落ち着かせる。

フリップの開く、かしゅんとした軽い音がやけに大きく聞こえた。

使い慣れた携帯電話のボタンを押すのさえ、手間取ってしまう。

液晶モニタに表示された番号に間違いはない。ジンはまだ震えの残る指で通話ボタンを押し、携帯電話を耳に当てた。

呼び出す間が、妙に長く感じられる。何度、コール音が繰り返されただろうか。

電話がつながった。だが、通話相手は――イズミは無言だった。

しかし、息が乱れている。体調がおかしいらしい。

「――どないした、イズミ。息、荒いで」

『――ジンこそ、どうした、こんな、時間に』

言葉が途切れ途切れになり、さらにイズミは咳き込んだ。
水っぽい音が聞こえた。また吐血したようだ。
イズミの咳が収まるのを待って、ジンは改めて話し始めた。
「手短に用件だけ伝えるわ」
イズミは黙っている。その沈黙を返事と受け止め、ジンは言った。
「おまえのペルソナのことで、話がしたい。影時間に出てきてもらおうか。場所は――せやな。巌戸台駅裏の駐車場でどないや」
冷徹な口調を意識しながらも、ジンは心の隅(すみ)で願ってしまった。
――来るなんて、答えるんやないで。
『――――――――わかった』
長い沈黙の後、そう答えてイズミが電話を切った。
――そか。覚悟、決まっとったか。
わかった。その一言が全てを伝えていた。
イズミは知っている。己が戻れない道を辿っていると。
――なら。わしが立ち塞(ふさ)がるだけや。
ぱしんとジンは携帯電話を閉じ、ポケットに放り込んだ。
最初にチドリが身を翻した。ふわりとドレスを踊らせて、廊下に消える。
タカヤが普段からベルトにねじ込んである拳銃を抜いた。回転弾倉(シリンダー)をがしゃんと振り

出し、弾薬をチェックする。弾倉を戻し、再び銃をベルトにねじ込むと踵（きびす）を返し、廊下に向かった。

ジンは、部屋の隅に置いてある武器運搬用のトランクを取りに行った。

中身は全て手榴弾（しゅりゅうだん）。さらに、トランクそのものが最後の手段の武器になっている。

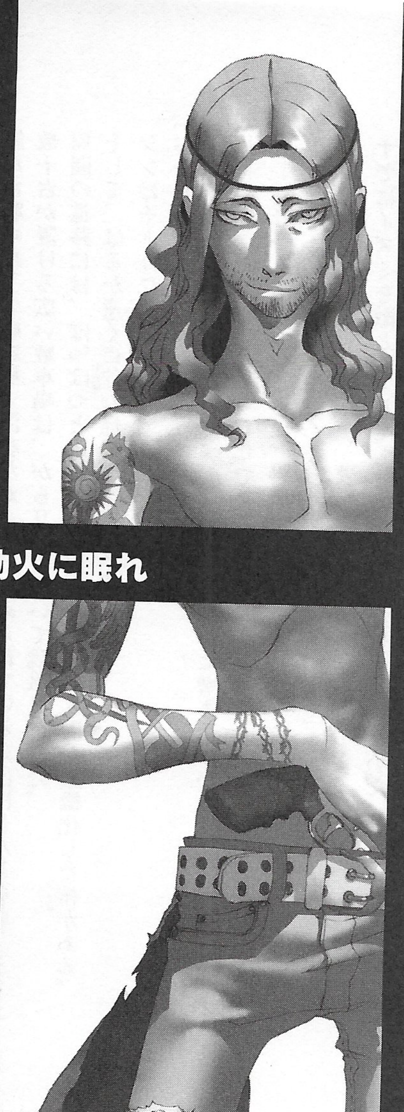
トランクは、ずっしりと重かった。

一瞬、この重さがイズミの命の重さにジンには思えた。

「……阿呆か。こないに軽いわけないわ、奴の命」

トランクを手に、ジンも部屋を後にした。

VI 友よ、劫火に眠れ



今宵(こよい)は新月。月のない〈影時間(かげじかん)〉の夜空は、穏やかささえ感じさせる、ほのかな緑色の燐光(りんこう)に満たされている。

今、〈ストレガ〉たちはイズミとの待ち合わせ場所にいる。

巌戸台(いわとだい)駅の裏手の駐車場。深夜だからか、駐められている車はほとんどない。

数十台が置ける広い駐車場は、がらりとしていて殺風景だった。

周囲の道路には、ぽつぽつと影時間に適応していない人間が象徴化した棺(ひつぎ)がある。

そして、はるか遠くに佇(たたず)む怪異の塔、〈タルタロス〉。

ジンはチドリに訊(たず)ねた。

「おかしなことはないか？」

「何も感じない……イズミが〈ペルソナ〉をどこかに潜ませているような気配はないわ」

――もし、イズミが戦うつもりで来るとしたら。

――数で優位に立つわしらに、奇襲をしかける可能性が高いしな。

そう考えたジンは、気が重くなった。

――戦うつもりか……

すでにイズミを敵として見てしまっている己(おのれ)に気づいたせいだ。それをチドリが敏感に感じ取る。

「……割り切らないと死ぬわ」

「わかっとる」

ジンは繰り返して首を横に振った。それでもまだ迷いは残っている。
「ペルソナは、心の力です」とタカヤ。
「対峙する前に気後れしていたら、待っているのは死のみです――来ましたよ」
タカヤが闇の一点に目を向けた。ジンもそちらを見据える。
路地裏から人影が現れる。
黒いトレーニングウエアの上下。上着のファスナーを首元までぴったりと閉めている。
吐血で汚れた顔をぬぐいもしないで、イズミは来た。
顔半ばまでを被う前髪の隙間で光る瞳は、わずかに狂気を感じさせる。
およそ一〇歩ほど離れた場所でイズミが立ち止まった。
「――さて。来てやったが……何が聞きたいんだ」
吐血が原因なのか、イズミの声はかすれている。
タカヤが一歩前に出ようとした。それをジンは、片手で制した。
ここは、わしが。そう意志を込め、横目でタカヤを見る。
「……任せましょう」
引いたタカヤに代わり、ジンが一歩、イズミに近づいた。
「おまえ、自分のペルソナに〈シャドウ〉を喰わせてるやろ。それも、人間から狩り出させて――相手が〈影人間〉になるのも、構わずな」
「……だから、どうした」

ぼそぼそとイズミが答えた。
ジンはさらに質問する。
「あの夜も。おまえはシャドウを喰らおうとしていた――ちゃうか?」
前回の復讐代行の仕事の時。シャドウの群れを一掃した直後、ストレガたちはイズミと再会した。今思えば、そのタイミングの奇妙さに気づくべきだったとジンは思う。
イズミは無言だ。ジンは構わず、自身の考えを口にする。
「あん時は、数が多かった――たぶんまあ、あれらは〈イレギュラー〉やろ」
イレギュラー。本来、タルタロスに巣くっているはずのシャドウが、何らかの原因でタルタロスの外に現れることがある。
頻度は少ないのだが、そうしたシャドウはイレギュラーと呼ばれている。
「イズミ。おまえには、あのイレギュラーの群れは、人から狩り出さずに喰える美味しい獲物やったはず――それをわしらに横取りされて、おまえは腹を立てた。せやから、わしらの素性を確かめもせずに襲いかかってきた……と。わしは、わしなりに考えた」
数十秒ほどの沈黙の後、イズミが口を開いた。
「そこまでわかっているなら、もう話すことなんかないだろ。そうさ、俺はペルソナにシャドウを喰わせてる――だがな。そんなこと、おまえらには関係ないはずだ」
――おまえが、そないなことしなければ。
――わしらには、こんな。

──こんな依頼、こなかったんや。

言いそうになった想いを飲み込んでジンは一つ息を吸い、気分を落ち着かせた。

「わしの推測なんか、正直どうでもええ。肝心なのは、こっからの話や」

「……やっと本題か。もったいぶらずに話せよ」

どこか苛ついた調子のイズミ。ジンは平静を保つ。

「そうやって喰った人間の中に、〈はがくれ〉の先輩バイトがおるよな」

「それが何だって言うんだ。それだって、別におまえたちには関係ない」

関係ないと言いながらも、後ろめたさを感じさせる口調だった。

「……そか。否定、せえへんのか」

心のどこかに残っていたかすかな希望が消えるのを、ジンは感じた。

「それが、関係あるんや。その先輩バイトの彼女からな──復讐代行を、依頼されたんや」

イズミは押し黙って聞いている。

ジンは感情を抑えた声で話を進めた。

「おまえに会いに行った彼が廃人になってもうた。きっと、おまえのせいや。せやから、おまえを殺してくれと。事情を知らん奴が読んだら、こないなメール、ただの電波女の妄想メールや。けどな、わしらペルソナ使いには、嘘一つない真実の訴えやとわかる」

「……それで」

しゃがれた声でイズミが続ける。

「復讐代行のターゲットとして、俺を。殺るというわけか」
怒鳴ったのでも、凄んだのでもない平然とした口調だったが、そのイズミの声には、恐ろしく迫力がこもっていた。
「俺を殺す。理由は復讐代行、それだけか」
気圧されそうになりながらも、ジンは顔色一つ変えなかった。
「他に理由が欲しいんか?」
――おまえが、紗耶を喰らって後悔せんようするためや。
イズミが聞きたくないだろう真実を言ったところで、おそらく結果は変わらない。
「……いや。充分だ。おまえらは、職業殺人者なんだからな。ビジネス。そう割り切ってもらえたほうが、俺も納得できるよ」
――覚悟はできとるちゅうわけか、やっぱり。
ジンは平静を装い、眼鏡の位置を片手で直した。
一瞬、眼鏡のレンズが影時間の夜空を反射して緑に光り、ジンの瞳を隠した。
言いたくないことを、ジンは徹底的に無感情な口調で告げる。
「話が早くて助かるわ。抵抗せんとあっさり死んでくれたら、なお助かるんやが」
「断る」
これ以上ないほどの速答だ。迷いもためらいもない。
始めから、殺すと言われることがわかっていたかのようだった。

「……俺は。死ねない……死にたくないんだ」

「それなら――わしらと殺りあう――そうゆうんやな？」

ジンの言葉で場の緊張感が一気に高まった。

「それしかないんだろ」

イズミが上着のファスナーを降ろし、そのまま一気に脱ぎ捨てた。

裸の上半身に、絡みつく荊(いばら)のごとき赤黒い痣(あざ)。

左胸。心臓の上に、薔薇(ばら)の花弁のような形で幾重にも重なっている傷痕(きずあと)。

おぞましいほどの、人工ペルソナ使いの烙印(らくいん)と、繰り返された召喚による胸の傷。

イズミはいつの間にか、右手に抜き身のナイフを手にしていた。

柄に、羽根に似た装飾板が――〈黄昏(たそがれ)の羽根〉という特殊な物質が埋め込まれている。

この黄昏の羽根は、ジンたちが使う銃型〈召喚器(しょうかんき)〉のグリップにも入っている。

ナイフ型ペルソナ召喚器。

これがイズミの手にしているモノの正体だ。

ペルソナの召喚とは、死を仮想体験することにより、魂の負の部分をペルソナとして具現化させる行為だ。銃型の召喚器を用いるペルソナ使いは、ペルソナ能力の高さ故に、弾丸の出ない銃で頭を撃ち抜くという儀式じみた行為のみでペルソナを呼び出せる。

だが、イズミはそうもいかない。元から弱い能力は、簡単には呼び出せない。

自ら刃で肉をえぐる。その痛みを伴う自殺のイメージでしか、イズミはペルソナを召

喚できなかった。それ故の、ナイフ型召喚器。
「じゃあ——始めようぜ」
イズミがナイフで左胸を裂いた。
血しぶきが飛び、一拍遅れて、青白い薄氷に似た破片が宙に散らばる。
「来い、〈名無し〉」
ジンが、タカヤが、チドリが身構える。
イズミの前に、黒い霧が虚空から噴き出してきた。それは一瞬で凝固し、ぬらりとした艶のある巨人の姿になった。
「——〈シャドウ喰らい〉」
ジンは腰の後から召喚器を抜いた。
「へぇ。おまえはコイツをそう呼ぶのか……ああ。ああ、今、やっと思い出した。この前、コイツが暴走した時に襲おうとしたのは——そうだ、おまえだった。悪かったな」
ジンはシャドウ喰らいに襲われ、そこを荒垣に助けられた。ペルソナと主は感覚がつながっているから、イズミが知らなかったはずはない。
だが、そのことをイズミは今、思い出したと言った——イズミの記憶には、混乱しているところがあるらしい。
ペルソナ暴走は一大事なのに、イズミはそれすら重大には考えていないようだ。
明らかに、精神のバランスが崩れてきている。

ジンは、イズミに残っているまともな側面しか見ていなかったことに気づいた。

おそらくは。再会したあの夜にはもう、イズミは半ば壊れていた――

「イズミ。おまえはわしが止めたる！」

ジンは召喚器を使った。〈モロス〉が出現し、シャドウ喰らいの前に立ち塞（ふさ）がる。

以前、シャドウ喰らいには闇の術を無効にされている。火炎の効果も薄そうだ。

ならば、物理的な攻撃をするしかない。

独楽（こま）を縦に三つ並べたような姿のモロスに人間の腕らしい腕はない。球体を連結したアームがあるだけだ。

三本しかない円筒状の指を、モロスが握った。拳（こぶし）を固めたのだ。

「ど突いたれ!!」

モロスが拳を振り回し、殴り合いになど向かない体で喧嘩を売る。

予想外の攻撃だったのだろう、シャドウ喰らいは目鼻のない頭に、まともにモロスの拳を受けた。

人の倍ほどもある体が、ぐらりと揺らぐ。

「やってくれる！」

イズミが怒鳴った。シャドウ喰らいが踏みとどまる。かぎ爪のある手を拳にし、モロスを殴り返した。

ど突くという命令を果たして消えかけていく最中のモロスに、拳が入る。

吹っ飛ばされたモロスは、空中で消滅した。
モロスのダメージが、反動になってジンに降りかかる。
それに耐え、ジンは中指を立ててイズミに突きつけた。
「何や、女できて腑抜けたかと思うたら。ええパンチ、撃つやないか」
拳を放った姿勢で、シャドウ喰らいの姿も消える。
「頭でっかちのミリタリーオタクのくせに、結構効いたぞ」
不敵に笑い、イズミが召喚器を構えた。
ストレガたちの、銃弾の出ない銃型召喚器と違い、イズミのナイフ型召喚器は、それ自体が武器になる。
それをジンは、一瞬忘れてしまった。
召喚器を構えている、その姿からペルソナ召喚を連想したのだ。
シャドウ喰らいが来る。そう予測して召喚器を構えようとしていたジンは、斬りかかってきたイズミに対処できなかった。
——ヤバい、殺られる！
硬直したジンの前。ずがっとアスファルトに手斧が突き刺さる。
攻撃にいち早く気づいたイズミは、後方に大きく跳んで手斧を避けていた。
「……ジン。一人で戦おうとしないで」
くんっと鎖を引き、チドリが手斧を引き戻した。柄を掴み、構える。

「ジンが死んだら色々困るでしょ……給湯器、直ってないし」
「復讐代行サイトの運営も、やってもらわないと困りますから」
タカヤがベルトから拳銃を抜き、イズミに向けた。
「イズミ。あなたはよい友人でした――残念です」
轟音（ごうおん）が響き、銃口が火を噴いた。
人間離れした反射神経でイズミが横に跳ぶ。風に流れた髪を銃弾が散らした。
銃を握っているタカヤの腕の筋肉が張りつめる。世界最強のリボルバー、スミス＆ウェッソン社のＭ５００（モデル）を片手で操るというだけでも、ありえないほどの離れ業（わざ）だが、タカヤは銃の反動を完全に抑え込んで連射した。
さらに四回、発砲音が轟（とどろ）いた。
その全てをイズミは避けきった――弾丸はかすりもしなかった。
タカヤは回転弾倉を振り出し、空薬莢を無造作にばらまいた。ジーンズのポケットから新しい弾丸を取り出し、優雅な手つきで弾倉に入れていく。
「……驚きましたね。凄い。その反射速度、人の領域のものではありません」
「誉（ほ）められても、手加減はしない！」
タカヤが弾丸の装塡（そうてん）を終える前に、イズミが身を低くしてダッシュをかけた。
刃を上に向けたナイフを、イズミは腰に添えて構えている。下から腹を突き上げようという意志が剝（む）き出しだ。

「リロード中に無粋（ぶすい）な」

タカヤが眉を寄せ、大きく後に跳びずさった。

だが、下がるタカヤよりも迫るイズミのほうが速い。

「させへん！」

ジンは手榴弾（しゅりゅうだん）を取り出しながら安全ピンを引き抜き、即座に放った。

こん、とタカヤの足下に手榴弾が落ちる。

タカヤは焦（あせ）ることなく、手榴弾をつま先で蹴った。

弾（はじ）かれた手榴弾は、突っ込んでくるイズミに真っ直ぐ飛んでいく。

爆発に巻き込まれないように、さらにタカヤが下がる。

イズミは避けられるタイミングではない。手榴弾の直撃を受ける――

その寸前、ナイフで胸を切り裂いた。

出現したシャドウ喰らいが、大きく顎門（あぎと）を開いて手榴弾を喰らった。

どんっと黒い頭が爆散し、火球が発生した。

そして何事もなかったかのように、シャドウ喰らいの頭が復元する。

す、とシャドウ喰らいが消滅する。手榴弾で倒せたのではない。一つ役目を終えたため、ペルソナが主の精神に戻るだけだ。

「見たやろ。アレには火炎系や爆裂系の力は、効果が薄い。さらに闇の力は完全に無効化しよる」

「……調べてみる」

チドリが召喚器を使った。羊頭の赤い魔女、〈メーディア〉が出現する。

メーディアがイズミを見据えた。無感情な羊の瞳に怪しげな光が走る。シャドウ喰らいの能力を、その超感覚で読み取っているのだ。

役目を果たし、メーディアが消滅した。

チドリがメーディアから伝えられた、シャドウ喰らいの分析結果を告げる。

「イズミのペルソナに、これという弱点はないわ。火炎のみに耐性があるわけじゃない。電撃、疾風、氷結の全てに耐性、それから光と闇は無効」

「んなっ」

ジンは絶句した。防御能力ならば、シャドウ喰らいはストレガの誰のペルソナよりも強力だ。

術で倒そうというのならば、耐性を払拭するほどの強い力が必要だということになる。

「……喰ったシャドウの特性を受け継いだということですか」

シャドウという怪異には、様々な種類がある。人型、スライム型、獣型、鳥型、虫型など、外観が多様なように、能力のバリエーションも多岐にわたる。

イズミのシャドウ喰らいは、様々なシャドウを捕食することで、多様な能力を得たらしい。

万能のペルソナ。
人工ペルソナ使いの研究でも、求められていたテーマだ。
研究機関が潰えて幾星霜――ジンたちをいじくり倒した研究者たちの求めていた答えを、出来損ないと蔑まれ、名前さえ与えられなかったイズミのペルソナが出したのだ。
「参りましたね。私の〈ヒュプノス〉さえ、我が魂の中で少々萎縮しています」
タカヤの頬に汗が一筋流れた。
「これは案外。今日が、私たちの命日になるやもしれませんよ」
――どないする。
焦るジンの視界で、ゆらりとイズミが動いた。二度のペルソナ召喚で刻んだ胸の傷は、もう治りかけている。ペルソナ使いは一般人より高い治癒能力を持っているが、それにしても異常な回復力だった。
「おまえ。ほんまに人間辞めてもうたんか」
「人間を辞めたつもりなんて、ない。ただ、死にたくなかっただけだ」
ナイフをきらめかせ、イズミが踊るように地を蹴った。
イズミの戦闘力は、常軌を逸していた。
駐車場の中央で始めた戦闘だったが、ストレガたちはイズミに押され、今では駐車場の出口に近い場所で戦っている。

三対一という数の差など、優位になっていない。
むしろ三人いるから、どうにかイズミに対抗できているような状況だった。
シャドウ喰らいというペルソナよりも、厄介なのはイズミの身体能力だった。
弾丸さえ避ける反射神経と速度。三人がかりで間断なく攻撃を加えても、当たらない。
だから、攻撃の手を休めることもできない。
イズミの武器はナイフ型召喚器一つだが、間合いに入られたらおしまいだ。
気がついた時には胸を貫かれ、ほんとうに今日が命日になってしまう。
――タカヤの予感は、ほんまによく当たる。
「こないな時くらい外れてくれてもかまへんのにな！」
怒鳴りながらジンは、手榴弾を続けて三つ投げた。これで倒せるとは思っていない。
牽制（けんせい）だ。爆風でイズミが体勢を崩すことのみを狙っている。
一発、二発。爆炎をイズミがかわす。
三発目。余裕を持って、イズミはアスファルトで跳ねた手榴弾を避けた。
その手榴弾が、次のバウンドでアスファルトのひび割れに当たり、予想外の向きに弾（はず）んだ。避けたはずのイズミの足下に手榴弾が転がった。イズミの足が止まる。
跳んで爆発をかわすか、それとも爆発前に手榴弾を蹴り飛ばすか。
判断に迷った一秒が命取りになる。
イズミがまともに爆発に巻き込まれた。

手榴弾の砕けた殻が、礫となって全身に食い込む。
炎と煙が収まるのを待たず、タカヤが発砲した。
銃声は一発。残っていた最後の弾を撃ち、即座に弾丸を交換しようとした――
動作の途中でタカヤが目を見開いた。
「おおお!!」
吼えた。タカヤは召喚器を使わない。己の精神で死を意識しペルソナを召喚する。
タカヤを守るように、黒曜石の翼を持つ蒼い肌の少年、眠りの神ヒュプノスが虚空から顕現した。
そこに、爆炎から飛び出したシャドウ喰らいが襲いかかる。
「爆ぜよ!」
タカヤが命じた。〈メギド〉という術が発動する。
ヒュプノスとシャドウ喰らいの間に光が集束する。
光が爆裂した。黄金の炎が爆圧を伴ってヒュプノスとタカヤもろとも、シャドウ喰らいを吹き飛ばす。
飛ばされたタカヤの背にジンは駆け込んだ。抱きとめようとして、ジンまでよろめく。
二人揃って路面に転がった。痛さを確かめる暇もなく、二人同時に身を起こす。
黄金の炎は、ジンの手榴弾の爆炎までも吹き消した――
そこに、イズミが立っていた。手榴弾の破片でズボンはずたずたになり、上半身も血

まみれだった。さらに左の手首から先がなく、ぼたぼたと血が垂れている。
「手を犠牲にして、頭を守りましたか。なかなかに潔い」
イズミの頭を正確に狙ったタカヤが、感心した。
タカヤの拳銃M500の弾丸は、人の頭など簡単に吹き飛ばす。
「吹っ飛んだのが手首だけで、ラッキーだよ」
痛みを感じていないのか、イズミは顔色一つ変えない。体の裂傷が見る間にふさがっていき、手首から滴る血も止まった。
手首のなくなった左腕を、イズミがまじまじと見た。
「――さすがに。手首が生えてはこないか」
「……化け物ね」とチドリ。
「わかっているの？　その回復力そのものが、命を代償にしていること。その身体能力も、消える寸前の蠟燭の輝き――生命の最後の光っていうこと……戦えば、戦うだけ。あなたは死に近づくのよ」
ジンもうすうす勘づいていた。イズミの爆発的な戦闘力が、命を代償にしていると。
こうしている間にも、イズミの顔は土気色になっていく。
生きるためにイズミは戦っている。
そのはずなのに、この戦いは皮肉なことにイズミを死地に近づけていた。
「死ぬ前に……おまえらを殺すさ。そして俺は、家に帰るんだ」

家に帰る。そう言った時、イズミの瞳から狂気の色が消えた。
「……今夜も真希さんは夜勤なんだ。紗耶が一人で待ってる……俺、帰らなきゃ……」
再び、イズミの目に怪しい光が灯る。
「だからさ。おまえら、死んでくれよ。俺のために——そうだ。喰わしてくれよ、おまえらのペルソナ。そしたら俺の名無しはもっと強くなる……きっと俺の命だって伸びる——これまでだって、死にそうになるたびに名無しにシャドウを喰わせて、生き長らえたんだ」
イズミの強烈な生への執着に、ジンは驚くしかなかった。
「そこまで、生にしがみつくんか……」
それ以上、何を言えばいいのかわからないジンの心情を代弁するように、拳銃の弾丸を交換し終えたタカヤが、口を開いた。
「愚かしいことを。我々の死は抗いようのない約束です。その約束と引き替えに、この影時間という素晴らしい刻を知り、力を得た。凡人が幾度くだらない人生を輪廻転生しようとも知り得ない秘密を、こうして体感しているのです。醜く老いることなく散れるのは、むしろ喜ばしいことなのです——それが、わかりませんか」
短い沈黙の後、イズミは吐き捨てるように言った。
「……わかりたくもない。生きて、一緒に生きたい人といられるのなら、俺はどんなことだってするんだよ」

「私たちを殺しても……」
チドリの顔に表情はなく、その声に感情の色はなかった。
「……理解できないわ。そんな醜い生き様なんて」
「わかってくれとは言わない。言えない。言うつもりもない――だから。俺におまえらのペルソナを――」
イズミは目に憎悪とさえ受け取れる狂気の光を宿し、ナイフを構えて膝をためた。
「寄越せ!!」
まずはチドリに飛びかかる。チドリが投げた手斧を易々とかわし、迫る。
「させません」
タカヤが発砲した。一発。二発。イズミが避ける。
避けられることを読んだ上で、タカヤは弾丸を放つ。
その間に手斧を手元に引き戻し、チドリが逃げる。
回転弾倉に収まっている五発を撃ち尽くした代わりに、タカヤはイズミの足を止めた。
「イズミィィィイイッ!!」
ジンはトランクをイズミに投げつけた。投げた手に、細いワイヤーを握っている。
これがジンの奥の手だ。
トランクの外装にはみっしりと爆薬がつまっている。
「これで、仕舞いや!!」

ジンは、ワイヤーを力の限りに引いた。トランクにつながっているワイヤーが、中に仕込んである手榴弾の安全ピンを引き抜いた。

手榴弾を起爆剤にするトランク爆弾の、その威力。

人間を百人吹っ飛ばして、あまりある。

ジンたちのいる位置とて安全圏ではない。ジンは即座に召喚器を使った。

「ペルソナぁあっ!!」

出現したモロスが、ストレガたちをその身でかばう。

イズミの頭上で、トランクが爆発した。

閃光が周囲を白く染め、さらに炎と爆風が荒れ狂う。

モロスにも火炎が襲いかかる――その全てをモロスが反射した。

火炎放射の勢いで、炎が爆心に戻る。

モロスは火炎攻撃を反射するという防御特性を持つ。それをジンは利用し、防御と共に拡散する攻撃力を、可能な限り標的に集中させたのだ。

耳をつんざいた爆音の残響が消え、周囲に散らばった火の粉も消えた。

グラウンドゼロとなった駐車場のアスファルトは、まさしく爆撃されたように無惨にえぐれ――

それでもイズミは立っていた。全身傷だらけだが、目に光がある。

生きている。

瞬間的に、召喚器を使わずにペルソナを呼び出し、楯にしたとしか考えられない。
「――イズミ。おまえの執着は、わしの奥の手を上回ったか」
今の一撃で倒せなかったのならば、もうジンに打つ手はなかった。
にやりと血だらけの顔でイズミが笑む。
「――ジン。さすがにやるな、おま――」
言葉半ばで、イズミは血を吐いた。制御剤の副作用によるものか、トランク爆弾のダメージによるものか、それはわからない。
しかし、激しく咳き込むイズミが無防備なことは、誰の目にも明らかだった。
タカヤが回転弾倉を振り出した。空薬莢を無造作にばらまき、ただ一発、弾丸を込めて弾倉を戻し、拳銃を構えた。
一発で充分だ。避けられない相手の頭を吹っ飛ばすのには。
「今、楽にしてあげます――さようなら、友よ」
ジンは、引鉄を絞ろうとしたタカヤの手を押さえた。
どうしたのですと問うタカヤに、ジンは懇願する。
「その一発。わしにやらせてください」
「……………いいでしょう」
タカヤが拳銃をジンに託した。ずっしりと重い巨大な銃を、ジンは両手で構えた。
咳き込むイズミまで距離はない。

ジンは射撃に不慣れだが、この距離なら外さない。
銃口の向こうにある、背中を丸めた無防備なイズミの頭が、やけに近くに思えた。
トリガーにかけた指が震える。
この指にもう少し力を込めるだけで、イズミの生は終わる。
「わしらも、じきに行く。地獄で待っとれや――」
ぎりっとさらに、トリガーに力を込めた。次の瞬間には撃鉄が落ちる――
その時だった。
イズミが頭を跳ね上げた。息を止めることで咳を抑えたようだ。
「……だから死ねないんだよ、俺はっ!!」
ためらいなく、イズミがナイフ型召喚器を左胸に突き立てた。
刃、全てが肉に埋もれる。
短いナイフだ。だが、心臓を貫ける長さだった。
死ねない。その言葉とは矛盾した行動だった。
「おまえ、何しとるんや！」
拳銃を撃つことさえ忘れてジンは怒鳴った。
タカヤが表情を曇らせ、チドリの顔色が変わる。
「まずいですね」「…………」
「阿呆な真似しよって！」

たった今まで殺そうとしていたことさえ忘れて、ジンはイズミに駆け寄ろうとした。
その手首を、チドリに掴まれ、振り向いた。
「離さんかいっ」
「ダメ……殺されるわ」
チドリは小さく首を横に振った。
「殺される？ そないなことあるか、あいつは死のうとしよったんやで」
チドリの手を強引に振り払い、ジンは目をイズミに戻した。
目の当たりにした異変に目を見開き、手からタカヤに借りた銃が落ちる。
胸にナイフが突き刺さったままのうなだれているイズミの背から、黒いもやが立ち上っている。
もやが人の形になった。シャドウ喰らいのようなはっきりとした実体ではないが、大きい。見上げるほどの巨人だ。
存在が不安定らしく、崩れゆく砂人形のように巨人の輪郭が乱れる。
「名無し……俺を、喰らえ。おまえは俺になる……俺はおまえになる……」
人間を。
捨てる。
生きるために。
そのイズミの呟き(つぶや)は、おそろしく小さなものだった。

だが、ジンははっきりとその声を聞いた。
「イズミ、あかん!」
まるでジンの叫びを合図にしたように、巨人は目鼻のない顔で顎門を大きく開き、虚空に吼えた。
耳にするだけで精神にダメージを受けそうな咆吼を上げながら、巨人が背後からイズミを襲った。ばくりと一口で上半身を飲み込み、二口目でイズミの姿が消えた。
巨人の姿が崩れる。体を作っていた黒いもやが、球状に変化しながら濃度を増す。
ついにもやが実体化した。空中に、胎児のように身を丸めた黒い人間の形が現れる。
不自然なまでの痩身、不似合いなほどに巨大なかぎ爪のある両手。
シャドウ喰らいを人間の大きさまで縮めた姿、そのものだった。
イズミが人とペルソナの融合体として生まれ変わろうとしている。
「!」ジンは背筋がビリビリと痺れるほどの緊迫感を感じ、振り返った。
タカヤが天を仰ぎ、背を反らしている。
オーラが空間の歪みとして見えるほどに、精神を集中している。
「ぉぉぉぉぉぉぉおおおおっっっ!!」
タカヤが獣の叫びを上げた。真上に、ヒュプノスが出現する。
「全霊を込めたこの一撃で——彼岸へと渡りなさい、イズミ!!」
まだ宙で丸まっているイズミを、黄金の炎の奔流が襲った。

一度シャドウ喰らいに見舞ったが効果の薄かったメギドという術だ。

しかし、先ほどとは輝きが違う。まぶしさに目さえ開けていられないほどだ。

桁違いの集中力から放った術は、その威力も桁違いとなる。

タカヤの、ありったけの精神力をつぎ込んだその術は、たとえどれほどイズミが人間離れした存在に生まれ変わっていようが、無に帰すに違いないとジンには思えた。

だから、輝きが消えた後の光景は、まったくの予想外だった。

「……思ったよりは効いたな」

イズミが平然と立っていた。効いたとは言ったが、見た目にダメージは感じさせない。

タカヤの渾身(こんしん)の一撃さえ、人間を捨てたイズミには通用しなかった。

イズミは、シャドウ喰らいそのものの姿になっていた。

あの長い前髪はない。目も鼻もない。閉じているだけか、口もない。胸に突き刺さっているはずのナイフ型召喚器は見あたらない。体内に取り込まれてしまったらしい。

イズミの面影は、左の額から目の辺りまでくっきりと彫り込まれた、一条の傷痕のみだった。先ほど失われたはずの左手も、かぎ爪のある異形(いぎょう)の手として復活している。

変わり果ててしまった友の姿に、ジンは力なく呟いた。

「そないな姿になってまで……しがみつく生に。意味、あるんか」

「それは俺が決めることだよ。ジン。わかってもらおうなんて、思わないさ」

それは確かにイズミの声だった。だが、こもり気味でどこか遠くから語りかけている

ように聞こえてくる。
「俺たちはもう、わかりあえない……再会した時にはすでに、わかりあえなくなってい
たのかもしれないな。俺は影時間もペルソナももうどうでもよくて、真希さんとあの子
のために生きていたかった――だが。おまえたちは昔と変わらず、この時間と力に誇り
を持っていた。変わったのは、俺のほうだ。だから――わかってくれなんて言わない。
ただ、謝るだけだ」
一度、声が途絶えた。数秒、怖気のするような静寂が周囲を支配した。
「すまん。俺の邪魔をしないでくれ。邪魔をするなら、殺す」
言ったきり、イズミは黙り込んで微動もしなくなった。
「……私たちなんか、いつでも殺せるというの」
チドリがそう訊ねた。イズミは答えない。ただ、突っ立っている。
「――ちゃうな。逃げたいなら逃げればいい。そういう気や、奴は」
ぴくんとわずかにイズミが身じろぎした。どうやらジンの推測は的を射たらしい。
「残念ですが、それはできません。私たちはあなたが言った通り、力に誇りを持ってい
る。ここで逃げ出すということは、誇るべき力を――ペルソナを信じないという証」
タカヤが片手で髪をかき上げた。疲弊しているはずだが、目に力がある。
「逃げるっつー選択肢は、わしとタカヤにはない。イズミ。やるならとことんやるで」
ジンはちらりとチドリを見た。

「おまえは逃げろ。これ以上、こないな殺し合いにつき合うことはない」
「……つき合うわ」
チドリが頑固なことをジンはよく知っている。ここで、一人でも逃げろと繰り返して説得を試みるのに意味はない。
「そか……好きにせい」
そうジンは口にして、胸中で（すまん）と呟き、武器の残りを思い浮かべた。
上着の左右のポケットに、手榴弾が一つずつ。後は召喚器のみ。
——正直。キツイ状況やな。
タカヤとチドリが今どんな状態か、ジンは改めて考えた。
タカヤは先ほどの術で相当に精神力を削ったはず。ヒュプノスが術を使うのは、せいぜいあと数回が限度だろう。
チドリはまだ、それほど消耗していないはずだが、情報分析などを得意とするチドリのメーディアの基本的な戦闘力は、タカヤのヒュプノスに遠く及ばない。
——いざとなったら、イズミをとっ捕まえて、モロスもろとも自爆するしかないか。たとえその手段を使ったとしても、勝ち目はほぼゼロに近いとジンは考えた。
しかし。引くわけにはいかない。
「さて。第二ラウンド、おっぱじめよっか。影時間も永遠ちゃうからな、こないなとこ誰かに見られるわけにもいかんやろ。さっさとケリをつけるで」

「——揃いも揃って馬鹿野郎どもが。逃げればよかったんだ」

異形と化したイズミに表情などない。額の左側の傷痕以外、顔はぬらりとしているだけだ。ただ、声音には苛立ちと諦観が混ざっていた。

は、とジンは嘲るように笑った。開き直り、悪態をつく。

「ずいぶんと偉くなったもんやな、ちょいと人間辞めたくらいで——この出来損ないの名無し使いが。わしらを殺す？　わしらのペルソナを喰う？　笑わせるんやない！」

ゆっくりとした動作で、ジンは召喚器をこめかみに当てた。

「おまえは、わしらには勝てへん。それを今、教えたる——モロス!!」

トリガーを引く。頭を貫いた衝撃が魂の底から死の機械神を呼び覚ます。

モロスが出現すると同時に、ジンは吼えた。

「叩き潰したれ！」

モロスが地を滑るように移動し、イズミに迫る。その機械然とした腕が唸る。

シャドウ喰らいと融合したイズミは、両手こそ大きいが元の体格のままだ。巨大なモロスと比べたら、体格差は歴然だ。

——パワーで押し切ったる。

振り下ろされたモロスの拳が、イズミの頭を直撃した。

イズミの足下、アスファルトが陥没する——

ただ、それだけだ。イズミは平然と立っている。

た。
驚愕するジン。イズミは両腕でモロスの拳を摑むと、いとも簡単に横へと放り投げ

「何やてっ？」

空中でモロスが消滅する。その瞬間にイズミの姿も消えた。

ごっと風が唸る。どこに行ったとジンは慌てて視線を左右に走らせた。

「きゃあっ」

チドリの悲鳴を聞いて振り向くと、そこではイズミが、チドリの首を片手で摑み、宙に釣り上げていた。

もう片手がチドリの顔に迫る。顔の前で、かぎ爪が何かを握る動きをした。

「嫌っ、奪わないで!!」

悲壮にチドリが叫んだ。イズミの手に握られて現れたのは、チドリのペルソナ、メーディアだ。まるで魂を抜き取るかのように、実体化しきっていない幽体のごとき半透明なメーディアが、ずるずるとチドリから引っ張り出される。

人間からシャドウを抜き取って喰らうように、イズミはメーディアを喰らおうとしている。

「今、助けたる！」

駆け出そうとしたジンを「下がりなさい！」とタカヤが止めた。

ヒュプノスが出現する。

「風よ！」とタカヤが命じ、発生した突風がチドリもろともイズミを宙に巻き上げた。

〈ガルダイン〉という風系の術である。

驚いたのか、イズミがチドリから手を離す。

半ばまで引きずり出されていたメーディアが、すーっとチドリの中に消えた。

ドレスを風にはためかせ、空に舞い上がったチドリが落ちてくる。

ジンは召喚器を使い、チドリの真下にモロスを召喚した。モロスは一本しかない腕で器用にチドリを抱きとめ、地に降ろすと消えた。

その隙を、着地したイズミが襲おうと走る。

「行かせません！」

タカヤが再びヒュプノスを呼び出した。

「雷槌（いかづち）を！」

雨雲のない空から轟音と共に紫電（しでん）が降り、イズミを撃った。

〈ジオダイン〉という強力な雷撃系の術である。

ヒュプノスが消える。電撃の影響で周囲の空気がオゾン化し、異臭が立った。

多少はダメージを受けたらしく、イズミは少しふらつくと足を止めた。

「――タカヤ。おまえから片づけたほうが、よさそうだな」

威力の高い様々な術を操るヒュプノスを、イズミは最大の敵と認めたようだ。

ゆらりとイズミがタカヤに向き直る。

「いいでしょう。相手をして差し上げます」

ペルソナ召喚の繰り返しで精神疲労が酷いタカヤだが、敵に背など見せない。挑まれたら真っ向から受ける。それが力を持つものの美学であり、義務だ。

タカヤはちらりと、ジンが落としたままの拳銃を見やった。

イズミは術を使わない——使えないのだろうとタカヤは判断している。イズミのペルソナ、名無しは術を使えなかった。シャドウを多く喰らって特性を取り込んでも、そこは変わらなかったということだ。

ならばイズミの攻撃は打撃のみ。いかにして離れて戦うかが鍵になる。

そのために、拳銃は必要だった。

今、もっとも拳銃に近い場所にいるのは、ジンだ。

タカヤが目をジンに向けた。

ジンは無言で頷(うなず)き返した。

「行くぞ」イズミが動く。

「おおおっ!!」

タカヤは叫び、ヒュプノスを喚(よ)んだ。

「氷に眠れ!!」

〈ブフダイン〉という氷系の術をヒュプノスが発動させた。イズミに向かって冷気が集まる。蒸し暑い夏の大気中の水分が凍り付き、ダイヤモンドダストとなってきらめく。

きん、と音を立て、走る姿そのままにイズミが凍り付いた。

その間にジンは拳銃へと走った。頭からスライディングして拳銃に飛びつき、身を起こす前にタカヤに投げる。

拳銃をキャッチしたタカヤは、素早い手つきで弾丸のリロード作業を終えた。

同時にイズミを包んでいた氷が砕け散る。

タカヤがイズミに銃を向けた。すでに何度も銃弾を避けられている。このまま撃てば結果は見えている。

イズミが再び駆け出そうとした瞬間に、チドリが手斧を投げた。鎖が音を立て、手斧はイズミの片方の足首に絡みつく。

チドリの腕力では、鎖ごとイズミに引きずられるだけだ。

そんなことはチドリだってわかっている。イズミと力比べなどしない。

「メーディア」

召喚器を使い、羊頭の魔女を呼び出した。メーディアが手斧の鎖を握り、引く。

ぎんっと音を立てて鎖が張りつめる。

イズミは転倒こそしなかったが、完全に足を止められた。

「喰らうがいい！」

タカヤが立て続けに銃を撃った。

落雷のような発砲音が連なり、銃口が火を噴いて踊る。

弾丸がヒットするたび、イズミの体が反動で跳ねる。
猛獣さえ一発で仕留める世界最強クラスの拳銃弾５００Ｓ＆Ｗマグナム弾が正確に、イズミの頭に二発、胸に三発、撃ち込まれた。
ジンには全てが終わったように見えた。
だからジンには、イズミの背中越しに見えるタカヤの愕然(がくぜん)とした表情が、理解できなかった。
「今。何かしたか」
平然とイズミは言い放った。その足下に、ひしゃげた弾丸が落ちる。
弾丸が体に食い込むことさえなく、表面で潰れたのだ。
「邪魔だ」とイズミは足に絡まっている鎖を掴み、力任せに引っ張った。
メーディアとの引き合いで、ばぎんと鎖が千切られる。
「あ」とチドリがこぼしてメーディアが消え、じゃらりと鎖が地に落ちた。
イズミが再び動き出す。その足から、鎖が解けて手斧が外れる。
足枷(あしかせ)のなくなったイズミが、さらに加速する。
「避けろ、タカヤ！」
ジンは即座にポケットからラスト二個の手榴弾を取り出し、二つ同時に歯で噛(か)んで安全ピンを引き抜き、タカヤとイズミの間に落ちるよう、投げた。
一瞬だけイズミの動きが遅くなる。マグナム弾でさえ傷を負わないイズミは、ジンの

手製の手榴弾など、もはやどうということはないはずだが、人間であった時の恐怖で無意識に体がすくんだらしい。
アスファルトで跳ねた手榴弾が、ほぼ同時に二つとも爆ぜる。
ジンの合図で退避していたタカヤは、イズミが爆炎にまかれている間にジンたちのところに駆けてきた。その息が荒い。ペルソナの使い過ぎで、精神のみならず体力まで相当に削られている。
手榴弾の炎が収まる。やはりイズミは倒れていなかった。
両手をだらりと下げた姿勢で、イズミが振り返る。
「…………こんなもの、今の俺には花火以下だよ」
イズミの足取りは確かだ。しかし、ジンはイズミに明白なダメージの証を見た。
「額の傷。見てみぃ」
イズミは、左目を隠すように片手で顔を被った。
顔に目はないが、イズミはその手を胸元に持ってきて、見つめるような仕草をした。
「ああ。血だな……そうか。俺にはまだ、血が流れているのか」
無敵に等しい防御力を誇ったシャドウ喰らいだったが、イズミと同化することで、古傷の部分だけが弱くなったらしい。
手榴弾の破片がその古傷をえぐったのは、ただの偶然だ。しかし傷は深いようで、血は止まらない。涙のように頬を伝い、あご先から滴となって血に垂れる。

「――今ならまだ。人に戻れるかもしれへんで」
人に戻って欲しい。そんな願望を込めてジンは語る。
「そないな姿じゃ、真希さんとやらとも、あの子とも、もう会えへんやろ。たとえ先が短い命だとしても、人として、あの子のそばにいてやったらどうや」
イズミが肩をかすかに震わせる。無言だ。
笑っているのか。
それとも、泣いているのか。
ジンにはわからない。
「ペルソナの暴走かて、制御剤を増やせば、抑え込めるかもしれへん。その代わり、余命が短くなってしまうが、それでも――」
ジンの言葉半ばで、イズミがかすかに首を横に振った。
「……手遅れだ。召喚器を胸にねじ込んだ時、俺は確かに死を感じた――イズミという人間は、あの時、死んだ。今の俺は……何なのだろうなあ」
どこかに思いを馳せるような口調だった。
「こんな姿でも。影から、紗耶たちを見守ることぐらいはできるだろう。それが俺に残された、ささやかな願いだ。それさえも、ジン。俺から奪うのか」
ジンは返事ができなかった。横目でタカヤを伺うと、やはり言葉に悩んでいるのか、難しい顔をしていた。チドリも目を伏せ、どこか悲しげにしている。

「……返事はないか。やはり、俺たちはもうわかりあえないない――喰わせてもらう。おまえたちの、ペルソナを」

額から血を流しながら、イズミが腕を振りかざしてジンへと走り出す。

手榴弾を使い切ったジンは、ペルソナで迎え撃とうと召喚器を構える。

その視界の隅(すみ)。

駐車場の入り口にある管理人詰め所の影に、ジンはあり得ないものを見た。

――どないする。

ためらったのは一瞬のみ。次の瞬間には、ジンは駆け出していた。

「こっちや、イズミ！」

囮(おとり)を装い声を上げ、ジンが走り込む先には小さな人影がある。

ジンはその人影を抱え込むと、追撃するイズミに向き直った。

「何をしようが無駄だ！」

抱え込んだ人影ごとジンを引き裂こうと、イズミのかぎ爪が振り下ろされる。

「――どうして」

イズミの腕は、ジンの頭まで数センチのところで止まった。

振り下ろされたかぎ爪から生じた風が、ジンの腕の中にいる幼子の髪を揺らす。

「影時間に。こんなところに」

呆然(ぼうぜん)としてて動かないイズミの横をすり抜け、ジンはタカヤたちのところに戻った。

ジンが抱いている幼子——ぐすぐすと泣きじゃくっている紗耶は、チドリを見るなり、抱っこをねだって手を伸ばした。

チドリはジンから紗耶を受け取り、地面に降ろした。

「……どうしたの」

すすり上げながら紗耶が訴える。

「……あの、ね。パパ、いない……の、どっか、行っちゃった、の」

「……イズミを捜しにきたのね」

こくこくと紗耶が頷く。その顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃなので、チドリは紗耶を降ろすとドレスのポケットからハンカチを取り出し、紗耶の顔をぬぐってやった。

「帰ってママを待ちなさい」

「ママ、寝て、起きないと、帰って、来ないの」

ひっくひっくとしゃくり上げながらも紗耶はそう説明した。朝まで母親は帰らないということだ。

「……それなら今だけ、一緒にいてあげる」

優しげに言ったチドリのドレスに、ひっしと紗耶がしがみついた。

紗耶は初めて見るタカヤに首をすくめた。子供の目には、タカヤは怖く映るらしい。

「影時間への適性——なるほど。イズミと生活していた影響ですか。ペルソナ使い同士は引き合うという説がありますが、他者に適性をもたらしてしまうこともあるのですね。

これは興味深い」
タカヤが珍しくにっこりと笑んで見せた。紗耶がチドリのスカートに隠れてしまう。
「嫌われてしまいました」
首を振るタカヤから視線を外し、ジンは改めてイズミを見やった。
イズミはジンを襲おうとした、その場所に突っ立って動かない。振り向きもしない。
「――イズミ。まだ、続けるか？　わしは構へんで」
ジンは、イズミの肩が再びわずかに震えているのに気がついた。
答えないイズミに、ジンは話し続ける。
「その時には、この子を楯にさせてもらう。卑怯（ひきょう）やと言いたければ言えばええ。それでもわしらは――」
「子供を楯にする。そんなことなど、おまえにできるわけがない――ジン」
イズミが振り返る。
「返せ、俺の娘を。紗耶。紗耶。こっちおいで」
かぎ爪でイズミは紗耶を手招きした。
びぐうっと大きく震え、紗耶がますます強くチドリにしがみつく。
「……お化け、怖いよぉ……ママ……ママぁ……パパぁ……怖いぃよぉ……」
再び、紗耶がぐすぐすと泣き出した。
「……紗耶？」

震える声でイズミが呟いた。そして気づく。
紗耶を誘っていた手が、異形だということに。
「――そうだったな。俺は、人を捨てていたっけな……そりゃ、怯えて当然だ」
わずかな間、変貌したことを忘れていたイズミが、自らを嘲笑うように、笑い出す。
「ふ、くく……くふふ……はは……はははははっ」
乾いた笑い声が、影時間の夜空にこだました。
ぴたりと嘲笑が止む。しん、と静まり返る。
「……おまえの言った通りだったよ」
イズミが口を開き直した。
「こんな手じゃ、その子の頭を撫でてやることも……」
できないよな。
消え入りそうなイズミの呟きに、深い悔恨をジンは感じた。
一瞬、視界が歪んだ――涙が滲みそうになり、ジンは顔を振った。
「……イズミ。もう一回、訊くで。まだ、やるか」
イズミは答えない。
ジンは、その沈黙を返事だと受け止めようとした。が、すぐに疑問を覚えた。
イズミの気配が一転したのだ。
異形と化してはいたが、イズミには人特有の気配があった。

だが、今は微塵（みじん）もそんな気配が感じられない。
強烈な殺気。
目も鼻もないイズミの顔で、口だけが裂けてこない。
歪んだ三日月のように口の両側を釣り上げ、ぬらりとした黒い顔が笑っている。
「お化け、やーっ!!」
直感的に紗耶が何かを感じ取り、酷く怯えた。
何に怯えているのか、ジンにはわかった。
「まさか。こないなタイミングで――」
「乗っ取られましたね、己のペルソナに」
タカヤにもチドリにも、状況はわかっている。
もう紗耶に触れることもできない。そう悟った瞬間にイズミは絶望し、その隙をペルソナに突かれた。こうなってしまったら、もう何もかもが手遅れだ。
「……………ほんとうに、馬鹿な人……」
チドリが、イズミだったものを哀れんだ。
主の魂までもを喰らったシャドウ喰らいが、獣のように四つんばいになって跳躍した。
恐ろしく疾（はや）い。一瞬でジンたちの真正面にやってくる。
シャドウ喰らいが、肉体ごとペルソナを喰らおうと顎門を開く。
ジンは召喚器を構えたが、モロス召喚が間に合いそうもない。

——くそったれ！
胸中で毒づいたジンの頭を、しかしシャドウ喰らいは噛み砕きはしなかった。
喉の奥から唸りを漏らしつつ、後ずさる。まるで、見えない首輪に透明な鎖をつけられ、引きずられるように。
「……イズミが、抵抗してる……」
チドリが、そう感じ取った。
「奴が？　まだ、あの怪物の中に残ってるんか!?」
まだ元に戻せるかもしれないというジンの希望は、しかしすぐに打ち砕かれた。
悲壮な顔で、チドリが呟く。
「もう、消えてしまいそう……あ、ダメ……消える……」
イズミの意志がシャドウ喰らいを抑えられる時間は、もうほとんどない。
ジンはそう察した。
——最後の奴の意地、無駄にはできへん。
覚悟を決めて、ジンはタカヤと目を合わせた。タカヤが頷いて返す。
「狙うんはあの額の傷や。火炎の一点突破で、中から奴を灰にする——ええな、チドリ、タカヤ」
「……わかった」とチドリが召喚器を頭に当てた。
紗耶がおどおどとチドリに「何するの」と訊ねる。

「……怖いことを終わらせるの……大丈夫。悪夢は終わるわ」

後は引鉄を絞るだけのジンは、ちらりとチドリを見た。

チドリが視線でOK(オーケー)と答える。

ジンとチドリが、同時に召喚器を使った。

カッとタカヤが目を見開く。

「出番や――モロス!!」

「おいで、メーディア!」

「来たれ、ヒュプノス!」

三体のペルソナが同時に召喚され、その全てが火炎を放った。

三条の炎が互いに絡まり威力を増し、先端を細く鋭く尖らせる。

炎の槍と化し、シャドウ喰らいの左額に向けて迸(ほとばし)る。

その先端が、まだ血を垂らしている傷痕に突き刺さる。

シャドウ喰らいが天を仰ぎ、咆吼を上げる。

次の刹那(せつな)、その全身が火柱と化した。

火炎旋風が発生し、竜巻と化した炎が空に噴き上がる。

夜空さえも炎は朱く染め上げ、あまりの高温に周囲のアスファルトが溶け出した。

その様は、まるで天に帰る火龍のようだった。

あり得ないほどの超高温の炎の中で、黒い異形の姿は崩れ、塵(ちり)となっていった。

炎を瞳に映す紗耶が、ぴくんと小さく身じろぎした。
意識を失ったのか、くたりと紗耶がアスファルトに横たわる。
「……どうしたの？」
チドリが訊ねた次の瞬間。紗耶は小さな棺と化した。
「象徴化――影響を及ぼしていたイズミが消えたために、この子のかりそめの適性も、失われましたか」
タカヤが、突然の紗耶の象徴化をそう説明した。
いつもなら聞き逃すはずのないタカヤの言葉を、ジンは聞いていなかった。
ただ、じっと友を空へと送る炎を見据える。
それは幻聴だったかもしれない。
しかし確かに、ジンはイズミの最後の声を聞いた。

――悪い。手間、かけた。
――迷惑ついでに、せめて今夜だけでも、その子を頼む。

見守るジンたちの前で、炎の勢いが失せていく。
火炎竜巻は徐々に細くなり、やがて、一筋の煙を残して消滅した。
ぐずぐずに溶けたアスファルトに、ジンは刺さっている物を見つけた。

靴裏に熱を感じながらも、無視して拾いに行く。
「――これ。溶けへんかったのか」
じゅうと指先が焼けるのも構わずに、ジンはそれを拾い上げた。
炎にあぶられて、すっかり黒ずんでしまったナイフ型の召喚器。
折りたたもうとしたが、歪んでいて無理だった。刃もぼろぼろになっている。
そのいびつさは、イズミの辿った末路をジンに思わせた。
ナイフの帯びていた熱が冷めていく。
すっかり冷たくなるまで、ジンは手の中のナイフを見つめて、立ち尽くしていた。
「……阿呆が」
ジンは役立たずになったナイフ型召喚器を無造作にズボンのポケットに入れると、紗耶が象徴化した棺に目を向けた。
影時間が終わる前に、紗耶をアパートに置いてくるくらいしか、ジンに出来ることはない。
「――朝まで一緒にいてやるわけには、いかんな……」
紗耶が目を覚ました時。いないイズミのことを、どう説明していいのかジンにはわからなかった。
だからと言って、夜明けまで誰も帰ってこないアパートに、紗耶一人を置き去りにすることなど、ジンにはできない。

「タカヤ。どないしたらええと思う？」
不甲斐ないと思いつつ、ジンはタカヤに判断をゆだねた。
タカヤが明後日の方向に視線を投じる。
「彼に、お願いするとしましょうか」
「彼？」
ジンはタカヤの視線の先を見やった。
「――いつからそこにおったんや、おまえ」
駐車場の端に、ニット帽を目深に被ったコート姿の男がいた。荒垣真次郎だ。
「トランクを爆発させたところからだ」
荒垣が、ばつの悪そうな顔をした。
「街中で何発も爆弾使うのはどこのバカだと様子を見に来たんだが……見ていたなら手助けしろとでも、言いたかったか」
「阿呆か。そないなこと、言うわけないやろ。これはわしらの問題やったからな」
余計な横槍を入れなかった荒垣に胸中で感謝しつつ、ジンは悪態をついた。
「でも。どうしても言うんなら、頼んでやらんこともない」
「何をだ」と荒垣。ジンは真面目な顔をした。
「この、ちっこい棺。交番に預けてきてもらえへんか。影時間が明けたらこの子を保護してもらいたいんや、警察に」

「そんなこと、自分で――そうだったな。おまえらじゃ、難しいか」
ストレガは闇の住人だ。警察と関わり合いになると、色々問題になると荒垣が察した。
「しょうがねぇ。遠いが、モールまで行けば知り合いの警官がいる。預かってやるよ」
ジンは紗耶の棺を拾いに行き、抱え上げた。思いの外、重い。
――これが、イズミが守ろうとしたガキの命の重さなんやな。
「こない小さいのに、やたら重いわ」
ブツブツ言いながら、ジンは近づいてきた荒垣に棺を渡した。
「ぜっったいに、落とすなや？」
「任せろ」
荒垣は丁寧に棺を抱え込むと踵を返したが、去り際に足を止めた。
「――おまえが調べていた、港区での事故のことだが」
どこか迷いを感じさせる口調で、荒垣が続ける。
「俺が、何か知っているかと聞いたよな」
「そのことなら、もうええんや」
ジンは肩の荷が降りた気がした。
「……終わったことや。依頼者は、もうおらん」
ただそれだけの言葉で、荒垣は何かを感じ取ったらしい。
「……悪ぃ。恩に着る。あの事件は、いずれ俺が責任を取る」

自白も同然の言葉だった。

イズミの依頼の復讐対象は、やはり荒垣だった。

「わしらにはもう関係ないことや、好きにせい。ほな、それ頼むで」

ジンは静かに告げると、タカヤとチドリに目配せし、アジトに帰るために振り返った。

影時間の夜空の燐光に浮かび上がる、いびつな街の輪郭の向こう。

遠く、今夜も美しく荘厳(そうごん)に。

タルタロスは、そびえている。

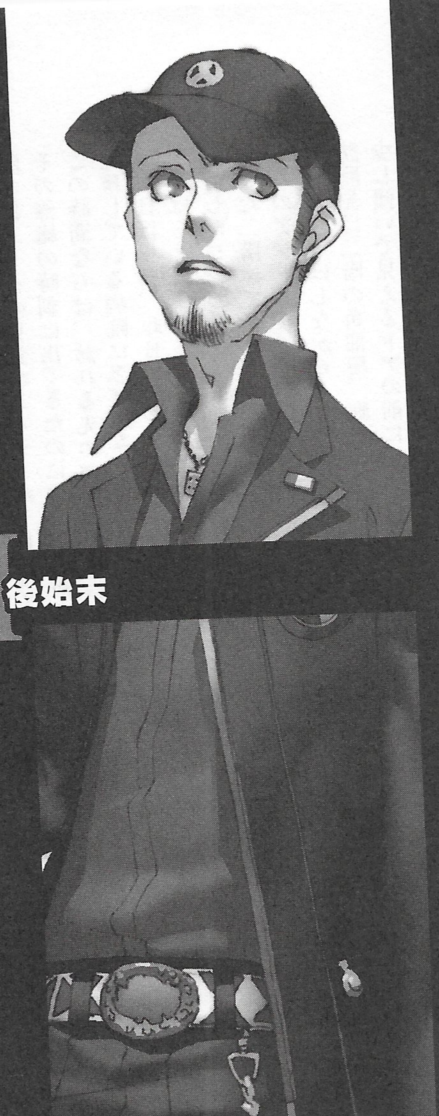
その怪異の塔が、ジンにはイズミの墓標に見えた。

「……似合いの墓や。墓守は、まかせとけ」

P3

PERSONA3

VII 後始末



影がアスファルトに焼き付きそうな炎天下を、ジンは歩いていた。
暑い。蝉さえ鳴くのを休んでしまうほどに、暑い。
こんな真っ昼間に一人で出歩くことなど、ジンは滅多にない。
闇の住人。その自覚があるジンだ。日中は本来、無縁のはずの時刻である。
その無縁の時刻に出てきたのには、理由があった。
この時間ならば、訪れる先の部屋に人はいない。〈影時間〉にジンは、訪問先の住人が勤務している病院に忍び込み、勤務表を確かめてきた。
一昨日は夜勤、昨日は休日。今日は日勤のはずだ。
――ほんまに。看護師さんってのは大変やな。
同情したジンの目に、訪問先が見えてきた。
古びた二階建てのアパート。陽の下で見ると、ますます傷みが目につく。
「うちのアジトよりは、なんぼかマシやけどな」
独り言をこぼしながら、錆びた階段に向かう。やけに足音が耳につく。
訪問先は二階の角部屋。廊下の奥に向かってジンは進む。
少し傾いで見えるドアの前に、ジンは立った。
「この部屋か――表札は、ないな」
一昨日の夜、ジンは玄関前まで来なかった。だが、この部屋にチドリが入るのを階段下から見ていたから、部屋を間違えてはいないはず。

新聞は取っていないのか、それとも今日の分は回収済みなのか、壁に針金でぶら下がっている汚い新聞受けは空だった。

「ここでええか」

ジンはズボンのポケットに手を突っ込み、紙にくるんだ細長い物を取り出した。

チドリからもらったスケッチブックの紙に、包んでいる物。

それは、イズミのナイフ型〈召喚器〉——遺品だった。

これを持つべき人間は、わしやない。

イズミを葬ったあの夜から今朝までろくに眠らず考え続け、そう結論づけてジンはここに来たのだった。

「ほな、さいならや」

呟き、紙包みを新聞受けに入れた。ことりとやけに軽い音がした。入れた物が遺骨だとしても同じような音がするのかもな、とジンは思いながら微苦笑した。

「……あの。ジンさんですよね」

横手から女の声で名を呼ばれ、ぴくりと身じろぎしてジンは振り向いた。

二十代半ばと思しき小柄な女がいた。ありきたりなジーンズに少しくたびれたTシャツという姿で、片手に小さなバッグを提げている。化粧は濃くなく、目の下にかすかな隈が浮かんでいる。

容姿の特徴をジンはイズミから訊いていなかったが、不思議と誰かわかった。

何かの用で、昼休みを使って帰ってきたようだ。これはジンの予想外だった。

会ってしまったものは仕方がないと、ジンは女に向き直った。

「あんた……真希（まき）さんか」

女――真希が小さく笑った。どこか寂しげな笑顔だった。

「いつも、お話はイズミ君から聞いていました……だからでしょうね。初めてなのに、そんな気がしません」

イズミは、真希のことをあまりジンに話さなかった一方で、ずいぶんとジンのことを真希に話していたようだった。

「そない言われてもな……わしはやっぱり、初対面の気しかせえへん」

「それは、そうでしょうね」

やはり寂しげに、真希が笑った。

ジンはどういう顔をしていいのかわからずに、ただ無表情で立っていた。

不意に、真希が深々と頭を下げた。

「イズミ君が、お世話になりました」

お世話になっていますではなく、過去形だった。

その言い方からジンは理解した。

真希が、イズミが死んだと気づいていると。

「……仇（かたき）に、頭なんぞ下げるもんちゃうで」

ゆっくりと真希が顔を上げる。その目元には涙が滲んでいた。
「わしが、あいつを殺したんや。恨んでくれて、かまへんよ」
ふるふると真希が首を横に振る。その動きで涙が頬を伝った。
「いいえ。あんな薬を普段から飲んでいたんですから。苦しみ抜いて死ぬよりは……」
「そう言えば、あんたは知っとったな……あの薬の中身」
「はい。知り合いの薬剤師に、個人的にお願いして調合してもらってましたから」
真希は、看護師だ。薬の専門家ではないが、素人よりははるかに薬の知識がある。制御剤の危険性にも気づいていて、当然だった。
おそらく何度か、イズミに服用をやめるよう言ったのだろう。
そしてその度、これを飲むのをやめたら俺は死ぬ、と言われたのだろう。
制御剤の服用を続けるということは、緩慢な自殺に等しい。
それを真希もイズミもわかっていて――どうしようもなかった。
「――そか。知っとったか」
「夜中によく、血を吐いてましたから……とても苦しそうに。私たちに気づかれないように、うめきさえも漏らさずに……嫌だ、ごめんなさい。こんなみっともない顔……」
ぼろぼろと涙をこぼす真希が、慌ててバッグからハンカチを取り出して顔を押さえた。
ひとしきり嗚咽をこぼした後、堰を切ったように真希が話し始めた。
「イズミ君は言ってました。この街で俺が戻らなかった時は、たぶん、ジンさんが俺の

後始末をしてくれたはずだって。ジンさんには罪なんかなくて、俺がただ迷惑をかけるだけだから、絶対に恨むようなことはしないでくれって——そう、言ったんです。それでも……それでも……ごめんなさい、やっぱり、私は——あなたのこと……」

真希が声をつまらせた。ジンは片手で眼鏡の位置を直した。

「せやから言うたやろ。恨んでくれて、かまへんと……やけどな。わしのこともイズミのことも、きれいさっぱり忘れてしまったほうがええ。あんたには、守らなあかんあの子が、おるんやから」

言って、歩き出す。顔をハンカチで覆ったまま立ち尽くしている真希とすれ違う際、ジンは言い加えた。

「もしやとは思うが、あんた。緑色の夜空、見たことあるか?」

真希は答えなかった。ただ嗚咽をこらえて肩を震わせているだけだった。

影時間を、真希はおそらく知っている。

真希は、イズミが夜中に血を吐いていたと言った。ジンの知るイズミならば、真希に心配をかけないよう、可能な限り血を吐くのを影時間だけにしていたはずだ。

娘の紗耶(さや)よりも早く、イズミと長く一緒にいた影響が出ていたのやろうな、とジンは考えた。そして真希の得てしまった適性は、紗耶と違って一時的なものではないだろうことも想像できた。

だからと言って、ジンが真希にしてやれることなど何もない。

「……今の質問も、忘れてくれ。ほな、もう二度と会うこともないやろ」
あの子によろしくな。
言いかけた言葉を飲み込んで、ジンはアパートを後にした。

アジトへの帰り道で、ジンはチドリと出会った。
「……このクソ暑い中、フル装備でどこ行くんや」
チドリの服装は、普段通りのゴシックロリータ様式の白いドレス。
改めて見ても、真夏の炎天下を出歩くのは自殺行為ちゃうんかとジンには思えたが、チドリは汗一つかいていない。
「スケッチ。ポートアイランド駅のほうに行ってみる」
チドリは片手にトートバッグを提げている。中身はスケッチブック等の画材だ。
「何も、こないに暑い時に出かけることもないやろ」
「……私の好きにさせてよ」
チドリは機嫌が悪そうだった。
その理由をジンは考えてみた。思い当たることは一つしかなかった。
「おまえまで、イズミのことを気に病むことなんぞない。とっとと忘れてまえ」
わざと軽い口調でジンはそう言った。
真っ直ぐな目でチドリに見つめ返され、たじろいでしまう。

「な、何や。わしの顔に何かついとるか」
「…………ジンは。忘れられると言うの」
ジンは目を伏せた。
死んだとばかり思っていた友との思わぬ再会。
その友の、ある意味では理不尽で、ある意味では正しい、避けようのなかった死。
わずか二週間ほどだったが、忘れてしまうにはあまりに長い日々だった。

『俺だ、俺。何年ぶりか——俺の顔、忘れたとか言わないよな』

そのイズミの軽い調子の声が、今でもジンの耳の奥に残っている。
ぼそりとジンは呟いた。
「忘れるわけあるか、ボケ」
その言葉は、幻聴（げんちょう）のように聞いたイズミの声に返したものだったが、チドリは自分への返事と受け取ったらしい。
「それなら、忘れろなんて言わないで」
不機嫌そうにチドリは言い、ジンを残して歩き去ろうとした。
振り向き、ジンはその背に声をかけた。
「おまえは、変な奴にひっかかるんやないで」

チドリが立ち止まって振り返る。

「それって男のこと?」

「せや。恋愛するなとは言いたくないんやが——イズミみたいに、惚れた相手がいたために道を踏み外すような、そないなことは……もう見たくないからなぁ」

ジンは、自分でも不似合いなほどに感傷的なことを言っているとわかっていた。

「かかわった女のために生きようとして、死ぬ……阿呆な死に方や……ほんまに阿呆や、イズミの奴……」

ジンの困り顔に、珍しくチドリがかすかに笑みを見せた。

「私の絵をわかってくれる人が現れたら、考える」

チドリの言葉を聞き、ジンは安堵し気分が落ち着いた。

「そんなら安心や」

「……どういう意味」

チドリの顔から笑みが消える。

氷のようなチドリの眼差しに気づかず、ジンは思ったままを口にした。

「薄気味悪いだけのおまえの絵を理解する奴なんぞ、おらんやろ? 心配せんでも彼氏なんぞできへん、そういうことや」

じゃらんとチドリの袖の中で音がした。

ジンが気づいた時には、チドリの手には手斧があった。

「じょじょじょじょ、冗談や！」
ジンは露骨に狼狽し、両手を顔の前で振った。
「きっと素敵な出会いがおまえを待っとるし、そないな物騒なモンしまって、スケッチ行ってこい」
手品のように、チドリの手から手斧が消える。
くるりとチドリが身を翻した。ふわりとスカートの裾が踊る。
不快感を背中に漂わせ、すたすたと立ち去るチドリの背に、ジンは小さな声で告げた。
「……でもな。ほんまに、変な奴なんかに引っかかるんやないで」
チドリの、ドレスの白が目に眩しい。
ジンは目を細めた。
「やはりわしらは、闇の中がお似合いや」

この日。
運命の出会いがチドリを待っていると、見送るジンは知らない。

ペルソナ3　シャドウクライ　完

あとがき——あるいは「ぜんしゃとつげきーっ！」

ペルソナ3「オワリノカケラ」がなかなかに好評で、こうして二冊目のノベライズがお届けできました——とっってても嬉しいです！

ども、ご無沙汰しております。藤原健市です。

さてさて。フェスが発売されて、ドラマCDやアレンジサントラ、フェスサントラと続々リリースされて、ますます盛り上がるペルソナ3。

藤原も、フェスの後日談「Episode Aegis」をクリアしました。

この後日談で新登場したメティスが、メティスが可愛いっ。

何ですか、このツンデレシスコンロボ妹。色んな意味で無敵じゃないですか。

拗ねた時に、かしゅんと降りるフェイスカバーが、ああもう堪りませんっ。

これ以上はネタバレになるので控えますが、さて、このフェス後日談。×○時間ほどで終わると聞いていたのですけれど、藤原はクリアに△□時間近くかかってしまいました……。実際は、もっと時間がかかっているはず。セーブポイントから全滅するまでの時間は、セーブデータに記録されませんからね。

どうやら絶望的に戦闘のセンスがないようです。

「やあ、イゴール。また来たよ」と、テレビに向かって挨拶する癖ができました。

――ほんと、幾度ベルベットルームに強制連行されたことやら。

ついつい見た目でペルソナを選んでしまい、スキルが変に偏(かたよ)ってしまってボス戦で大後悔――は、しません。だって、アリス可愛いじゃないですか、アリス。

そんな藤原の本棚にも、各社のアンソロジーコミックスやらCDやらが、ずらーっと並んでおります。いやぁ、嬉しいけどお財布には痛いなぁ。

この本を手に取ってくださった貴方の棚も、同じような感じじゃないですか？

そんなコレクションの片隅に加えていただけたら大変嬉しい、このノベライズ。

ドラマCDを聞いていると「こういう短編タイプの日常劇も書いてみたいな」と思いますが、今回は「オワリノカケラ」同様に長編仕立ての一本です。

メインを張っているのは、特別課外活動部〈S.E.E.S.〉と対立しているあの連中、〈ストレガ〉です。

どう考えても社会不適合者なタカヤとチドリの二人に振り回されている――もとい、二人の生活を支えているっぽいジンが主役の、夏の物語。

こう書くと何やら甘酸っぱい一夏(ひとなつ)の出来事のように思われるかもしれませんけれど、その手のお話ではありません。

その手のお話にしようかなと考えなかったわけでもないのですが、今回は、割とシリ

アスです。ラブラブっぷりは、ゲームの順平×チドリでお楽しみくださいね。フェスには追加されたイベントがあるという噂ですし！
　藤原はフェスの「Episode Yourself」をまだプレイできていないんですが、この噂を聞いて、プレイがますます楽しみになりました。
　無印版ペルソナ3で何度か挑んで諦めた、エリザベスにも今度こそ勝利したい。
　でも今度もペルソナチェンジで間違えて「メギドラオンでございます」と吹っ飛ばされる気が……エリザベスに陵辱されるなら、それもいいかなあと思ってしまったり。
　いや、藤原はMではありませんよ？　そんな略号を使ったオリジナル小説も書きましたが、それはまた別のお話ということで。

　そんなこんなで、ストレガとなって〈S.E.E.S.〉と闘う「Episode Strega」なんて追加ディスクが発売されるといいなぁと本気で夢見る藤原が、ストレガ愛満載でお届けしました、この「シャドウクライ」。
　お手にとっていただきまして、ほんとうにありがとうございます。
　どうか、楽しんでいただけますように。

二〇〇七年初夏　藤原健市

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン　ファミ通文庫編集部
藤原健市　先生
副島成記　先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/fb/

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。

エンターブレイン カスタマーサポート　**0570-060-555**
（受付時間 土日祝日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス：**support@ml.enterbrain.co.jp**

ファミ通文庫

ペルソナ3 シャドウクライ

二〇〇七年七月一二日　初版発行

著者　藤原健市（ふじわらけんいち）
発行人　浜村弘一
編集人　青柳昌行
発行所　株式会社エンターブレイン
〒一〇二-八四三一　東京都千代田区三番町六-一
電話　〇五七〇-〇六〇-五五五（代表）
編集　ファミ通文庫編集部
担当　川﨑拓也
デザイン　田村宏（海月デザイン）
写植・製版　株式会社オノ・エーワン
印刷　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

P7
1-2
702

©ATLUS CO.,LTD.1996,2006 ALL RIGHTS RESERVED.©Kenichi Fujwara Printed in Japan 2007
ISBN978-4-7577-3595-8